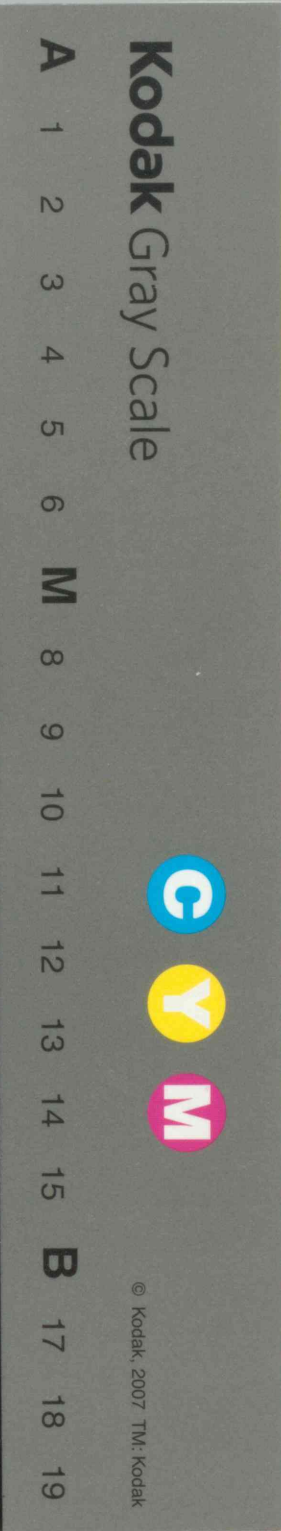
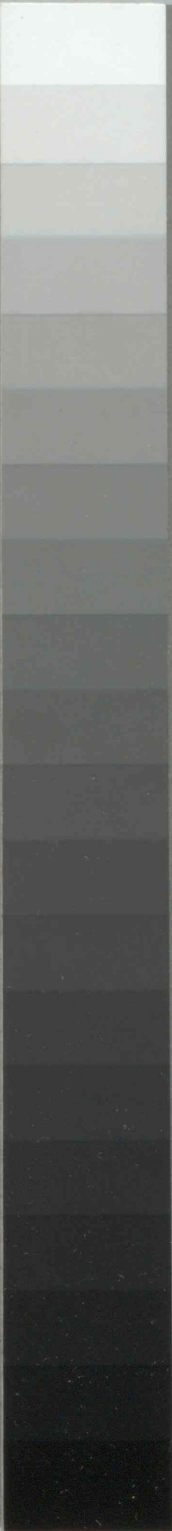
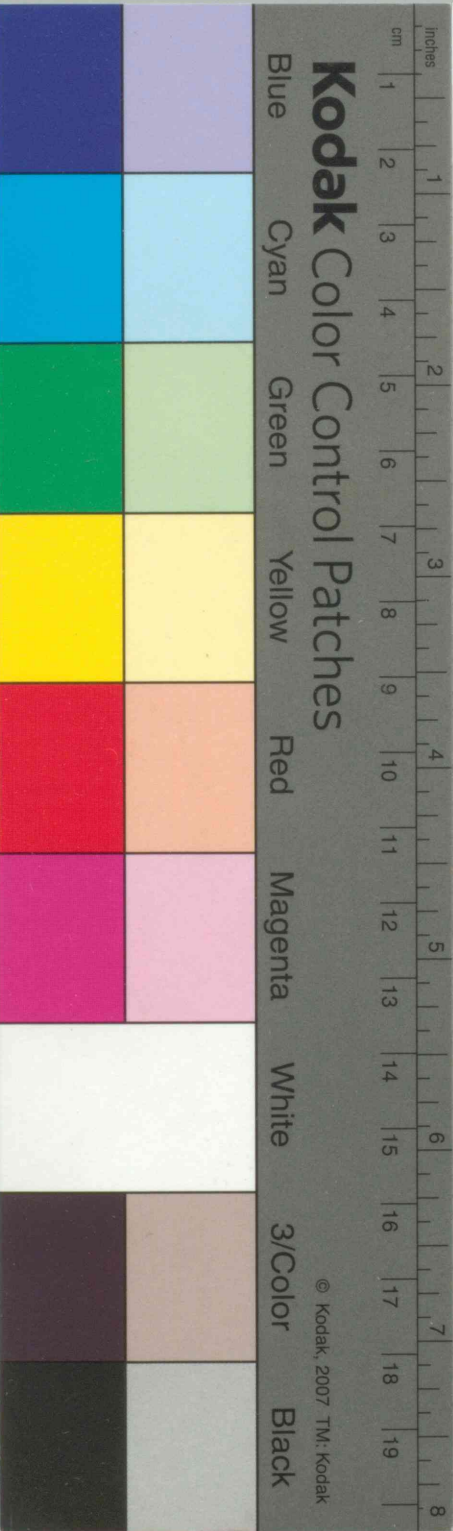


中等教育 日本文典

74. 10. 1971

全

4a
815
大2



© Kodak, 2007 TM: Kodak

41872

教科書文庫

4
815
41-1907
2000
73173

72



資料室

中等
教育
日本文典



42
815
大2

中等教育日本文典



中等教育日本文典例言

此書は、尋常中學教科中の國語文法の教課用に、こて作れるものなり。又、尋常師範學校の同科にも適用すべし。立案も、普通教育を目的としたれば、平易簡明なるを旨とせり。

此書と同時に、廣日本文典といふを發刊せり、此書を廣益敷衍したるものなり。又、廣日本文典別記といふをも發刊せり、考證餘論等を輯録したるものなり。共に、此書の教師用として必讀すべく、授業の際、局部に應用し、敷衍伸縮して、可なり。但、生徒には、迷ひを生ずべければ無用なるべし。

全篇の紙數、稍多きに過ぐるが如き批難もあるべけれど、教授の方法にて、自ら救ひ得べきなり。それらの事は、別記中に説きおけり。

すべて、此書の例言にいふべき事にて、廣文典又は別記の例言
序論中に譲れる多し、往きて見るべし。

中等
教育
日本文典目次

總論……………一頁

文字篇……………三

假名……………三

平假名(以呂波歌)……………四

片假名(五十音圖)……………五

異類ノ假名……………六

符號字……………六

單純音、成熟音、母韻、發聲……………七

半母韻……………一〇

濁音、半濁音……………一一

本濁、連濁……………一三

拗音……………一三

鼻聲……………一五

促聲……………一六

轉呼音……………一六

連聲……………一八

音便……………一九

假名遣……………二一

漢字……………二二

畫……………二二

偏旁、冠……………二三

楷行、草、篆、隸、明朝……………二四

音訓……………二四

字音ノ種類……………二五

吳音、漢音、唐音……………二六

單語篇……………二九

八品詞……………二九

名詞(體言)……………三一

固有名詞、普通名詞……………三二

代名詞……………三二

人代名詞(自稱、對稱、他稱、不定稱)……………三三

指示代名詞(近稱、中稱、遠稱、不定稱)……………三五

數詞……………三六

動詞(用言、作用言)……………三八

自動詞(無對、有對)……………三九

他動詞(單對、複對)……………四〇

語根、語尾、活用……………四二

第一表(動詞ノ語尾、活用法)……………四三

正格活用、變格活用……………四三

四段活用……………四四

上二段活用……………四五

下二段活用……………四六

上一段活用……………四六

下一段活用……………四七

加行變格活用……………四七

佐行變格活用……………四八

奈行變格活用……………四九

良行變格活用……………四九

法……………五〇

終止法……………五一

連體法……………五三

不定法……………五四

中止法……………五四

連用法……………五五

名詞法……………五六

命令法……………五六

形容詞(形狀言)……………五七

第二表(形容詞ノ語尾活用法)……………五七

志幾活用……………五八

志志幾活用……………五八

法……………五八

終止法……………五九

連體法……………六〇

中止法……………六〇

副詞法……………六一

語根……………六二

助動詞……………六三

第三表(助動詞ノ語尾活用法)……………六三

第四表(動詞ト助動詞トノ連續,其一).....六三

第五表(同,其二,能相,所相,使役相,敬相).....六三

第六表(同,其三,現在,過去,未來).....六三

第七表(助動詞ト助動詞トノ連續).....六三

能相(る,らる).....六四

勢相(る,らる).....六六

使役相(す,さす,まむ).....六七

敬相(敬語).....六八

指定(なり,たり,べし).....七〇

打消(ず,まじ,じ).....七二

現在, 過去(半過去,大過去) 未來(四様).....七三

過去(つ,ぬ,たり,せり,けり,き).....七六

第八表(四段活用ノ一種ノ半過去).....七八

未來(む,けむ).....八〇

推量(らむ,めり,まし,らし).....八〇

詠歎(なり).....八一

比況(ごとし).....八二

副詞.....八三

接續詞.....八五

且爾乎波.....八五

第一類, 名詞ニツクモノ(が,の,の,がつ,に,を,と,へ,より,から,まで).....八八

第二類, 種々ノ語ニツクモノ(は,ば,も,ぞ,なむ,し,こそ,だに,すら,さへ,のみ,ばかり,や,か).....九六

第九表(動詞,形容詞,助動詞ト,や,か,トノ連續).....一〇四

第三類, 動詞,形容詞,助動詞ニツクモノ(ば,ども,と,ども,に,を,が,て,(に,て,きて,して,にして,として)で,つ).....一〇五

第十表(動詞,形容詞,助動詞ト,ば,ども,と,ども,トノ連續).....一〇五

感動詞、……………一二二

他語ノ上ニ用キルモノ(あ、あゝ、あら、あな、あはれ、や、やあ、やよ、
さかに、いで、さび、あはや、すは)……………一二三

他語ノ中間、又ハ、下ニ用キルモノ(や、も、は、を)……………一二五

他語ノ下ニ用キルモノ(な、よ、か、かも、かな、が、かも、がな、ね、な、
なむ、かし)……………一二七

熟語、……………一二一

疊語、……………一二四

接頭語、……………一二七

接尾語、……………一二八

名詞ニ接シテ名詞トスルモノ(ら、な、せ、とも、たち、ばら、かた、
とち)……………一二八

他語ヲ名詞トスルモノ(げ、さ、み)……………一二九

他語ヲ動詞トスルモノ(め、く、め、か、す、が、る、ぶ、ぶ、る)……………一二九

他語ヲ形容詞トスルモノ(が、ま、し、た、し、ら、し)……………一三〇

他語ヲ副詞トスルモノ(な、が、ら、も、の、か、ら、も、の、ゆゑ、
す、が、ら、が、て、ら、が、て、に、か、ら、に、み、ご、と、に、ま、に、く、ば、か、り、
が、り、づ、な、ど)……………一三一

文章篇……………一三七

主語、説明語、……………一三七

客語、……………一三八

修飾語、主部、客部、説明部、……………一四〇

枕詞、……………一四四

聯構文、……………一四六

挿入文、……………一四八

倒置句、……………一四九

言掛、秀句、……………一五一

結法、……………一五二

尋常ノ結法……………一五二

「ど、なむ、や、か」ノ結法……………一五四

「こそ」ノ結法……………一五七

命令、及ビ、禁止ノ結法……………一五八

呼掛ノ結法……………一五九

挿入文ノ結法……………一六〇

聯構文ノ轉結……………一六〇

言掛、秀句ノ轉結……………一六一

呼應……………一六一

 自他ノ呼應……………一六二

 能所ノ呼應……………一六二

 時ノ呼應……………一六三

 反語ノ呼應……………一六四

 特性副詞ノ呼應……………一六八

畧語、畧句……………一七二

解剖(文脈ノ解剖、語脈ノ解剖)……………一七六

文中ノ符號、闕字……………一八四

中等
教育
日本文典

◎總論

總論

第一節

言語

人ノ聲音ノ、意義アルモノヲ、言語トイフ。人ハ、言語ニ由リテ、其思想ヲ述ブ。言語ヲ述ブルニ、法則アリ、人々、其法則ニ由リテ、相語リテ、互ニ能ク其思想ヲ通ズ。

字、文字

文、文章

文法、文典

言語ヲ、物ニ書キツクル標^シヲ、字、又ハ、文字トイヒ、書キツラチタルモノヲ、文、又ハ、文章トイフ。言語ニ法則アルガ故ニ、文章ニモ法則アリ、其法則ヲ、文法トイヒ、文法ヲ記シタル書ヲ、文典トイフ。

日本ノ言語ハ、古ヘヨリ、年代ヲ歴ルニ隨ヒテ、屢變遷シキ。然レモ、今、常ニ文章ニ用井ルハ、今ヨリ八九百年前ノ言語ナリ。

此ノ故ニ、文法モ、其年代ノ言語ノ法則ニ據ル。
 世界ノ各國ニ、各言語アリテ、相異ナリ、コレヲ、其國ノ國語トイフ。
 サレバ、各國ノ文法モ、隨ヒテ相異ナリ。此ノ書ハ、日本國語ノ文法ヲ記シタルモノナレバ、日本文典ト名ヅク。書中ヲ別チテ、三篇トス、文字篇ト、單語篇ト、文章篇トナリ。

○文字篇

文字篇

第二節

文字篇ハ、文字ノ形ト音トヲ講ズ。

假名

○我が國ニテ用井ル文字ニ、二類アリ。其一ヲ假名トイヒ、其

漢字

一ヲ漢字トイフ。假名ハ、我が國ノ文字ナリ。漢字ハ、支那國ノ文字ナルヲ、借リテ用井ルモノナリ。我が國ノ言語ノ、假名ノミニテモ、記スコトヲ得レモ、古來、習慣トシテ、假名ト漢字トヲ雜ヘテ用井ル。

○假名

假名

第三節

假名ノ數ハ、スベテ四十七アリテ、其體ニ、二種アリ、其一ヲ平假名トイヒ、其一ヲ片假名トイフ。

第六節 異類ノ假名
 ○異類ノ假名 假名四十七ノ外ニ、尙數個ノ假名アリ。
 平假名 ん、づ、と(こと) へ(より) へ(なり)

片假名 ン、ツ、ト(コト) 中(トキ) 中(トモ) ソ(シテ)
 「んづ」ノ事ハ、後ニイフベシ。其他ハ、一字ニテ、二音ヲ標スルモ
 ノニテ、書寫ノ便宜ニ用ヰラル、但シ、文句ノ中末ニノミ記シテ、
 首ニ用ヰルヲナシ。

第七節 符號字
 ○符號字 同シ假名ヲ、一字、又ハ、二字以上重ネテ記スルニ、下
 ノ假名ニ代用スル符號アリ、コレヲ送字、踊字、ナドイフ。

あ、(父) やまく、(山々) かへすく、(返々) くりかへしく、(繰返)
 ハ、(母) カハく、(川々) カハルく、(代々)

第八節
 ○又、一音ノ韻ヲ延クニ用ヰル符號アリ。
 アルコール、(酒精) ビーター、(彼得)

第九節 聲、音
 ○單純音 成熟音 母韻 發聲 氣息ノ、聲帶ニ觸レ、顫動シ
 テ耳ニ聞ユルモノヲ聲トシ、聲ノ一氣息ニ成レルモノヲ音ト
 ス。

第一〇節 單純音
 ○阿行ノ五音ハ、口ヲ開キテ聲ヲ發スレバ、單純ニ出ヅ、因テ、コ
 レヲ單純音ト名ヅク。口ヲ、廣ク開キテ聲ヲ發スレバ、あトナ
 リ、狭ク扁ク開キテ發スレバ、いトナリ、狭ク圓ク開キテ發スレ
 バ、うトナル。「え」「ハ」「あ」「い」「ト」ノ間ニ發シ、お「ハ」「あ」「ト」「う」トノ間ニ
 發ス、而シテ、共ニ、口ヲ開ク「う」「い」「う」「ヨリモ廣シ。

第一一節 發聲
 ○加行以下、九行ノ諸音ハ、其行毎ニ、其行中ノ五音ヲ呼ビ起ス
 一種ノ聲アリ、コレヲ發聲ト名ヅク。發聲ハ、未ダ音ト成ラズ、

成熟音
 單純音、其韻トナリテ、相熟シテ、始メテ音ト成ル。此ノ故ニ、加
 行以下ノ九行四十五音ヲ成熟音ト名ヅク。單純音ハ、斯ク、發

母韻

第二節

發聲ノ別

聲ノ韻トモナレバ、母韻ノ稱モアリ。

○發聲ハ、氣息又ハ、聲ノ、口内ノ諸機關ニ關係シテ起ルモノナリ。

加行ノ發聲ハ、喉頭ト舌根トニ激シテ發ス、而シテ、五母韻ト配合スレバ、此ノ行ノ五音ヲ成ス、口ノ開合ノ狀ハ、五母韻ニ同ジ。 (下、皆、之ニ倣ヘ) 佐行ノ發聲ハ、舌尖、前齒ニ觸レテ發ス。多行ハ、舌尖、上齶ニ當リテ發ス、但シ、今世ノ發聲ニテハ、ち、つ、二ハ、上齶ニ當ルコト弱シ。奈行ハ、舌尖、上齶ヲ撫デ、鼻ニ通ジテ發ス。波行ハ、喉戸ニ觸レテ發ス、但シ、今世ノ發聲ニテハ、ふ、獨リ、唇ニ觸ル。(奥羽、北陸、山陰、ノ土音ニテハ、五音トモニ、唇ニ觸ル。) 末行ハ、重ク唇ヲ閉開シテ、鼻ニ通ジテ發ス。也行ハ、喉頭ト舌面トニ關シテ發ス。良行ハ、舌尖、上齶ヲ摩擦シテ發ス。和行ハ、輕

ク唇ヲ開閉シテ發ス。

w r y m p b (f) n d t z s g k h (ts)	發聲母韻
わ ら や ま ば ば は な た ざ さ が か wa ra ya ma pa ba (fa) na da ta za sa ga ka ha	あ
ゐ り い み び び ひ に ぢ ち じ し ぎ き (wi) ri (yi) mi pi bi (fi) ni (di) (ti) zi (si) gi ki i i hi zi tsi shi	い
う る ゆ む ぶ ぶ ふ ぬ づ つ す ぐ く (wu) ru yu mu pu bu fu nu (du) (tu) zu su gu ku u zu tsu	う
ゑ れ え め べ べ へ ね で て せ せ げ け (we) re (ye) me pe be (fe) ne de te ze se ge ke e e he	え
を ろ よ も ぼ ぼ ほ の ど と ぞ そ こ こ (wo) ro yo mo po bo (fo) no do to zo so go ko o ho	お

單純音

成熟音

假名ハ、一音、一字形ヲ成ス、(但シ、拗音、鼻聲、促聲ハ、然ラズ、後ニイフベシ)サレバ、發聲ト母韻トノ別ハ、無形ニテ説クトナリテ、曉リ難キヲ覺ユ、因リテ、今、羅馬字ヲ借リテ、右ノ表ニ示セリ、(濁音、半濁音ヲモ、表中ニ加フ、後ノ第一六第一七節ニモ、此表ヲ参照スベシ)

各行ノ發聲ヲ概別スレバ、左ノ如シ。

(喉) k, g, h, y, (舌) s, z, t, ts, d, n, r, (唇) f, b, p, m, w,

各發聲、諸機關ニ關係ヲ起シテ、母韻ト合ヒテ音ト成ルキハ、喉音、舌音、唇音等ノ名アリ。

第三節 半母韻

○半母韻。五十音圖ノ中ニテ、阿行ノ「い」、「う」、「え」、「ト」也、行ノ「い」、「え」、「ト」、和行ノ「う」、「ト」、同形ノ假名、重出ス。此ノ各二音ハ、各相似通ヒタレバ、古來、同一ノ假名ヲ相通ハシテ用井來タリ、サレド、其實阿行ノ音ハ、單純音ニテ、也行、和行ナルハ、發聲アル成熟音ナレバ、相異ナリ。

然レモ、也行ノ發聲ハ、甚ダ阿行ノ「い」ニ似、和行ノ發聲ハ、甚ダ阿

第四節

行ノ「う」ニ似テ、更ニ、之ニ母韻ヲ添ヘテ、二母韻、相重ナリテ發スルモノ、如シ。サレバ、此ノ二行ノ音ハ、拗音ノ「きや」、「ぢゆ」、「ちよ」、「くわ」等、第一九、第二〇節ニ委シ、ノ韻トモナル。此ノ故ニ、也行、和行ノ音ヲ、半母韻トモ名ヅク。

○又、今世ノ發音ニテハ、和行ノ「ゐ」、「ゑ」、「を」、「ハ」、其發聲、默シテ、母韻ノミ發シ、阿行ノ「い」、「え」、「お」、ニ異ナラズ。

第五節

○五十音ノ外ニ、尙三種ノ成熟音アリ、濁音ト、半濁音ト、拗音、清濁トナリ。

第六節

○濁音。半濁音。此ノ二種ノ成熟音ヲ表スルニ、別ニ作ラレタル假名ナクシテ、他ノ假名ヲ借リテ用井ル。而シテ、濁音ニハ、其右肩ニ二點ヲ加ヘテ別ツ、其數、二十アリ。半濁音ニハ、圈點ヲ加フ、其數、五アリ。左ノ如シ、(平假名ノミニテ記ス、片假名

モ、之ニ倣フ、以下、例ヲ出スモノ、皆、同シ。

濁音 ^{が、ぎ、ぐ、け、こ、} _{だ、ぢ、づ、で、ぞ、} ^{ざ、じ、ず、ぜ、ぞ、}

半濁音、ば、び、ぶ、へ、ぼ、

濁音、半濁音ニ對シテ、標點ナキトキノ假名ノ音ヲ、清音キョウオントイフ。
濁音ヲ發スルヲ、濁ルヌルトイヒ、ソレヨリシテ、清音ヲ發スルヲ、清キヨクムトイフトイフ。

第一七節

○加行、佐行、多行、ノ濁音ノ發聲ハ、其清音ノ發聲ヲ、鈍ク重ク發スルモノナリ。但シ、今世ノ發音ニテハ、多行ノ「ぢ」「づ」ハ、變ジテ佐行ノ「じ」「ず」ノ如ク發ス。四國、九州、ノ土音ニテハ、尙、其別ヲ存ス。半濁音ノ發聲ハ、唇ヲ閉ヂテ、吹キ破ルガ如クシテ發ス。

第一八節

本濁、連濁

波行ノ濁音ノ發聲ハ、半濁音ノ發聲ヲ鈍ク重ク發スルモノナリ。

○濁音、半濁音ニハ、本濁ホンダクト、連濁レンダクトノ別アリ。本濁トハ、此ノ音ノ自然ノモノニシテ、^ホ「くが」^ダ「陸かぜ」^フ「風みづ」^ク「水かつば」^ク「合羽ナド」ノ「が」「ぜ」「づ」「ば」ノ如シ。連濁トハ、二語ノ合シテ熟語トナレル^キ、下ナル清音ノ濁ルコアルニイフ、「やま山ト」「かは川ト」連リ、「いし石ト」「はし橋ト」連レバ、「やまがは」「いしばし」トナリ、「おもひ思ト」は、^ハ「かる計ト」連リ、「なに何ト」「ひこ入ト」連レバ、「おもんばかる」^ル、^ル「慮なんびこト」ナルガ如シ。

第一九節
拗音

○拗音。此ノ音モ、一種ノ成熟音ニテ、亦、清濁、半濁アリ、而シテ、亦、記スニ假名ナク、他ノ假名ヲ借リテ、二字、相連ネテ、一音ヲ表ハス。尋常ニ用ヰル拗音ハ、左ノ如シ。

きや	きゆ	きよ	
ぎや	ぎゆ	ぎよ	
ちや	ちゆ	ちよ	
じや	じゆ	じよ	此ノ拗音ノ「きや、きゆ、きよ、ぎや、ぎゆ、ぎよ、ちや、ちゆ、ちよ、じや、じゆ、じよ」ト、相對セシメテ、
にや	にゆ	によ	「か、く、こ、が、ぐ、こ、又ハ、さ、す、そ、ざ、
ひや	ひゆ	ひよ	ず、ぞ」等ノ音ヲ、直音ト稱ス。(他ハ、
びや	びゆ	びよ	準ヘテ知ルベシ)
みや	みゆ	みよ	
りや	りゆ	りよ	

くわ、
ぐわ、

第二〇節

○拗音ハ、發聲ト、半母韻ト、成熟シテ發ス。而シテ、其各行ノ發聲ハ、其直音清濁、半濁、共ニ、ノ發聲ニ同シ。然ルニ、今畿内、東海、關東、奥羽、等ニアリテハ、拗音ノ「くわ、ぐわ、」皆變ジテ、直音ノ「か、が、」トナレリ。拗音ハ、二音ノモノト紛ヒ易シ、因テ、下ノ假名ノ右肩ニ、標ヲ付シテ別ツ。

第二一節
鼻聲

○鼻聲。「ん」ハ、口ヲ閉ヂ、氣息ヲ鼻ニ通シテ壓シ出スガ如キ聲ナレバ、鼻聲ト名ヅク。此ノ聲、單獨ニハ出デズ、他ノ音ノ下ニ付キテ出ツ。「ねん」ころ、「懸わらん」べ、「重ゆるん」、「所以ぶんてん」、「文典くわんおん」、「觀音ノ如シ。而シテ、斯ル場合ニハ、「ねん」、「らん」、「ゑん」、「ぶん」、「くわん」等、スベテ、二字、或ハ三字、相合シテ、一ノ成熟音

第二三節 促聲

○促聲。「つ」ハ、氣息ノ、口内ニ促ル聲ナレバ、促聲ト名ツク。此ノ聲モ、單獨ニハ出デズ、他ノ二音ノ間ニ生ズ。此ノ聲ヲ表スルニ、字ナク、常ニ、成熟音ノ「つ」ヲ借ル、因テ、其右肩ニ、標ヲ付ケテ別ツ、や、つ、こ、奴、せ、つけ、舞家、あ、ゆ、つ、せ、田世、お、つ、こ、(夫)ほ、つ、す、(欲)ぜ、つ、び、(是非)ノ如シ。

第二三節 轉呼音

○轉呼音。假名ヲ、其本分ノ音ニ呼バズシテ、他ノ音ニ轉ジテ呼ブ「ア」アリ、コレヲ轉呼音トイフ。「は」ノ假名ヲ記シテ、「わ」ノ如ク呼ブ「ア」アリ。又、「ひ」、「ふ」、「へ」、「ほ」、「ナ」記シテ、「い」、「う」、「え」、「お」ノ如ク呼ブ「ア」アリ、是レハ、發聲、默シテ、母韻ノミ發スルナリ。以上ノ轉呼音ハ、他ノ音ノ後ニアルキニ發ス、首ニ發スル「ナ」シ。左ノ如シ。

第二四節

あはワ(粟) いひイ(飯) くふウ(食) はへエ(蠅) ちほオ(鹽)
かはるワ(變) あたひイ(價) ゆふウ(夕) かなへエ(鼎) おほしオ(多)
いさほイ(勢) さいはイ(幸)

○阿段ノ音ト、衣段ノ音トハ、直、拗、清、濁、共ニ、下ニ、「う」、又ハ、「ふ」轉呼音ノ「ナ」承クレバ、於段ノ音ノ如ク轉呼スル「ア」アリ、其中ノ成熟音ナルハ、發聲ヲ存シテ、母韻ヲ「お」ニ變ズルナリ。此ノ轉呼音ハ、開口ニモ發シ、他ノ音ノ後ニモ發ス。左ノ如シ。

あオうむウ(鸚鵡) あオふみミ(近江) …………… えエうウ(要) えエふフ(葉)
かカうウへエ(首) かカふフ(買) きキやヤうウ(京) けケうウしシ(教師) けケふフ(今日)
さサうウしシ(草紙) さサふフらラふフ(候) ちチやヤうウ(商) せセうウこコ(冗人) せセふフ(妾)
たタうウげゲ(峠) たタふフごゴしシ(貴) ちチやヤうウ(町) てテうウづヅ(手水) てテふフ(ト云)

第二八節

今、左ニ、普通ニ變ズルモノヲ舉グ。

○發聲ノ默シテ、母韻ノ存スルモノ。

ひらきて、(開) つきて、(就) あふぎて、(仰) かぎて、(鼻)
をしきかな、(惜哉) ひさしきかな、(久哉) ひどしくす、(齊) おおしくす、(同)
をしかな、(惜哉) ひさしいかな、(久哉) ひどしうす、(齊) おなじうす、(同)

第二九節

○發聲、默シテ、母韻存シ、更ニ、他ノ韻ニ變ズルモノ。

くらうて、(食) いひて、(言) かひて、(買) たいかひて、(戰)
くらうて、(食) いうて、(言) かうて、(買) たいかうて、(戰)

第三〇節

○促聲ニ變ズルモノ。

くらひて、(食) いひて、(言) かひて、(買) たいかひて、(戰)
かつて、(勝) うちて、(擊) たちて、(立) まちて、(待)
とりて、(取) さつて、(去) わつて、(有) あたりて、(當)

第三一節

○鼻聲ニ變ズルモノ。

やみて、(止) とみて、(富) よびて、(呼) およびて、(及) まにて、(死)
やんで、(止) とんで、(富) よんで、(呼) およんで、(及) まんで、(死)

第三二節

○上ノ音ノ發聲ノ、下ノ母韻ト合スルモノ。

よくあり、(善) あしくあり、(惡) まれにあり、(稀) あきらかにあり、(明)
よかり、(善) あしかり、(惡) まれなり、(稀) あきらかなり、(明)
みずある、(不見) ゆかずある、(不行) ゆかざる、(不行)

第三三節

○假名遣。發音同シクシテ、假名ノ用法ノ異ナルモノアリ、其

假名遣

用法ヲ、假名遣トイフ。左ニ、其迷ヒ易キモノヲ舉グ。

わ	は	わ	あ	ち	か	く	わ
い	ひ	い	ず	づ	が	ぐ	わ
う	ふ	う	あ	や	ち	や	
え	へ	え	あ	ゆ	ち	ゆ	
お	ほ	お	あ	よ	ち	よ	

其他ハ、前ニイヘル轉呼音ノ「あう」「かふ」「あやう」「てう」「けふ」ノ類

及ビ連聲ノ「さむる」、「三位ぜんあく」、「善悪けつえき」、「闕腋せきけう」、「石橋はくか」、「薄荷ノ類ナリ。凡ソ、假名遣ヒノ誤リ易カルベキハ、辭書ニ據リテ、語ヲ求メテ、其用法ニ從フベキナリ。

漢字

○漢字

第三四節

漢字ハ、古クヨリ、我が國ニ傳ハリテ、今、日用トスルモノ、其數、凡ソ、三四千アルベシ。

第三五節

○畫 漢字ヲ書クニ、其一筆ヲ「畫」トイフ。例ヘバ、「一」ノ字ハ一畫ニ成リ、「人」ハ二畫ニ成リ、「上」ハ三畫ニ成ルガ如シ。此ノ「畫」トイフモノ、二十餘様アリ、是等種々ニ組合ヒテ、千萬ノ字體ヲ成ス。

第三六節

偏旁冠

○偏旁冠 漢字ハ、字形ニ因リテ類別セラル。例ヘバ、字ノ左ニ、「松、杉、柳」ナド、「木」ノ字アルヲ、「木」ノ部トシ、「吸、吹、呼」ノ如キヲ、「口」ノ部トシ、「銅、銀、鐵」ノ如キヲ、「金」ノ部トシ、此ノ類ヲ、總ベテ「偏」トイフ。又、字ノ右ニ、「鳩、鶴、鷄」ノ如ク、「鳥」ノ字アルヲ、「鳥」ノ部トシ、「新、斬、斷」ノ如キヲ、「斤」ノ部トシ、「成、戒、戲」ノ如キヲ、「戈」ノ部トシ、此ノ類ヲ「旁」トイフ。又、字ノ頭ニ、「岩、岸、峯」ノ如ク、「山」アルヲ、「山」ノ部トシ、「筒、笛、笠」ノ如キヲ、「竹」ノ部トシ、「空、窓、突」ノ如キヲ、「穴」ノ部トシ、此ノ類ヲ「冠」トイフ。其他「丁、上」等ヲ、「一」ノ部トシ、「盆、盛」等ヲ、「皿」ノ部トシ、「遠、近」等ヲ、「辵」ノ部トスル等、凡ソ二百十四ニ別レテ、コレヲ部首トイフ。以上ノ類別ハ、字ヲ見テ音義ヲ知ラムトシテ、字書中ニ求ムル用トスルナリ。(委シクハ、字書ノ部首ニ就キテ知ルベシ)。

第三七節

楷行草
篆隸明朝

○楷行草篆隸明朝漢字ハ一字ノ形ニ種々ノ書様アリ、コレヲ書體トイフ。常ニ用キルヲ楷書、行書、草書トシ、篆書、隸書、之ニ次グ。

此六種ノ書體ノ中ニ、亦、各、數、様、アリ。今、左、ニ、天、地、トイフ二字ニテ、其、一、様、ヅツ、ヲ、示、ス。

天地(楷) 天地(行) 天地(草)
天地(篆) 天地(隸) 天地(明朝)

第三八節

○同字ヲ連ネテ記スルハ、亦、送字ヲ用井ル、楷書ニハ、々ヲ用井、行書、草書ニハ、々々ヲ用井ル、例ヘバ「毎々、度々、敬服々々、多々、涉々々々」ノ如シ。

第三九節
音訓

○音訓漢字ハ、一字ニテ、一語ノ意義ヲ成シ、其字ノ音ハ、即チ、支那ノ語ナリ、コレヲ漢語トイフ。我ガ國ニ傳ハリテヨリ、

第四〇節

稍、本國ノ原音ヲ變ジタル所アリテ、別ニ、自ラ、一、種ノ音ヲ成セリ、コレヲ漢字音、畧シテハ、字音トイフ。

漢字ヲ音ノマ、ニ讀ムヲ音讀トイフ、天、地、上、下、往、來、多、少、甚、最、等ノ如シ。國語ニ譯シテ讀ムヲ訓讀、又ハ、よみトイフ、天、地、上、下、往、來、多、少、甚、最、ノ如シ。斯ク、漢字ノ旁ニ、假名ヲ

添ヘテ記スヲ、振假名トイフ。

第四一節

漢語ノ音讀ト、訓讀ト、紛レ易キモノ、又ハ、數様ニ訓讀スベキモノ等ニハ、下ニ、別ニ、假名ヲ添ヘテ識別ス。例ヘバ、往、來、來、來、來、來、多、多、多、多、少、少、少、少、甚、甚、甚、甚、最、最、最、最、暫、暫、暫、暫、行、行、行、行、動、動、動、動、カ、カ、カ、カ、等ノ如シ。コレヲ送假名トイフ。

第四二節

字音ノ種類

○字音ノ種類。字音ニモ、單純音、成熟音、濁音、拗音、等ノ別アリ、其音ノ末ノ「ひ、き、さ、ち、韻」トイフ。字音ノ種類ハ、大要、二ニ分ル、

第四三節

一字、一音ノモノ。例ヘバ、阿、以、宇、於、支、微、歌、麻、馬、虞、模、語、沙、蛇、戈、主、壽、居、魚、ノ如シ。

第四四節

一字二音ニ聞ユルモノ。但シ、韻ハ、い、ゐ、う、ぬ、む、ふ、つ、く、ち、き、ノ十様ニ限ル。例ヘハ、齊、灰、在、外、垂、隨、追、類、奧、豪、尤、同、京、朝、文、桓、侵、嚴、帖、合、業、月、活、屋、極、質、罰、昔、激、ノ如シ。

第四五節

右ノ内ニテ、垂、隨、ナド、「ゐ」ノ韻ニ終ハルハ、字、段ノ音ノ下ニ限ル。又、「奧、京、朝、帖、合」等ハ、「おう、き、よう、ち、よう、ち、よう、ごう、ん」如ク發音スルヲ轉呼音ノ例ノ如シ。又、「文、侵」等ノ韻ノ「ぬ、む」ハ、今、常ニ、鼻聲ノ「ん」ニ發ス。

第四六節

○吳音。漢音。唐音。支那ニテハ、地方ニ因リテ、字音、異ニシテ、時代ニ因リテ、字音、變遷スルヲアリ。サレバ、字音ハ、傳來ノ地方ト、時代トニ因リテ、同字ニ、數様アルモアリ。初メ、彼ノ國

唐音

ノ南方ノ音ヲ傳ヘシヲ、吳音トイヒ、北方ノ音ヲ傳ヘシヲ、漢音トイヒ、後世、別ニ傳ヘシヲ、唐音トイフ。今、左ニ、行、京、外、經、請、明、下、等ノ音ニテ、例ヲ示ス。

吳音	行狀	京都	外道	經文	起請	明日	上下
漢音	孝行	京師	外聞	經書	請願	明白	天下
唐音	行燈	南京	外郎	看經	普請	明朝	下火

然レモ、字毎ニ、皆、三様ノ音ヲ具スルニハアラズ、一字ニシテ、吳音、漢音、同一ナルモノ、固ヨリ多シ、又、唐音ハ、甚ダ稀ナリ、現在ノ清國ノ字音ノ入り來レルハ、概シテ、支那音トイフ。

第四七節

○又、漢字ハ、音ヲ變シテ、義ヲ變ズルヲアリ。例ヘバ、數ノ字ヲ、「すう」ト讀ムトキハ、かず、かぞふ、ノ義ヲナシ、さく、ト讀ムキハ、

「るばく」ノ義ヲナシ「出」ノ字ヲ「あゆつ」ト讀ムキハ「いづ」ノ義
ニテ「すゐ」ト讀ムキハ「いだす」ノ義トナルガ如シ（委シクハ、字書
ニ據リテ知ルベシ）

◎單語篇

單語篇

第四八節

單語

言語ハ、一音又ハ、數音ニテ成ル。「をりく」に、あそぶ、いごまは、
ある、ひごの、いごまなし、こて、ふみ、よまぬ、かな。「トイフ」歌ノ中ニ
テ、右ノ方ニ點ヲ付ケタルガ如ク、個々ニ別ツキハ十四トナル。
斯ク分ケタル一ツヲ「單語」トイフ。單語篇ハ、其單語ノ種類、用
法、等ヲ講ズ。

第四九節

八品詞

○八品詞 單語ノ種類ハ、名詞、動詞、形容詞、助動詞、副詞、接續詞、
豆爾乎波感動詞ノ八品ニ分ル。

をりく 遊ぶ、暇は、ある、人の、暇無し、こて、書讀まぬ、かな、鈴
屋集

見ても、又、復も、見まく、の、欲しかり、し、花、の、盛、は、過ぎ、や、し、ぬ、ら

む(新古今十六)

右ノ中ニテ、暇、入、書、花、盛、過ぎ、等ハ事物ノ名ヲイフ語ナレバ、
 名詞トイフ。「遊ぶ、ある、讀ま、見、爲、末ノ」等ハ、事物ノ動作作用
 ナイフ語ナレバ、動詞トイフ。「無し、欲し、等ハ、事物ノ形状、情意
 ナイフ語ナレバ、形容詞トイフ。「ぬ、て、まく、ぬ、末ノ」らむ、等ハ、
 動詞ノ意ヲ助クル語ナレバ、助動詞トイフ。「をりく」に、復、ハ、
 動詞ニ副フ語ナレバ、副詞トイフ。「は、の、こて、も、や、ハ、他ノ語
 ト語トノ關係ヲ示スモノニテ、且爾乎波トイフ。「かな、ハ、感情
 ナイフ語ニテ、感動詞トイフ。「又、ハ、見ても」ト、復も見まくト、ノ
 二句ヲ接ギ合ハスル語ニテ、接續詞トイフ。
 以上八品ノ單語ノ中ニテ、動詞ノ「遊ぶ、ある、」ナドハ、其語ノ末、あ
 そび、あそべ、あり、あれ、ナドト變ハリ、形容詞ノ「無し、ハ、なき、なく、

ナド變ハリ、助動詞ノ「ぬ、ハ、ず、ね、」ナド變ハルコトアリ。其他ノ
 五品ノ單語ハ、其形ノ變ハルコトナシ。各單語ノ、各自ノ性質、用
 法等ハ、次ニ、委シク述ブベシ。
 ○凡ソ、アリトアル單語ハ、皆、八品詞ノ中ニ分屬ス、但シ、此ノ外
 ニ、接頭語、接尾語、ナドイフモノアリ、ソハ、篇末ニ説カム。

○名詞、體言

名詞

第五〇節

名詞(又、體言)ハ、有形、無形、ノ一切ノ事物ノ名ヲイフ語ニテ、且其
 下、が、の、に、を、こ、へ、より、まで、等ノ且爾乎波ニ接スベキモノナイ
 フ。

有形ノ「人、馬、山、川、草、木、雨、雪、等ヨリ無形ノ「心、夢、聲、色、光、香、
 白、黒、禍、罪、上、下、縦、横、東、西、春、秋、晝、夜、喜、怒、哀、樂、」等ニ至ル

マデ、凡ソ、が、の、に、を、等ノ、且爾乎波ニ接スルハ、皆、名詞ナリ。

第五一節

固有名詞

普通名詞

○固有名詞。普通名詞。有形、無形ノ名詞ノ中ニ、人名、地名、其他、一物、一事ノ固有ノ稱ナル者ヲ、固有名詞トイフ。例ヘバ、朝義經、武藏相模、富士利根、池月、磨墨、立上、牧馬、髭切、膝丸、古事記、法華經、有形元龜、天正、前九年之戰、應仁之亂、無形ノ如シ。

固有名詞ナラヌ其他ノ一切ノ名詞ハ、同種類ノ事物ニ通ジテ稱セラルレバ、普通名詞トイフ、人トハ、日本ニ住メルニモ、西洋ニ住メルニモイフベク、馬トハ仙臺産ナルニモ、薩摩産ナルニモイフベキガ如シ。

第五二節

○代名詞

○代名詞。代名詞ハ、名詞ノ一種ニシテ、人、事物、等ノ名ニ代ヘテイフ語ニテ、且多クハ、同一ノ名詞ノ連出スル時ニ、其煩ヲ省

カムガ爲ニ用井ルモノナリ。例ヘバ、人、事物、地位、方向、等ノ、各其名アルニ代ヘテ、われ、我、なむち、汝、かれ、彼、これ、是、それ、夫、こ、此、處、かなた、彼方、ナド、イフガ如シ。

第五三節

人代名詞

自稱

對稱

他稱

不定稱

○人代名詞。人ニ就キテ用井ルヲ、人代名詞トイフ。而シテ、指シテ稱スル人ノ位置ニ因リテ、三種ノ別ヲ成ス。第一ナルヲ、自稱トイフ、話ス人、自ラ、己ガ名ニ代ヘテ用井ルモノナリ、即チ、我、行、かむ、我ノ如シ。第二ナルヲ、對稱トイフ、我ガ話シカクル人ノ名ニ代ヘテイフモノナリ、我、汝、俱、に行かむ、汝ノ如シ。第三ナルヲ、他稱トイフ、對手トノ間ニ話出ス人、又ハ、我ト隔リタル人ノ名ニ代ヘテイフモノナリ、我、汝、俱、に、彼を、訪はむ、我、と、彼、との、間に、ナド、イフ、彼ノ如シ。又、對稱、他稱、ノ、中ニテ、其名ヲ知ラヌ人、又ハ、夫、レト定メヌ人ノ名ニ代ヘテイ

フナ不定稱トイフ、汝は誰なるか。我、汝と共に、誰を訪はむ。我、誰をか友フザヤルシモヤとせむ。ナドノ誰ノ如シ。又名ヲ指サヌ衆人ナイフ「アリ誰か思はむ。誰も知る。」ノ如シ。

自稱	對稱	他稱	不定稱
あ、あれ、 わ、われ、 (我)	な、なれ、 なむぢ (汝)	か、かれ、 あ、あれ、 (彼)	た、たれ、 (誰)

第五四節

人代名詞ノ尋常ナルモノハ、右ノ如シ、其他ニモ、古今、雅俗、尊卑、男女、等ニ用井分クルモノ、尙甚ダ多シ。左ニ、其若干ヲ舉グ。
自稱。「鷹」やつがれ、「おのれ」、「それがし」、「余」、「身」、「自分」、「私」、「拙者」、「わらは」、「女」

對稱。「いまし」、「みまし」、「上」、「天子ニわぬし」、「吾主わごの」、「吾殿御身」、「御事」、「御邊」、「君」、「御前」、「殿」、「貴殿」、「貴所」、「貴公」、「貴様」、「其許」、「おまへ」、「あな

た、「そなた」

他稱。「あやつ」、「かやつ」、「そやつ」

不定稱。「それ」、「某」、「それがし」、「なにがし」、「ごなた」

又、漢文ノ上ニハ、自稱ニ、「朕」、「天子ニ寡人」、「孤」、「諸侯ニ臣」、「君ニ對シテ拙生」、「小生」、「不佞」、「僕」、「弟」等アリ。對稱ニ、「陛下」、「上」、「天子ニ殿下」、「(王、太子、親王、攝政、關白等)

第五五節

指示代名詞

○指示代名詞。又、事物、地位、方向、等ヲ指シ示スニイフ代名詞アリ、コレヲ、指示代名詞トイフ、亦、近稱、中稱、遠稱、不定稱、ノ別アリ。

近稱
中稱
遠稱
不定稱

近稱ハ、最モ近キニイフ、あれ、あゝ、あなた、ノ如シ。中稱ハ、稍離レタルニイフ、それ、「そなた」ノ如シ。遠稱ハ、遠キニイフ、あれ、「あそこ」、「あなた」ノ如シ。不定稱ハ、名ヲ知ラヌ、又ハ、ソ

レト定メヌニイフ、いづれ、いづれ、ノ如シ、又、博ク、諸事物、諸處
ナイフヲアリ、いづくにかあるべき、いづれも同じ、ノ如シ、

	近	中	遠	不定
事物	こ、これ、	そ、それ、	あ、あれ、 かれ、	いづれ、なに、 (いづれ)
地位	こ、ここ、	そ、そこ、	あ、あそこ、 あそこ、 あそこ、 あそこ、	いづこ、いづく、 (いづこ)
方向	こ、こちら、	そ、そち、	あ、あち、	いづち、 (いづち)

第五六節

○數詞

數詞モ、名詞ノ一種ニテ、事物ノ數ナイフ語ナリ。其

○數詞

用法、位置、文中ニアリテ、正ニ名詞ニ同ジ、

ひとつ、ふたつ、みつ、よつ、いつ、むつ、
 ごと、はたち、みそち、よそち、いそち、むそち、
 なつ、やつ、こゝのつ、
 な、そち、やそち、こ、のそち、

又、語末ノつ、ち、チ去テ、他ノ名詞ニ冠ラセテ用井ルヲアリ、

一夜、二路、三筋、四時、五月、六言、
 七草、八回、九返、十度、二十年、三十文字、
 四十年、五十返、八十氏人、

又、「五」を、「十」い、「五十」は、「百」も、「百」ち、「千」よろづ、「萬」ナドモ、數詞ナレ

ド、多クハ熟語ニ用井ラレ、且、用法、甚ダ局ス、
 五十、幾十、五十鈴川、五十日、百日、百年、

百千、三千、八千、千種、千萬、五百枝

又漢字ヲ音讀スル「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、百、千、萬、億、兆」等モ、皆是レナリ。

○動詞、用言

作用言

第五七節

動詞

動詞(又、用言、作用言)ハ、事物ノ、有意ノ動作、又ハ、無意ノ作用、ナイフ語ナリ。例ヘバ、「人、行く。心、動く。」ノ「行く」ト、「動く」トハ、「人」ト、「心」トノ有意ノ動作ナイヒ、花、落つ。春、過ぐ。ノ「落つ」ト、「過ぐ」トハ、「花」ト、「春」トノ無意ノ作用ナイフガ如シ。又、稀ニハ、現象ナイフモノアリ、例ヘバ、「此ニ、人あり。志、其父に似る。」ノ「あり」ト、「似る」ト

ハ、「人」ト、「志」トノ現象ナイフガ如シ。

第五八節

○アラユル動詞ヲ、其動作ノ性質ニ由リテ、自動ト他動トニニ大別ス。

第五九節

自動

○自動。動詞ノ動作ノ、獨リ自ラスル性質ナルモノヲ、自動トイフ。例ヘバ、「花、飛ぶ。鳥、鳴く。」ノ「飛ぶ、鳴く」ノ如シ、其意、ソノマ、ニテ通ズ。

又、自動ナレモ、其動作ノ係ルベキ標準ナケレバ、意ヲ全ウセザルモノアリ。例ヘバ、「鏡は、壁に懸る。顔は、前へ向ふ。」ノ懸る、向ふ、ノ如キ、唯、鏡は、懸る。顔は、向ふ。トノミイヒテハ、其意、未ダ通ゼズ、必ズ、何にか懸る。何方へか向ふ。ト問ハルベシ、然ルルハ、其標準ヲ舉ゲテ、壁に、又は、前へ、ナド、答ヘズハアルベカラズ、而シテ後ニ、其意、全シ、然レモ、懸る、向ふ、ノ動作ハ、尙、自ラスルナリ。

無對自動
有對自動

標準ニハ、「に」「へ」より、「から」「まで」等ヲ要ス。
飛ぶ、鳴く、ノ如キヲ、無對自動ト名ヅケ、懸る、向ふ、ノ如キヲ、有對自動ト名ヅケ、總稱シテハ、自動詞トイフ。自動詞トハ、自動性ノ動詞ノ畧ナリ。

第六〇節
他動

○他動 動詞ノ動作ノ他ノ事物ヲ處分スル性質ナルモノヲ他動トイフ。例ヘバ、「蠶は、絲を吐く。」蜂は、蜜を醸す。」ノ吐く、醸す、ノ如キ、唯、蠶は、吐く。蜂は、醸す。」トノミニテハ、其意、更ニ通ゼズ、必ズ其處分スベキ絲、又ハ、蜜ヲ要ス、コレヲ、他動ノ動作ノ目的トイフ。目的ニハ、をヲ要ス。
又、目的ノ外ニ、尙、有對自動ト同ジク、其動作ノ係ルベキ標準ヲ要スルモノアリ。例ヘバ、「朱を藍に雜ふ。」水を湯こなす。」トイフヲ、唯、「朱を雜ふ。」水をなす。」トノミニテハ、其意、未ダ通ゼズ、藍

單對他動
復對他動

湯ノ標準ヲ得テ、意、始メテ全シ。
吐く、醸す、ノ如キヲ、單對他動ト名ヅケ、雜ふ、なす、ノ如キヲ、復對他動ト名ヅケ、總稱シテハ、他動詞トイフ。

第六一節

無對自動

花、飛ぶ。
鳥、鳴く。

單對他動

蠶、絲を吐く。
蜂、蜜を醸す。

有對自動

鏡柱に懸る。
顔、前へ向ふ。
水、湯こなる。

復對他動

朱を藍に雜ふ。
使を都へ遣る。
鷺を鴉こいふ。
教を師より受く。
貨物を港まで送る。

人、馬よりおる。
書狀、京まで届く。

第六二節

○同語ノ、用法ニ因リテ、自動トモ他動トモナルモノアリ。

自、風吹く。

數、増す。

戸、開く。

自、ら慎む。

第一表 動詞ノ語尾活用……法

一 終止法

二 終止法 連體法

三 終止法

不定法

中止法 連用法 名詞法

命令法

	四段活用	上二段活用	下二段活用	上一段活用	下一段活用	加行變格	佐行變格	奈行變格	良行變格																															
第一活用	(一)行(ゆ)く (二)押(お)す (三)分(わか)つ (四)飛(と)ぶ (五)讀(よ)む (六)去(さ)る	(一)生(う)む (二)落(お)つ (三)強(あ)ぶ (四)恨(うら)む (五)鞭(む)く (六)懲(お)ぶ	(一)得(う)む (二)受(う)く (三)任(ま)かす (四)立(た)つ (五)兼(か)ぬ (六)歴(あ)ぶ (七)勤(こ)む (八)覺(おぼ)ゆ (九)恐(おそ)る (十)植(う)う	(一)體(う)む (二)着(あ)ぶ (三)似(に)る (四)乾(ひ)る (五)見(み)る (六)居(ゐ)る	(賦) ける	(來) く	(爲) す (坐) おはす	(往) いぬ (死) あぬ	(有) あり (居) たり (待) はべり (在) いまそかり (いますかり)	ける	くる	ける	る	みる	ひる	にる	きる	いむ	する	おはする	いぬる	あぬる	ある	をる	はべる	いまそかる														
第二活用	ゆく おす わかつ ぶ よむ さる	いむ おつ あぶ うらむ むく おぶ	うむ うく まかす たつ かぬ あぶ こむ おぼゆ おそる うう	いむ きる ひる みる	ける	くる	する	いぬる	ある	をる	はべる	いまそかる	ゆけ	おせ	わかて	よめ	さる	いくれ	おつれ	あふれ	うらむれ	むくゆれ	おぶれ	ううれ	いれ	きれ	にれ	ひれ	みれ	るれ	けれ	くれ	すれ	おはすれ	いぬれ	あぬれ	あれ	をれ	はべれ	いまそかれ
第三活用	ゆけ おせ わかて よめ さる	いくれ おつれ あふれ うらむれ むくゆれ おぶれ	うれ うくれ まかすれ たつれ かぬれ あふれ こむれ おぼゆれ おそるれ ううれ	いれ	けれ	くれ	すれ	いぬれ	あれ	をれ	はべれ	いまそかれ	ゆか	おさ	わかた	よめ	さる	いさ	おち	あひ	うらみ	むくい	おそれ	うあ	い	き	に	ひ	み	る	け	お	せ	いな	あな	あら	をら	はべら	いまそから	
第四活用	ゆか おさ わかた よめ さる	いさ おち あひ うらみ むくい	え うけ まかせ たて かね あ こめ おぼえ おそれ うあ	い	け	お	せ	いな	あら	をら	はべら	いまそから	ゆか	おさ	わかた	よめ	さる	いさ	おち	あひ	うらみ	むくい	おそれ	うあ	い	き	に	ひ	み	る	け	お	せ	いな	あな	あら	をら	はべら	いまそから	
第五活用	ゆき おし わかち よみ さる	いさ おち あひ うらみ むくい	え うけ まかせ たて かね あ こめ おぼえ おそれ うあ	い	け	お	し	いに	あり	をり	はべり	いまそかり	ゆき	おし	わかち	よみ	さる	いさ	おち	あひ	うらみ	むくい	おそれ	うあ	い	き	に	ひ	み	る	け	お	し	いに	あに	あり	をり	はべり	いまそかり	
第六活用	ゆけ おせ わかて よめ さる	いさよ おちよ あひよ うらみよ むくいよ おそれよ	えよ うけよ まかせよ たてよ かねよ あよ こめよ おぼえよ おそれよ うあよ	いよ	けよ	およ	せよ	いぬ	あれ	をれ	はべれ	いまそかれ	ゆけ	おせ	わかて	よめ	さる	いさよ	おちよ	あひよ	うらみよ	むくいよ	おそれよ	うあよ	いよ	きよ	によ	ひよ	みよ	るよ	けよ	およ	せよ	いぬ	あれ	をれ	はべれ	いまそかれ		

此ノ表ハ、從來ノ用活用圖トハ、名稱順序、共ニ異ナル所アリ、又、舊圖ニハ、各活用ニ連續ス、ベキ助動詞、互爾乎波等ヲ、一々、各欄内ニ分載セルヲ、此ノ表ニハ、除ケリ、凡ソ、是等ノ事ハ、委シク、此ノ書ノ別記ニ辨ズベシ、後ノ形容詞、助動詞、ノ表モ然リ。

○第一表説明

○表中、正格活用ノ各類中ニ、又、各、數種アルヲ、(一)ニ、(二)ニ、(三)等ノ標ニテ知ルベシ、而シテ、其、各種ノ處ニ、舉ゲタル動詞ハ、其、同種中ノ、一語ヲ探リテ、例トシテ、舉ゲタルモノ、ト知ルベシ、例ヘバ、四段活用ノ(一)ノ「ゆく」(行)ハ、其、語尾、「く、け、か、き、け、トナル、是レト同シク、「おほつ、く、(驚)はく、(吐)く、(聞)

諸活用ヲ、諸記セムニ、長クナラザラムヲ、欲シテ、簡ニ、從ヒテ、略キテ、二三法ヲ、同段ニ當ツルヲ、トシタリ、且、其、活用ノ形、正格、變格、ノ九類ニ、互リテ、連體法、第二終止法、共ニ、各、相同シク、中止法、連用法、名詞法、亦、共ニ、各、相同シク、モアレバ、ナリ。

○各動詞ノ語尾ノ活用ヲ、其、語尾ノミヲ探リテ、左ノ如ク、稱呼スベシ、且、各活用ヲ、此ノ稱呼ニ、據リテ、

變格活用

第一、カギヤウ加行變格 一種 第二、サギヤウ佐行變格 一種

第三、ナギヤウ奈行變格 一種 第四、ラギヤウ良行變格 一種

第六六節
四段活用

○四段活用 正格活用ノ第一ヲ、四段活用トイフ、此ノ類ノ活用ニ屬スルモノハ、第一表ニ示セルガ如ク、六種ニ限ル。此ノ各種ノ動詞ハ、表ニ據リテ、其語尾ノ活用ヲノミ唱フレバ、下、之ニ倣へ、く、け、か、き、け、す、せ、さ、し、せ、つ、つ、て、た、ち、て、ふ、ふ、へ、は、ひ、へ、ナドトナリテ、其活用ノ語路、口調、相似タレバ同類トス。濁音ナルモ同シ、下、スベテ、之ニ倣へ。而シテ、其活用ノ音ノ、七法ノ配當ニ因リテ重複シタルヲ除ケバ、く、け、か、き、す、せ、さ、し、つ、て、た、ち、ふ、へ、は、ひ、ナドトナル、之ヲ五十音圖ノ各行ニ照セバ、皆、上ヨリ四段マデノ音ノ中ニテ活用ス、因テ、之ヲ四段活用ト名ヅク。

ク、動詞ノ中ニテ、此ノ活用ニ屬スルモノ、最モ多シ、而シテ、加行ノ音ニテ活用スルヲ、加行四段活用トイヒ、佐行ノ音ニテ活用スルヲ、佐行四段活用トイフ、他ハ、推シテ知ルベシ。凡ソ、正格ノ五類活用中ノ各種ノ稱、皆、之ニ倣フ。

第六七節

上二段活用

○上二段活用 正格活用ノ第二ヲ、上二段活用オカニニ又、中二段活用チカニニトイフ。此ノ類ノ活用モ、第一表ニ舉ゲタルガ如ク、亦、六種ニシテ、其語尾ノ活用ノ狀ハ、く、くる、くれ、き、き、まよ、つ、つ、る、つれ、ち、ち、よ、ふ、ふる、ふれ、ひ、ひ、よ、ナド、皆、其口調ヲ同シウス。而シテ、其活用中ノ、る、れ、よ、フ音ヲ除ケバ、く、き、つ、ち、ふ、ひ、ナド、ナル、之ヲ五十音圖ノ各行ニ照セバ、次ナル下二段ニ對シテ、圖中ノ上方ノ二段ノ音ニテ活用ス、因テ、之ヲ上二段活用ト名ヅク。上二段活用ノ動詞、甚ダ多カラズ。

第七二節

左行變格

○佐行變格。 變格ノ第二ナル活用モ、唯、一種ニテ、す爲ト、おはす御坐ト、ノ二語ニ限ル。 此ノ活用ノ狀ハ、す、する、すれ、せ、し、せ、トナリテ、下二段活用ノまかす^在ニ似タレド、下半ノせ、し、せ、よ、ニテ、せ、せ、よ、ナラヌガ、異ナリ。 此ノ活用モ、る、れ、よ、ナ除ケバ、左行ノ音ノし、す、せ、ニ活用スレバ、左行變格ト名ツケ、畧シテハ、佐變ト云フ。

但シ、す爲ハ、名詞漢語ニモニ添ヒテ熟語トナルコトアリテ、ソレヲ一動詞ト見ルトキハ、此ノ活用ノ語、甚ダ多シユツミス、罪くみす、興あゝろす、心なみす、無おもんず、重ほつす、欲げす、解あうず、困けみす、聞こらうず、御ごうず、同ぞんず、存ノ如シ。すヲ濁ルハ、音便ナリ。

第七四節

又、かの元の國より、迎へに、人々參で來んず。^{竹取物語}さる所へまからんず。

るも、いみじく侍らず。^同ナド用井タルモ、來むとす、まからむとす、ナ約メテ、音便ニ濁ルニテ、佐變ノ活用ナリ。

第七五節

奈行變格

○奈行變格。 變格ノ第三ノ活用モ、唯、一種ニテ、いぬ、往るぬ、死ノ二語アルノミ。 其活用ハ、ぬ、ぬる、ぬれ、な、に、ね、トナリテ、上半ハ、上二段、下二段等ノ活用ニ似タレド、下半ノ口調ハ、四段活用ニ似タリ。 コレヲ、奈行變格ト名ツケ、畧シテハ、奈變トモイフ。

○良行變格。 此ノ活用モ、唯、一種ニテ、あり、有をり、居はべり、侍いまぞかり、又、いまぞかり、在ノ四語ニ限ル。 其語尾ノ活用ハ、り、る、れ、ら、り、れ、トナリテ、其重複ノ音ヲ去レバ、り、る、れ、ら、ト活用シテ、良行四段活用ナルさる^去ニ似タレド、其第一活用ニ於テ、さる^去ハ、るノ音ナレド、此ノ活用ナルハ、りナルガ異ナリ。

因テ、此活用ヲ、良行變格ト名ツケ、略シテハ、良變トモイヒ、或ハ、

第七七節

第七九節

此活用ニ屬スル二語ヲ採リテ、直ニ、あり、をり、ノ活用、トモイフ、又、後ノ助動詞ノ中ナル、なり、「せり」、「けり」、「めり」、等、其第一活用ノ、リノ音ニ終ルモノハ、共ニ、此ノ活用ニ同ジ、尙、後ニイフベシ。

○以上、變格活用ハ、四類、各、一種、合ハセテ、九語ナリ、アラユル動詞ノ中ニテ、變格ニ活用スルハ、僅ニ、此ノ九語ナリ、ト知ルベシ。

○凡ソ、我國ノ動詞ハ、其第一活用、即チ、本體ノ、字ノ段ノ音ナルヲ通則トシ、之ニ外ル、ハ、唯、良行變格ノ伊ノ段ノ音ナルリニ終ルアルノミ、(第一表ノ第一活用ノ緯ヲ通覽セヨ。)

○又、アラユル動詞ノ語尾ハ、スベテ、五十音圖ニ照シテ、同ジ行ノ音ニテ活用シテ、他ノ行ノ音ニハ活用セヌチ、通則トス。

○法。語尾ノ活用ニ因リテ、動詞ノ語氣ニ、種々ノ態度ヲ生ズ、コレヲ法トイフ。其法ニ、七様アリ。

一第 終止法。(終止言、截斷言、斷止段、直說法)

二第 終止法。(連體言)

三第 終止法。(已然言、已然段)

- (一) 連體法。(連體言、續詞段)
- (二) 不定法。(將然言、未然言)
- (三) 中止法。(連用言)
- (四) 連用法。(連用言、續言段)
- (五) 名詞法。(假體言)
- (六) 命令法。(希求言)
- (七)

今、左ニ、正格活用中ノ四類ヨリ、各、一語ヅ、出シテ、七様ノ法ヲ説キ明スベシ、其他ノ活用ナルハ、準ヘテ知レ。

第八〇節

○終止法。動作ヲ、單純ニ言ヒテ、文章ノ終止トスル法ニシテ、

終止法

第一活用ヲ用ヰル、コレヲ動詞ノ本體トス。例へバ、
書を讀む。事を勤む。花落つ。月を見る。

第一終止法

尋常文ヲ結ブキハ、スベテ、第一活用ヲ用ヰルヲ、此ノ如シ、コレ
ヲ第一終止法トス。

第八一節

第二終止法

然レモ、若シ、動詞ノ上ニ、豆爾乎波ノぞ、なむ、や、か、ノ加ハレルキ
ハ、第二活用ヲ用ヰテ結ブテ、通則トス、コレヲ、第二終止法トス。
書をぞ讀む。事をぞ勤むる。花ぞ、落つる。月をぞ見る。

書をなむ讀む。事をなむ勤むる。花なむ、落つる。月をなむ見る。

書をや讀む。事をや勤むる。花や、落つる。月をや見る。

何をか讀む。何をか勤むる。何か、落つる。何をか見る。

第八二節

第三終止法

又、或ハ、豆爾乎波ノおそノ加ハレルキハ、第三活用ヲ用ヰルヲ、
通則トス、コレヲ、第三終止法トス。例へバ、

書をおそ讀め。事をこそ勤むれ。花おそ、落つれ。月をおそ見れ。

右ノ三種ノ終止法ノ事ハ、後ノ文章篇ニ於テ、委シク説クベシ。

第八三節

連體法

○連體法。他ノ名詞(體言)ノ上ニ連リテ、其名詞ノ性質狀態等
ヲ形容スル法ニシテ、第二活用ヲ用ヰル。(連體トハ、體言ニ連ル
トイフ意ナリ。)例へバ、

我が讀む書。人の勤むる事。花の落つる時。月を見る人。

或ハ、獨立ニモ用ヰテ、

讀む書。勤むる人。落つる花。見る月。

此ノ法ハ、其下ニアルベキ名詞ヲ含ミテ、直ニ、名詞ノ如ク用ヰ
ラル、トアリ。

第八四節

讀む事、書く事、を學ぶ。人の勤むる(態)に倣ふ。

花の開く(頃)より、落つる(頃)まで、見る事を好まず。

第八五節 不定法

○不定法。動詞ノ第四活用ヲ用ヰテ、他ノ助動詞、且爾乎波等ニ連續セシムムガ爲ノ一法ナリ、其用、定マラズ、故ニ、不定法トイフ。其用法、意義、共ニ、後ノ助動詞、且爾乎波ノ條ニ説クベシ。
(第四表ヲモ參見セヨ)

第八六節 中止法

○中止法。此ノ法ハ、文ノ中間ニテ、中止シ、即チ、其意ヲ、暫シ言止シ置キテ、末ニアル他ノ動詞ノ法ニ照應シテ、其法ノ意ニ從フモノナリ、第五活用ヲ用ヰル。例ヘバ、
書を讀み、字を記す。 事を勤め、功を成す。
花、落ち、鳥、鳴く。 月を見、故郷を懷ふ。

コレヲ、句毎ニ分チテ言ハ、書を讀む、又、字を記す、事を勤む、又、功を成す、ナド、各自ニ、終止トスベキヲ、暫シ「讀み」勤めト言止シ置キテ、末ノ「記す」成す、等ノ動詞ニ照應シテ、終止ノ意ヲ終フ。

第八七節

此ノ法、數語、連用スルコトアリ、數語ヲ隔テ、照應スルコトアリ、而シテ、スベテ、末ノ照應スベキ語ノ意ニ從フ。例ヘバ、

學を務め、務む、又、業を習ひ、習ふ、又、公益を廣め、廣む、又、世務を開く、身を立て、たる、道を行ひ、たる、名を後世に揚げたる人。
夙に起きて、夜に寐ねて、

財に富み、たれば、且、學に長けたれば、

第八八節 連用法

○連用法。他ノ動詞(用言)ニ連リテ、熟語トナル法ニテ、第五活用ヲ用ヰル。連用トハ、他ノ用言ニ連ルトイフ意ナリ。例ヘバ、
「讀む」ト、果つト、連ナルキ、讀む果つト、トハ、ナラデ、讀み果つト、トナルガ如シ。

讀み果つ。 勤め行ふ。 落ち入る。 見返る。
又、稀ニ、形容詞ト連ナルコトアリ。

第八九節

讀み好し。勤め難し。落ち易し。見苦し。

但シ、佐行變格ノす爲ト、良行變格ノあり有トハ、連用法ヲ承ケズ。例ヘバ、釣ります、狩ります、喜びあり、隔てあり、ナド連ルキハ上ナルハ、名詞法ニテ、釣りをす、狩りをす、喜びのある、隔てのある、ノ意トナル。

第九〇節

名詞法

○名詞法。動詞ノ變ジテ名詞トナル法ニテ、第五活用ヲ用ル。例ヘバ、

讀みを覺ゆ。勤めを怠る。落ちを拾ふ。花見に行く。

第九一節

命令法

○命令法。他ニ、動作ヲ命ジ、又ハ、請ヒ願フ意ナイフ法ニテ、第六活用ヲ用ル。例ヘバ、

書を読め。業を勤めよ。花落ちよ。月を見よ。

此ノ法、四段活用、奈行變格、良行變格ノ外ハ、皆末ニ、よノ音アリ。

○形容詞

形容詞

第一表 形容詞ノ語尾活用ノ法

語根	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用
あし	あし	あし	あし	あし
よし	よし	よし	よし	よし
よし	よし	よし	よし	よし
よし	よし	よし	よし	よし

第一終止法 第二終止法 第三終止法 副詞法 連體法 中止法

志幾活用
志志幾活用

第二表 形容詞ノ語尾活用……法

連體法
 第一終止法
 第二終止法
 第三終止法
 中止法
 副詞法

語根	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用
志幾活用 (善)よ	よし	よき	よけれ	よく
志志幾活用 (悪)あし	あし	あしき	あしけれ	あしく

舊圖ニハ「よくし」「あしくし」トテ、各二段ニ重出セシメタレド、今ハ併セタリ、説別記ニアリ。

○形容詞

形容詞

形容詞(又、形狀言)ハ、事物ノ状態、性質、情意等ヲ形容シテイフ語ナリ。例ヘバ「山、高シ」海、深シ」ノ「高シ」「深シ」ハ、状態ヲ形容シ、「是れ、善シ」「彼れ、悪シ」ノ「善シ」「悪シ」ハ、性質ヲ形容シ、「逢ふは、嬉シ」別るゝは、悲シ」ノ「嬉シ」「悲シ」ハ、情意ヲ形容スルガ如シ、因テ形容詞トイフ。

第九二節

第九三節

○活用 形容詞モ、動詞ノ如ク、語尾ニ、活用アリ、法アリ。但、其活用ノ状、甚ダ動詞ニ異ナリテ、二類ニ分ル。

第九四節 志幾活用

○志幾活用。此ノ活用ハ、第二表ニ示セルガ如ク、唯、一種ニテ、其語尾ノミヲ唱フレバ、「し、き、けれ、く、」ト活用ス、因テ、其初ノ二活用ヲ採リテ、志幾活用ト名ヅク。

第九五節 志志幾活用

○志志幾活用。此ノ活用モ、表ニ示セルガ如ク、唯、一種ニテ、其語尾ハ、「し、しき、しけれ、しく、」ト活用ス。亦、其初ノ二活用ヲ採リテ、志々幾活用ト名ヅク。

第九六節

○法。形容詞ノ法ハ、動詞ノ法ト相似テ、稍、異ナリ。不定法、連用法、名詞法、命令法、無クシテ、別ニ、副詞法アリ。

(一)終止法。三種

(二)連體法。

(三)中止法。(連用言)

(四)副詞法。(連用言)

左ニ形容詞ノ四様ノ法ヲ、大畧ニ説カム。ソノ動詞ノ法ト同ジキモノハ、相準ヘテ知ルベシ。(第二表、參見)

第九七節 終止法

終止法

○終止法。文章ノ末ヲ結ブ法ニテ、第一活用ヲ用ヰル、コレヲ形容詞ノ本體トス。例ヘバ、

心善し。 名、悪し。

コレヲ、第一終止法トス。

第九八節

若シ、又、上ニ、互爾乎波ノ「ぞ、なむ、や、か、又ハ、こそ、」ノアルキハ、第二活用、又ハ、第三活用ヲ用ヰテ、第二終止法、第三終止法トスル。動詞ノ例ノ如シ。例ヘバ、

心ぞ、善き。 心なむ、善き。

名ぞ、悪しき。 名なむ、悪しき。

心や、善き。 心か、善き。

名や、悪しき。 名か、悪しき。

心こそ、善けれ。

第九九節
連體法

名こそ、悪しけれ。
○連體法。他ノ名詞(體言)ノ上ニ連ル法ニテ、第二活用ヲ用ル。

心ノ善き人。名ノ悪しき者。

或ハ獨立ニモ用ヰテ、

善き心。 悪しき名。

第一〇〇節

又、下ニアルベキ名詞ヲ含ミテ、直ニ、名詞ノ如ク用ヰルコトモアリ。

善き物を取ル。 悪しき物を捨ツ。

第一〇二節
中止法

○中止法。文章ノ中間ニテ、中止シテ、末ノ語ノ法ニ照應スルヲ、動詞ノ中止法ニ同ジ、但シ、第四活用ヲ用ヰル。
性質、善く、品行、修まる。

心、悪しく、行ひ、卑し。

是レモ、句毎ニ別々バ、性質、善し。 品行、修まる。 心、悪し。 行ひ、卑し。 トイフベク、或ハ、品行、修まり、性質、善し。 行ひ、卑しく、心、悪し。 トモイフベシ。

第一〇二節

數語、相連リ、又、數語ヲ隔テ、他ノ種々ノ語ニ照應スルコトアルモ、動詞ノ中止法ニ同ジ。例ヘバ、

心、善く、善し、又、行ひ、正しく、正し、又、功も高し。

丈、高く、高き人、骨、逞しき人。

幅、廣く、ければ、丈、長ければ、

第一〇三節
副詞法

○副詞法。形容詞ノ變ジテ副詞トナルモノナリ。
善く改まる。 悪しく變る。
全く無し。 甚しく寒し。

第一〇四節

○副詞法ハ、良變ノ動詞ノ「あり」ト連リテ、「善くあり」、「悪しく
る」、「善くあらむ」、「無くあれ」、「ナド用井ラル、^キ「ト」あ「ト約マリ
テ、よかり、「あしかる」、「よからむ」、「なかれ」、「ナドトナル、常ナリ。
其語尾ノ活用ハ、粗、あり、「ニ同ジ。

第一〇五節

又其「善からむ」、「無からむ」、「ナドノ、更ニ約マリテ、「善けむ」、「無けむ」
ナド、ナル、モアリ。

第一〇六節

○語根 「志幾活用」ニテハ、其第一活用ノ「し」ヲ去テタルモノナ
語根トシ、「志々幾活用」ニテハ、其第一活用ヲ、直チニ語根ト見ル
ナリ。

語根

第一〇七節

語根ニ、接尾語ノ「み」、「げ」、「さ」、「ヲ添フンバ、名詞トナル。
高み。深み。重み。悪げ。善さ。遠さ。
嬉しげ。樂しげ。悪しさ。悲しさ。

第七表

助動詞ト助動詞トノ連續

なりノ下ニアルハ、詠歎無キハ、指定

指定	使役相	勢相	所相	活用一
(9) たり	(8) なり	7 6 5 るるる	4 3 2 1 るるるる	活用一 らまべめら しししりむ
なる	なる	する るるる	るるる るるる	活用二 らまべめら しししりむ
たれ	たれ	られ られ	られ られ	活用三
たる	たる	めせ めせ	られ られ	活用四 ましむす めめめ
たひ	なり	めせ めせ	られ られ	活用五 ましむす めめめ

第七表

助動詞ト助動詞トノ連続

「なり」ノ下ニ「アル」ハ、詠歎無キハ、指定、

勢相		使役相		指定		打消		過去		未來		推量		詠歎					
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
活第一	る	らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる	なり	なり	なり	なり	なり	なり	なり	なり	なり	なり	なり
活第二	る	らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる	なり	なり	なり	なり	なり	なり	なり	なり	なり	なり	なり
活第三	れ	られ	られ	られ	られ	られ	られ	られ	ね	つれ	ぬれ	たれ	せれ	けれ	め	けめ	めれ	めれ	なれ
活第四	れ	られ	られ	られ	られ	られ	られ	られ	ず	て	な	たら	せら	けら					
活第五	れ	られ	られ	られ	られ	られ	られ	られ	ず	て	に	たり	せり	けり				めり	

○此表、別ニ、説明ヲ用キズ、前ノ第四表ノ説明ヲ代用シテ、解スベシ、又、第三表ニモ参照スベシ、古書ニ、用例ハアレド、連續ノ希有奇僻ナルハ、省ケルモアリ、
 ○此表、前ノ第三表ニ比ベテ、(21)以下ノ助動詞ヲ省キタルハ、連續スルモノ、ナケレバナリ、但シ、「ベシ」、「ヤシ」、「ヤシヤシ」、「シ」等ノ、「(8)ノ」なり、ニ連ル「ハ」アリ、又、「ベ」けむ、「ベ」かり、「ま」じかり、「ナ」ドモアリ、是等ノ事ハ、第三表、第四表ノ説明ニ準ヘテ知ルベシ、

過 去 未 來 推 量 詠 歎

(20)なり	(19)ゆり	(18)らむ	(17)けむ	(16)む	(15)けり	(14)せり	(13)たり
なる	ゆる	らむ	けむ	む	ける	せる	たる
らむらむ らしらむ	らなり			なり	らなり らしらむ	らむらむ らしらむ	らべり らしらむ
なれ	めれ	らめ	けめ	め	けれ	せれ	たれ
					けら	せら	たら
					ず	ましめ	ましめ ずめね
	めり				けり	せり	たり
	まししか				まししか	まししか けつ けつ	まししか

○此表、別ニ、説明ヲ用キズ、前ノ第四表ノ説明ヲ代用シテ、解スベシ、又、第三表ニモ参照スベシ。古
書ニ、用例ハアレド、連続ノ希有奇僻ナルハ、省ケルモアリ。
○此表、前ノ第三表ニ比ベテ、(21)以下ノ助動詞ヲ省キタルハ、連続スルモノ、ナケレバナリ。但シ、
「べら」、「とら」、「まじさ」、「し」等ノ、(8)ノ「なり」ニ連ル「ハ」アリ、又、「べけむ」、「べかり」、「まじかり」、「ナドモ
アリ、是等ノ事ハ、第三表、第四表、ノ説明ニ準ヘテ知ルベシ。

第五表

動詞ト助動詞トノ連續 其二

敬相(敬語)

○説明、
 表中ニ、除却スベキ例、三アリ、其一、奈變ノ「死ぬ」ハ、半過去ノ「死に、ぬ」其未來ノ「死に、なむ」其ニ
 用例ナク、隨テ、大過去ノ「死に、にけり」死に、にき」其未來ノ「死に、にけむ」皆、用例ナシ、其二、加變
 ノ「來ハ」過去ノ「さし」さしか」外ニ「あし」あしか」トモ連リテ「さき」あき」ヲ用例ハナシ、其
 三、佐變ノ「爲」ハ、過去ノ「しき」外ニ「しか」ニハ「せし」せしか」トノミ連ル(第四表、參照)

去過大	去過	去過半	第五活用
良奈佐加下上下上四 變變變變段段段段段	良奈佐加下上下上四 變變變變段段段段段	良奈佐加下上下上四 變變變變段段段段段	第五活用
(有)あり (死)まじ (爲)し (來)き (賦)け (着)き (受)うけ (生)いき (押)おし たりて けり しか	(有)あり (死)まじ (爲)し (來)き (賦)け (着)き (受)うけ (生)いき (押)おし けり しか	(有)あり (死)まじ (爲)し (來)き (賦)け (着)き (受)うけ (生)いき (押)おし つて たりて たり	第五活用
(有)あり (死)まじ (爲)し (來)き (賦)け (着)き (受)うけ (生)いき (押)おし たりて けむ	(有)あり (死)まじ (爲)し (來)き (賦)け (着)き (受)うけ (生)いき (押)おし けむ め	(有)あり (死)まじ (爲)し (來)き (賦)け (着)き (受)うけ (生)いき (押)おし たりて め	第五活用

第五表

動詞ト助動詞トノ連續、其二。

敬相(敬語)

能相

所相

勢相

使役相

四 奈 良 上 下 上 下 加 佐
 段 變 變 段 段 段 段 變 變
 一 二 二 一 一

活第一	(押)おす (死)あぬ (有)あり	おす あぬ あり	おす あぬ あり	おす あぬ あり	おす あぬ あり
活第四	(生)いく (受)うく (着)きる (蹴)ける (來)く (爲)す	い う き け く す	い う き け く す	い う き け く す	い う き け く す
活第四	(爲)す	す	す	す	す

○説明

自動詞、死、有、生、來、他動詞、(押、受、着、蹴、爲)共ニ、其本體、即チ、能相ヲ成ス。諸ノ動詞ニ、自動、或ハ、他動ノ性アラヌハナク、而シテ、自動、他動、各自ニ、所相、勢相、使役相、敬相ヲ成サヌハナシ。

第四表

動詞ト助動詞トノ連續、其一。

四段活用

活第一	おす あぬ あり	おす あぬ あり	おす あぬ あり	おす あぬ あり	おす あぬ あり
活第二	い う き け く す	い う き け く す	い う き け く す	い う き け く す	い う き け く す
活第三	す	す	す	す	す
活第四	す	す	す	す	す
活第五	す	す	す	す	す

第四表

動詞ト助動詞トノ連續其一。

四段活用	上二段活用	下二段活用	上一段活用	下一段活用	加行變格	佐行變格	奈行變格	良行變格
活用一 (行)ゆく (押)おす (分)わか (飛)とぶ (讀)よむ (去)さる	活用二 (生)おいく (落)おつ (強)あふ (恨)むく (懲)むく (受)うける (得)うける (任)まかす (立)たつ (兼)かか (歴)ふか (動)おほむ (電)おほむ (恐)おそむ (植)うう (着)きる (似)ひる (乾)みる (見)みる (居)ける	活用三 (行)ゆく (押)おす (分)わか (飛)とぶ (讀)よむ (去)さる (生)おいく (落)おつ (強)あふ (恨)むく (懲)むく (受)うける (得)うける (任)まかす (立)たつ (兼)かか (歴)ふか (動)おほむ (電)おほむ (恐)おそむ (植)うう (着)きる (似)ひる (乾)みる (見)みる (居)ける	活用四 (行)ゆか (押)おさ (分)わか (飛)とぶ (讀)よむ (去)さる (生)おいく (落)おつ (強)あひ (恨)むく (懲)むく (受)うけ (得)うけ (任)まか (立)たけ (兼)かか (歴)ふか (動)おほ (電)おほ (恐)おそ (植)うう (着)きる (似)ひる (乾)みる (見)みる (居)ける	活用五 (行)ゆき (押)おし (分)わか (飛)とび (讀)よみ (去)さり (生)おいき (落)おち (強)あひ (恨)むく (懲)むく (受)うけ (得)うけ (任)まか (立)たけ (兼)かか (歴)ふか (動)おほ (電)おほ (恐)おそ (植)うう (着)きる (似)ひる (乾)みる (見)みる (居)ける	く	おす おはす	あぬ あぬ	あり はべり いませかり
					くる	おはする おはする	あぬる あぬる	ある ある はべる いませかる
					くれ	おすれ おはすれ	あぬれ あぬれ	あれ あれ はべれ いませかれ
					お	おせ おはせ	あいな あいな	あら あら はべら いませから
					き	おし おはし	あいに あいに	あり あり はべり いませかり

○第四表ノ説明。
 ○表中ノ各欄内ノ、上部ニアルハ、動詞ニテ下部ニアルハ、助動詞ナリ。
 ○表中ノ諸動詞、及び、其諸活用ハ、全ク、第一表ノモノニ同ジ。
 ○此ノ表ノ上ニテハ、動詞ノ法終止法、連體法、命令法、等ノ事ヲバ、一切言ハズシテ、只、某ノ助動詞ハ、某ノ動詞ノ第幾活用ニ連續ス、トノミ説ク。
 ○動詞ノ第三活用ニハ、連續スベキ助動詞ナケレバ、贅物ナレド、活用ノ、中間ニテ脱セムハ、體裁好カ
 ○第三表ニハ、助動詞二十七アルニ、此ノ表ニハ、十八第一、第二段ニ、一、第四段ニ、四、第五段ニ、ナルハ、動詞ニツカス、たり、せり、ノニテ除キ、所相、勢相、使役相、ニ屬スル七ヲ、第五表ニ讓リタレバ、ナリ。○過去、未來、ニ屬スル助動詞ハ、第六表ニモ掲ゲテアリ。○なり、ノ下ニ、*印ノツキタルハ、第三表ノ(20)ノ詠歎ノ、なりナリ。印ノナキハ、(8)ノ指定ノ、なりナリ。○印アルモノハ、正格ノ連續ト、異ナルモノナリ。

ト先ヅハ心得ベシ。而シテ、變格活用ノ方ニテ、希有ノ異例アル所ニハ、特ニ、印ヲシタレバ、心ヲ付クベシ。
 然シテ、其異例ハ、唯、左ノ四ナリ。
 第一、加行變格ノ第四、第五、ノ欄内ニ於テ、し、しかハ、何レニモ連續シテ、さハ、何レニモ連續セヌ事。
 第二、佐行變格ノ第四、第五、ノ欄内ニ於テ、さ、し、しかノ、別レテ連續スル事。
 第三、奈行變格ノ第五ノ欄内ニ於テ、ぬ、な、に、ね、

第三表 助動詞ノ活用……法

連體法

第一終止法 第二終止法 第三終止法 不定法 中止法 命令法

所相	勢相	使役相	指定	打消	過去	未來	推量	詠歎
(1)る	らる	さす	たり	ず	たり	む	なり	(20)なり
(2)らる	らるる	さする	たる	ぬ	たる	む	めり	(19)めり
(3)る	るる	する	たれ	つれ	たれ	けむ	し	(18)らむ
(4)らる	らるれ	すれ	たれ	ね	たれ	けむ	し	(17)けむ
(5)す	るれ	すれ	たれ	て	たれ	む	しか	(16)む
(6)さす	らるれ	すれ	たれ	ず	たれ	め	し	(15)けり
(7)あむ	らるれ	すれ	たれ	ず	たれ	め	しか	(14)せり
(8)なり	らるれ	すれ	たれ	ず	たれ	め	しか	(13)たり
(9)たり	らるれ	すれ	たれ	ず	たれ	め	しか	(12)ぬ
(10)ず	らるれ	すれ	たれ	ず	たれ	め	しか	(11)つ
(11)つ	らるれ	すれ	たれ	ず	たれ	め	しか	(10)ぬ
(12)ぬ	らるれ	すれ	たれ	ず	たれ	め	しか	(9)たり
(13)たり	らるれ	すれ	たれ	ず	たれ	め	しか	(8)なり
(14)せり	らるれ	すれ	たれ	ず	たれ	め	しか	(7)あむ
(15)けり	らるれ	すれ	たれ	ず	たれ	め	しか	(6)さす
(16)む	らるれ	すれ	たれ	ず	たれ	め	しか	(5)す
(17)けむ	らるれ	すれ	たれ	ず	たれ	め	しか	(4)らる
(18)らむ	らるれ	すれ	たれ	ず	たれ	め	しか	(3)る
(19)めり	らるれ	すれ	たれ	ず	たれ	め	しか	(2)らる
(20)なり	らるれ	すれ	たれ	ず	たれ	め	しか	(1)る

印ノ「たり」「せり」「ハ動詞ノ下ニハ、連ラズ、
連體法 中止法

第一終止法 第二終止法 第三終止法 副詞法

指定	比況	打消	過去	推量
(21)べし	べき	まじき	まし	らし
(22)かし	か	まじけれ	ましか	らし
(23)まじ	まじ	まじけれ	ましか	らし
(24)じ	じ	まじけれ	ましか	らし
(25)ま	ま	まじけれ	ましか	らし
(26)まし	まし	まじけれ	ましか	らし
(27)らし	らし	まじけれ	ましか	らし

*印ノ「じ」「に」第二終止法ノ用例ナク「らし」「に」連體法ノ用例ナシ。

○表中ノ活用、并ニ、法ノ名目等ノ事、其他、大體、第一表、第二表、ニ同ジト知ルベシ。
○助動詞ニハ、連用法、名詞法、ヲ成サヌガ多ケレバ、表中ニ、省ケリ、希ニアルハ、本文中ニ説ケリ。

○「は」是レハ、「爲」トイフ動詞ノ第四活用ノ「爲」ニ、未來ノ「む」ヲ連用スルニテ、一ノ助動詞ニハアラズ。以上、五項ノ事、スベテ、第六表、第七表ニ就キテ見ルベシ。
○「けむ」善けむ、無けむ、可けむ、ナド、形容詞ノ語

推量 詠歎

(18)らむ	らむ	らめ			押スらむ、受クらめ、ナド、
(19)めり	める	めれ		めり	押スめり、受クめる、ナド、
(20)なり	なる	なれ			押スなり、受クなる、ナド、

・印ノ「たり」「せり」ハ動詞ノ下ニハ、連ラズ。
連體法 中止法

指定 比況 打消 過去 推量

第一活用	第二活用	第三活用	第四活用		
(21)べし	べき	べけれ	べく		押スべし、受クべき、(可押、可受)ナド、
(22)むかし	むかぬ		むかへ		押スむかし、山ノむかへ、(如押、如山)ナド、
(23)まじ	まじき	まじけれ	まじく		押スマじ、受クまじく、ナド、
(24)じ	じ	じ			押サじ、受ケじ、(不押、不受)ナド、
(25)き	し	しか			押シき、受ケし、ナド、
(26)まし	まし	ましか			押サまし、受ケまし、ナド、
(27)らし	らし	らし			押スらし、受クラし、ナド、

*印ノ「じ」「し」ニ、第二終止法ノ用例ナク「らし」ニ、連體法ノ用例ナシ。

○第三表ノ説明、

○表中ノ活用、并ニ、法ノ名目等ノ事、其他、大體、第一表、第二表、ニ同ジト知ルベシ。
○助動詞ニハ、連用法、名詞法、ヲ成サヌガ多クレバ、表中ニハ省ケリ、稀ニアルハ、本文中ニ説ケリ。
○欄内ノ空ナルハ、其活用ノ缺ケタルナリ。
○表ニ掲ゲタル外ニ、助動詞ニ似タルモノハ、
○「て」(「てめ」)、「行きてむ」受けてむ、ナド用キル
「てむ」ナリ。是レハ、半過去ノ助動詞ノ「つ」ノ第四活用ナル「て」ニ、未來ノ助動詞ノ「む」ヲ連テタルモノナリ、(「め」「む」ノ活用ナリ)コレヲ、一ノ助動詞ト立ツルハ、重複ナリ。
○「て」(「てし」)、「行きてき」受けてし、ナド用キル「てき」ナリ。コレモ、前項ナル「て」ニ、過去ノ助動詞ノ「さ」ヲ連テタルニテ、一語ナラズ。(「し」「さ」ノ活用ナリ)
○「なむ」(「なめ」)、「行きなむ」受けなむ、ナドノ「なむ」ナリ。是レモ、半過去ノ助動詞ノ「ぬ」ノ第四活用ナル「な」ト、未來ノ助動詞ノ「む」ト連リタルニテ、一語ナラズ。
○「に」(「にし」)、「行きにき」受けにき、ナドノ「にき」ナリ。是レモ、半過去ノ助動詞ノ「ぬ」ノ第五活用ナル「に」ト、過去ノ助動詞ノ「さ」トヲ連用シタルニテ、一語ナラズ。
○「せむ」(「せめ」)、「勉強せむ」周旋せむ、ナドノ「せむ」

ナリ。是レハ、「爲」トイフ動詞ノ第四活用ノ「爲」ニ、未來ノ「む」ヲ連用スルニテ、一ノ助動詞ニハアラズ。以上、五項ノ事、スベテ、第六表、第七表ニ就キテ見ルベシ。
○「けむ」善けむ、無けむ、可けむ、ナド、形容詞ノ語根ニ連レルガ如キ「けむ」ナリ。
○「かり」善かり、悪しかり、ナドノ「かり」ナリ。是レハ、善くあり、悪しくあり、ヲ約メテイフナリ。以上、二項ハ、形容詞ノ副詞法ノ條ニ委シ。
○「なり」明なり、静なり、ナドノ「なり」ナリ。是レハ、明に、靜に「ト」あり「ト」ヲ約メテイフモノナリ、副詞ノ條ニ委シ。
○「ざり」行カざり、受ケざる、ナドノ「ざり」ナリ。是レハ、行カずあり、受ケずある、ヲ約メテイフモノナリ、打消ノ「ず」ノ條ニ説ケリ。
○「あらし」たらし、ならし。ノ類。是等ハ、ある、らし、たる、らし、なる、らし、ヲ約メテイフモノナレバ、相別チテ解スベシ。
○「てふ」ちふ。とふ。「と」「いふ」ヲ約メテイフニテ、歌詞ナリ、散文ニハ用キズ、コレモ、各自ニ別チテ、解スベキナリ。
○又「春めく」學者ふる、嬉しがる、議論がまし、男らし、行きたし、ナドノ「めく」「ふる」「がる」「がまし」「らし」「たし」等ハ、接尾語トシテ、單語篇ノ末ニ掲ゲタリ。

○助動詞

助動詞

せり、「こころし」ノ如シ。

○助動詞ハ、其形多クハ短小ナレモ、亦語尾ニ活用アリ、法アリテ、文ノ末ヲ結ブ。而シテ、其活用ト法トノ狀ハ、動詞ニ似タルアリ、形容詞ニ似タルアリ。其數凡ソ、二十七アリ、第三表ニ載セテ、其意義ト活用ト法トノ狀ヲ示セリ。其活用ト法トノ趣ハ、畧動詞、形容詞、ノトニ異ナラザレバ、名稱ノ、相同ジキモノハ、相準ヘテ知ルベシ。但シ、其意義ハ、次ニ、逐條ニ詳説スベシ。

○又、動詞ト助動詞ト連續シ、助動詞ト助動詞ト連續スル法則ハ、第四、五、六、七表ニ就キテ知ルベシ。

第一〇九節 能相所相

○所相ノ助動詞、「押す」「報ゆ」「受く」ナドハ、我が能クスル動作ナリ。然ルニ、他ノ、此ノ動作ヲ起シテ、我レコレヲ受クルキハ、「る」「又ハ、らる」トイフ助動詞ヲ用ヰテ、「押さる」「報いらる」「受けらる」

第一一〇節

「ナドイフ」漢字ニテハ、「被押」「所報」「ナド」我が能クスル動作ヲ、能相又ハ、働掛トイヒ、之ニ對シテ、我が受クル動作ヲ、所相又ハ、受身トイフ。

(1) 上ノ二語、所相ノ意ナイフコト、相同ジク、共ニ、諸動

(2) 詞ノ第四活用ニ連ル。但シ、るハ、四段活用ト、奈

變ト、良變ト、ニ連リ、らるハ、其餘ノ諸活用ニ連ルコト、第五表ニ示

セルガ如シ。

第一一一節

所相ニハ、「母子に泣かる」「我、他に恩を報いらる」ノ如ク、「子に、他に、ナドイフ標準ノ語ヲ要ス。

「言はれ侍り」「報いられ候ふ」「ナドハ、連用法ナリ。「西光が切られの事」「平家ごらはれ」(四)こなる、其謂はれ、無きにあらず、「ナドハ、名詞法ナリ。

第二二節 勢相

○勢相ノ助動詞。「押す、報ゆ、受く、」ナドイフ動作ヲ、更ニ、己ガ力能ク爲スニ足ル意ニイフキハ、亦、る、又ハ、らる、ナ用井テ、押さ、報い、らる、受け、らる、ナドイフ。其意ハ、押すことを得、報ゆることを得、ト言ハムガ如シ、コレヲ、勢相ノ助動詞トス。(漢字ニテハ、得、押、可、報、能、受、ナド)

第二三節

(3) る。上ノ二語、共ニ、勢相ノ意ナイヒ、而シテ、諸動詞ノ(4) らる。諸活用ニ連ル規定ハ、前條ノ所相ノる、らる、ニ同

第二四節 勢相一轉

シ。(第五表ヲ見ヨ) 然レモ、所相ニハ、何ニ「トイフ標準」ノ語ヲ要スレモ、勢相ニハ、要セズ、是レ、異ナル所ナリ。(第一一節、參見) 又、勢相ノ意ヨリ轉シテ、唯、動作ノ、自ラ起リテ、退メラレヌガ如キニイフアリ。例ヘバ、昔懷ばる、然思はる、ひぐらしの鳴く夕暮は、立ち待たれ、つゝ、古今十五待たる、ものは、鶯の聲、拾遺

第二五節 使役相

使役相

一筆を取れば物書かれ、(徒然草)行末のみ案ぜられ、て、ナ如シ。

○使役相ノ助動詞。他ヲ使役シテ、押す、報ゆ、受く、ナドイフ動作ヲ爲サシムルニハ、す、さす、さむ、等ノ助動詞ヲ用井テ、押さす、報い、さす、受け、さむ、ナドイフ、(漢字ニテハ、爲、押、爲、報、令、受、使、押、ナド) 此ノす、さす、さむヲ、使役相ノ助動詞トス。

第二六節

(5) す。上ノ三語ノ意、相異ナラズ、共ニ、動詞ノ第四活用(6) さす。ニ連ル。但シ、さむハ、アラユル動詞ニ連レモ、す(7) さむ。ハ、四段活用上、奈變ト、良變ト、ニ連リ、さすハ、其餘ニ連ル、第五表ノ如シ。

第二七節

自動詞モ、使役相トナルキハ、略、他動(即チ、使役)ノ意トナル、母子を眠らす、騎兵馬を走らす、父子をして、學校ニ入らさむ、ナ如シ。他動詞ヲ、使役相トスルキハ、甲、乙に、物を取らす、教師、生徒に課

業を受けさす。頼朝、義經をして、義仲を攻めらむ。ノ如ク、乙に、生徒に、義經をして、ナドイフ標準ノ語ヲ要ス。

「受けさせ給ふ、書かゝるめ畢んぬ、ナド用井ルハ、連用法ナリ。

第二一八節

使役相ニ、所相ヲ連ヌレバ、亦能相、所相ヲ成ス。「行か、若む、使行」

撃たるむ、使撃ハ、能相ナリ「行か、若め、らる、被使行」撃た、若め、ら

る、被使撃ハ、所相ナリ(以上ノ「らる」ハ、勢相ニモ適用スベシ)又、

所相ニ、使役相ヲ連ヌルハ、撃た、れ、若む、使被撃トモナル。

凡ソ、右等ノ用法ハ、第七表ノ、助動詞ト助動詞トノ連續圖ニ據

リテ知ルベシ、各助動詞、互ニ、連用法ヲ以テ、相重疊ス、幾語、重疊

ストモ、個々ニ分解シテ、語毎ニ、固有ノ意ヲ求メバ、解セラレム。

第二一九節

敬相

○敬相 勢相、使役相ノ助動詞ハ、全ク其意義ヲ變ジテ、他ノ動

作ヲ敬ヒ言フ語トナルヲアリ、コレヲ、敬相、又、敬語トイフ。而

シテ、使役ノ方ハ、大抵、給ふ、おはす、ナドイフ語ト、連テ用井、且

斯ク變ズルハ、必シモ使役相ニ要スル標準ノ語ヲ要セズ、第

一一七節ヲ見ヨ。例ヘバ、勢相ナルニハ、君も、殊に喜ばれて、釋

尊の、目連に教へらる、やうは、ナドイヒ、使役ナルニハ、琵琶を、

善く弾かせ給へご、帝、かくれさせおはしまし、位に即か若め給

ふ、只今の北野の宮ご申して、云々、おほやけも、行幸せ若め給ふ。

(天鏡令、聽門下、祇候給、東鑑ナドイフガ如シ。是等ハ、喜ぶ、教ふ、

弾く、かくる、即く、行幸す、聽す、ノ動作ヲ敬ヒイフマデナリ、書

狀ノ文ニ、被遊、被下、ナドイフモ、是レナリ。又、使役ニ、勢相ヲ重

テ用井ルヲアリ、一層重キ敬語ナリ、書か、せ、らる、受け、させ、ら

る、ノ如シ、書狀文ニ、被爲書、被爲受、ナド、是レモ、書く、受く、ヲ

重ク敬ヒイフノミ。

第二二〇節

又「人々に、齋いかれ、させ給ひ、御馬より落ちさせ敬相給ひ、御首取られ、させ給ふ。盛衰記、以仁王あはや、法皇の流され、させ、おはしますぞや。『平家物語』三ナドハ、上ノ一語ハ、眞ノ所相ニテ、下ハ、皆敬相ナリ。又「上東門院、云々、人々に、歌、詠ませ、させ給ひける時、玉葉、五仲正が女、皇后宮に、始めて参りたりけるに、琴、彈くご聞かせ敬相給ひて、彈かせ、させ給ひければ、金葉、九御笛賜びて、吹かせ、けらる。〔宇治〕十ナドハ、上ハ、眞ノ使役相ニテ、下ハ敬相ナリ。

第二二二節
指定助動詞

○指定ノ助動詞。次ニ舉グルなり、たり、べし、等ハ、事物ヲ指シ定ムル意アレバ、指定ノ助動詞トス。

第二二三節

(8) なり。指定解説スル語ニテ、語原ハ「に、あり、」ノ約ナルベク、意義ハ「にて、あり」ナリ。此ノ語、動詞ニ連ルキハ、其第二活用ニ連ルナ則トス。例ヘバ「押すなり、報ゆるなり、受くるなり、爲

第二二三節

るなり、」ノ如シ。(後ノ詠歎ノ「なり」ト異ナリ)

此語、又、獨立動詞ノ如ク、直ニ、名詞、又ハ、副詞、且爾乎波、ニモ件トテ、指定解説ノ意ナイフ、月なり、花なり、我れなり、人なり、宜なり、こればかりなり、そののみなり、」ノ如シ。又、形容詞ノ第二活用ニモ連ル、善きなり、悪しきなり、」ノ如シ。

(9) たり。語原ハ「こ、あり、」ノ約ニテ、意義ハ亦「にて、あり、」ト指定スル語ナリ。此ノ語ハ、名詞ノ下ニノミ付キテ、動詞ニハ付カズ、例ヘバ「あくれば、五日のあかつきに、兄人たる人、外より来て、〔蜻蛉日記、下ノ下〕住みこげむ、庵たるべくも、見えなくに、〔六帖、物名其他〕父たり、子たる、君たり、臣たる、」ナド、常ニ用井ル。(漢字ニテハ、「爲父、爲子、」ナド) 又「峨々たり、寂莫たる、」ナドイフモ、「こ、あり、」ノ約ニテ、コレニ同シ。(後ノ半過去ノ「たり」ト異ナリ)

第二二四節

(21) べし。心ニ推シ量リテ指定スル意ノ語ナリ。例ヘバ、斯くあるべし、我、行くべし、ノ如シ。漢字ニテハ、可、有、可行、ナド。又、強ク指定シテ、命令スル意ヲモナス、疾く行くべし、速に來べし、ノ如シ。此ノ語ハ、諸動詞ノ第一活用ニ連ルヲ規定トスレド、良變ニノミハ、其第二活用ニ連ル。

第二二五節

打消助動詞

○打消ノ助動詞。「押す、報ゆ、受く、ナドハ、動作ヲ、正面ニ説クナリ、コレヲ、反面ヨリ説キテ打消スニハ、押さず、報ゆまじ、受けじ、ナド用井ル。此ノ「ず、まじ、じ、等ヲ、打消ノ助動詞トス。

第二二六節

(10) ず。動作ヲ、ソノマ、ニ打消ス語ナリ、押さず、報いず、ノ如シ。漢字ニテハ、不、押、不、報、ナド。諸動詞ノ第四活用ニ連ル。又、絶えず行く、飽かず思ふ、筑波の山を戀ひずあらめかも。万葉(十)ナド用井ルハ、連用法ナリ、親知らず、月足らず、ナドハ、名

第二二七節

詞法ナリ。又、問はず語、知らず顔、ナド、名詞ト熟語トモナル。此ノ條ノ「ず」ト、動詞ノ「あり」ト、約マリテ、「ざり」トナル「常ナリ」押さざる、報いざる「ナドアルハ、押さずある、報いずある」ナリ。

第二二八節

(23) まじ。推シ量リテ打消ス語ニテ、「ず」ノ豫定ナリ、「押すまじ、報ゆまじ、」ノ如シ。此ノ語、諸動詞ノ第一活用ニ連リ、唯、良變ニノミハ、其第二活用ニ連ル。

第二二九節

(24) じ。前條ノ「まじ」ニ同シクシテ、其意稍強キガ如シ、而シテ、諸動詞ノ第四活用ニ連ル、押さじ、報いじ、受けじ、ノ如シ。

第二三〇節

時

○過去、未來、ノ助動詞。「押す、報ゆ」ハ、其動作ノ最中ナルニイフ、扱、其動作ヲ、既往ニ就キテイフキハ、「押したり、報いき、」ナドイヒ、未然ニイフキハ、「押さむ、報いむ、」ナドイフ。此ノ如キ動作ノ差違ヲ動詞ノ時トイヒテ、其差違、現在、過去、未來ノ三様ニ分ル。

第一三二節 現在

現在 トハ、現ニ、今、動作スルヲイフ、押す、報ゆ、受く、着る、
ノ如シ、(以下、スベテ、第六表ト参照セヨ)

第一三三節 過去

過去 ハ、更ニ、半過去ト過去ト、大過去ト、ノ三様ニ分ル、

半過去

半過去 ハ、動作ノ方ニ終リタルヲイフニテ、つ、ぬ、たり、ノ三助
動詞ヲ用井ル、即チ、押し、つ、押し、ぬ、押し、たり、報い、つ、報い、
ぬ、報い、たり、受け、つ、受け、ぬ、受け、たり、着、つ、着、ぬ、着、たり、ノ
如シ、此ノ、つ、ぬ、たり、ノ意義共ニ同ジ、

又、名詞、又ハ、副詞ニ添ヒテ、罪せり、詳にせり、ナド用井ル助
動詞アリ、又、四段活用ノ動詞ノ、行く、押す、ナドチ、行けり、
押せり、ナドト用井ルコトアリ、是等モ、共ニ、半過去ノ意義ヲ
成ス、尙、後ニ言フベシ、

第一三四節 過去

過去 ハ、動作ノ、過ギテ程歴シナイコトニテ、助動詞、けり、たり、き

過去

トチ用井ル、即チ、押し、けり、押し、き、報い、けり、報い、き、ノ如
シ、此ノ、けり、き、ノ意共ニ同ジ、

第一三四節 大過去

大過去

大過去 ハ、過去ヨリ一層程歴タリシコトニテ、半過去ト過
去トノ助動詞ヲ重用ス、即チ、半過去ノ、つ、ぬ、たり、ノ第五
活用ナル、て、に、たりニ過去ノ、けり、又ハ、きヲ重テ、押し、て、
けり、押し、に、けり、押し、たり、けり、押し、て、き、押し、に、き、押し、た、
り、き、ノ如シ、而シテ、其意、何レモ同ジ、(他ハ、準ヘテ知ルベシ)

第一三五節 未來

未來

未來 ハ、未ダ起ラザル動作ヲ、豫メイフニテ、助動詞ノ、む
ヲ用井ル、押し、む、報い、む、受け、む、着、む、ノ如シ、

第一三六節 又、半過去、過去、大過去、共ニ、其動作ハ、過去ニ屬スレド、未ダ分明

ナラヌ也、未來ニイフコトアリテ、亦、三様ニ分ル、即チ、

第一三七節 半過去ニテハ、つ、ぬ、たり、ノ第四活用ナル、て、な、たら、ニ、未

第一三八節

來ノ「む」ヲ重テ「押」して、「む」押シ、なむ、押シ、たらむ、報い、て、「む」報い、なむ、報い、たらむ、「ナドイフ」。

過去ノ「けり」、「き」、「ニハ、別ニ、助動詞ノ「けむ」アリテ、「押」し、「けむ」報い、「けむ」受け、「けむ」着、「けむ」ナド用井ル。

第一三九節

大過去ニテハ、「つぬ」たり、「ノ」第五活用ナル「て」、「に」、「たり」、「に」前ノ「けむ」ヲ重テ「押」して、「けむ」押シ、「に」けむ、押シ、たり、「けむ」報い、「て」けむ、報い、「に」けむ、報い、たり、「けむ」ナドイフ。

第一四〇節

(11) つ。動作ノ果テ、止マル意ナイフ語ナリ、此ノ語、諸動詞ノ第五活用ニ連ル。

第一四一節

(12) め。動作ノ往キ畢レル意ナイフ語ニテ、其意、畧、「つ」ニ同シ。諸動詞ノ第五活用ニ連ナレド、奈變ノ「往」に「死」に「ニ」ノミハ、連ナラズ。命令法ハ、「押」し、「ね」受け、「ね」ナド用井ルモノナリ。

第一四二節

(13) たり。て、あり、ノ約マレルニテ、てハ、前々條ノ「つ」ノ活用ナレバ、亦、動詞ノ第五活用ニ連ル。

第一四三節

(14) せり。爲てあり、ノ意ニテ、爲「トイフ」動詞ノ、半過去ノ意ヲナス語ナリ。此ノ語ハ、獨立動詞ノ如キ力アリテ、他ノ動詞ニハ付カズ。例ヘバ、「蓋」にせり、「萬葉」三殿造せり、「古今」團居せる夜は、「同」野邊近く、家居しせれば、「同」ナド用井、其他、罪せり、「寇」せり、「歎息」せり、「勉強」せり、「烈しく」せり、「明」にせり、「ナド」用井ル。

第一四四節

○又、一種ノ半過去アリ。四段活用ノ動詞ノ「咲く」、「指す」、「勝つ」等ヲ、常ニ「咲けり」、「指せり」、「勝てり」、「ナド」用井ル、是等ノ意義ハ、「咲き」、「あり」、「指して」、「あり」、「勝ち」、「あり」、「ナド」解スベクシテ、其動作ヲ、半過去ニイフモノナリ。此ノ語尾活用ヲ成スハ、四段活用ニ限り、其活用ノ狀ハ、畧、ありニ同シ。

連體法。

中止法。

第一終止法。

第二終止法。

第三終止法。

不定法。

名詞法。

命令法。

第 八 表					
第一活用	第二活用	第三活用	第四活用	第五活用	第六活用
降れり	降れる	降れれ	降れら	降れり	降れれ
咲けり	咲ける	咲けれ	咲けら	咲けり	咲けれ
指せり	指せる	指せれ	指せら	指せり	指せれ
勝てり	勝てる	勝てれ	勝てら	勝てり	勝てれ
思へり	思へる	思へれ	思へら	思へり	思へれ
澄めり	澄める	澄めれ	澄めら	澄めり	澄めれ

(15) けり。

過去ノ意ナイヒテ、亦、諸動詞ノ第五活用ニ連ル。

第一四六節

此ノ語ハ、過去ノ意無クシテ、唯、語氣ニ、念ヲ推シテ言フ意ヲナスコトアリ、「秋ハ來にけり。」天ツ星カゴ、あやまたれける。「古今五」ナドヲ、口語ニテ言ヘバ、「秋が來たわい。」まぢがへられるわい。「ノ意ナリ。殊ニ、「心なりけり。」我が身なりける。「ナド」なりけり。「ト用井タルハ、唯、説明スル意ヲナス。

第一四七節

(25) き。過去ノ意ナイフ、常ニ、「き、し、しか、」ノ活用ト呼ビ、亦、動詞ノ第五活用ニ連ル。然ルニ、加變、佐變、ニテハ、「き、し、しか、」ノ三活用、相別レテ、其第四活用ニモ連ル異則アリ。(第四表、參見)

第一四八節

第四活用		第五活用	
加變	來 <small>コ</small> し <small>シ</small> か	佐變	爲 <small>ヒ</small> し <small>シ</small> か
加變	來 <small>キ</small> し <small>シ</small> か	佐變	爲 <small>キ</small> し <small>シ</small> か

「來キ、來コ、」ノ例ナシ。

「爲シ、爲ヒ、爲シか、爲キ、爲キ、」ノ例ナシ。

「人ふるす、里を厭ひて、こしかごも、奈良の都も、うき名なりけり。」
〔古今十八〕都出で、君に逢はむこ、こしものを、〔土佐日記〕きし方、行く
すゑ、思ひつゞけられて、〔總角〕ノ如シ。

第一四九節

(16) む。 未來ノ意ヲ成ス。 諸動詞ノ第四活用ニツク、行か
む、落ちむ、受けむ、見む、ノ如シ。〔漢字ニテハ、將行、將落、ナド〕

第一五〇節

(17) けむ。 過去ノけり、き、ヲ未來ニイフ語ニテ、諸動詞ノ第二
五活用ニ連ル、行きけむ、落ちけむ、受けけむ、見けむ、ノ如シ。

第一五一節

推量助動詞

第一五二節

○推量ノ助動詞。「らむ、めり、まし、らし、等ハ、物ヲ推量スル意
アリ、コレヲ推量ノ助動詞トス。
(18) らむ。 未然ヲ推量スル語ナリ、押すらむ、受くらむ、ノ如
シ。 此ノ語ハ、諸動詞ノ第一活用ニ連リ、唯、良變ニノミハ、其第
二活用ニ連ル、有るらむ、居るらむ、ノ如シ。

第一五三節

(19) めり。 語原ハ、見えトありトノ約マレルニテ、事物ノ狀
態、然見ユ、ト推量スル意ヲイフ語ナリ。 此ノ語ハ、諸動詞ノ第
一活用ニ連ル、立田川もみち亂れて、流るめり。〔古今五〕あはれ今
年の秋も往ぬめり。〔千載十六〕浪の花、沖から咲きて、散り來めり。
〔古今十〕ノ如シ。 但シ、良變ニノミハ、あるめり、ノ如ク、其第二活
用ニ連ル。

第一五四節

(26) まし。 未來ヲ推シ定メ、又ハ、然セムトスル意ノ助動詞
ニテ、動詞ノ第四活用ニ連ル、押さまし、報いまし、ノ如シ。

第一五五節

(27) らし。 輕ク推量スル語ナリ、押すらし、報ゆらし、ノ如
シ。 此ノ語、諸動詞ノ第一活用ニ連レド、良變ニノミハ、其第二
活用ニ連ル、あるらし、居るらし、ノ如シ。

○詠歎ノ助動詞。

第一五六節

詠歎助動詞

(20) なり。動作ヲ言ヒ終ヘタルニ、感情ヲ添フル語ナリ、動詞ノ第一活用ニ連ル、秋風に、初雁がねぞ、聞ゆなる。〔古今四秋の野に、人まつ蟲の聲爲なり。〕同、十四藻刈舟、今ぞ渚に、來寄すなる。〔拾遺八谷の鶯、春を告ぐなり。〕堀川百首ノ如シ。

○比況ノ助動詞。

第一五七節

比況助動詞

(22) ごごし。比ブル意ナイフ語ニテ、動詞、形容詞、助動詞、ノ第二活用ニ添ヒ、又、或ハ、亘爾乎波ノの、が、下ニモ用井ル、他ノ助動詞ト異ナリ、世の中を、何に譬へむ、朝びらき、漕ぐなる舟の、痕なきごごし。〔萬葉三年月は、流る、ごごし。〕同、五まごごも君に、逢へりしごごし。〔同、十二我がごごく、物や悲しき、時鳥、古今十二山のごごし、海のごごく、斯くのごごき、聞くがごごく、空しきがごごし、〕如シ。〔漢字ニテハ、如山、如海、若斯、若聞、ナド。〕

○副詞

副詞

第一五八節

副詞ハ、動詞ニ副ヒ、或ハ、形容詞、又ハ、他ノ副詞ニモ副ヒテ、其意味ヲ種々ニ修飾スル語ナリ。

例ヘバ、只管考ふ、^{ヒスラ}暫し留る、甚だ高し、いと遙に見ゆ、ナドノ、只管ハ、考フル状態^{ヒスラ}タイヒ、暫しハ、留ル程タイヒ、甚だハ、高キ度タイヒ、いとハ、遙にノ距離タイヒ、テ、其意ヲ修飾スルガ如シ。

第一五九節

○遙に、明に、靜に、ナド、ニ終ル副詞ハ、動詞ノありト連ルキ、にト、あト、約マリテ、遙なり、明なり、靜なり、トナルト、常ナリ、而シテ、其語尾ノ活用ハ、畧、ありニ同シ。

第一六〇節

○名詞ヲ、副詞ニ用井ルコアリ、昔、男ありけり、今日來ずば、冷來むご、一年過きて、ノ如シ。數詞ナレハ、梨を、ひこつ取る、益

を、ごを重ねて、世の中よろづ好し、ノ如シ。又名詞ノ下ニ、ニにナ添ヘテモ用井ル、常に、時に、誠に、日に、ノ如シ。漢語ナルハ、大抵成れり、一切知らず、終日勤む、再三問ふ、ノ如シ。其下ニ、にナ添フルハ、切に、別に、丁寧に、專一に、ノ如シ。形容詞ノ副詞法モ、副詞ニ用井ラル、善く改まる、悪しく考ふ、疾く走る、久しく止まる、ノ如シ。

第一六一節

○尙暫し、待つ、夙に、早く、起く、嘗て、屢見たり、ナド重用スルハ、二ツノ副詞共ニ、下ノ動詞ヲ修飾ス。間ニ、他ノ語句ヲ隔テ、修飾スルコトアリ、つらく、事の由を考ふるに、暫し、時の移るを待ちて、ノ如シ。

第一六二節

禁止ノ副詞

○禁止ノ意ヲナス副詞ニテ、動詞ノ下ニ居ルモノアリ、心隔つな、色に出づな、ノ如シ。此ノなハ、必ズ、動詞ノ第一活用ノ下ニ

第一六三節

連ル、但シ、良變ニノミハ、第二活用ニテ、あるな、居るな、ナド連ル、或ハ、なナ上ニ置キ、下ニ、そトイフ語ヲ添ヘテ、中ニ動詞ヲ挟ミテ、禁止ノ意ヲ成スアリ、な隔てそ、な出でそ、な行きそ、ノ如シ。

○接續詞

接續詞

第一六四節

接續詞ハ、並ビタル同趣ノ文又ハ、句ノ間ニ入りテ、上下ヲ續ギ合ハスル語ナリ、山を越え、又水を涉る、書を讀み、且、字を記す、ノ如シ。漢籍讀ニ用井ルハ、求之與抑、與之與。(論語、學而秦歟、漢歟、將近代歟、弔古戰場文ナドアリ。書狀ノ文ニ、尤、旁、但し、將又、ナド用井ルモ、是レナリ。

○動詞ヨリ來レルニハ、及び、并に、尋で、ナドアリ、亦、漢籍讀ノ

用法ナリ。書狀ノ文ニ就て、隨て、依て、ナドモアリ。熟語ヲ用井ルハ、或は、斯くて、然して、而若しくは、ノ如シ。

○互爾乎波

互爾乎波

第一六五節

互爾乎波ハ、畧シテ、互爾波トモイフ。君が代は、千代に八千代に、さゝれ石の、いはほとなりて、苔のむすまで。〔古今、七見わたせば、柳櫻を、こきまぜて、都ぞ春の、錦なりける。〕〔古今、二ナドイフ歌ノ中ノ〕が、は、に、の、こ、て、まで、ば、を、ぞ、ノ如キモノ、是レナリ。互爾乎波ハ、其形、多クハ、短小ニシテ、且、獨立シテハ、用チ成サズ、而シテ、言語ノ中間ニアリテ、上下ノ語ヲ承接連絡シ、互ニ呼應シテ、其ノ意ヲ通シ、他語ノ方向ヲ示シ、意義ヲ導キ、自他ヲ區別シ、彼此ヲ分合シ、言語ノ位置顛倒ストモ、其所在ニ就キテ、指示

第一六六節

ノ任ヲ盡スナド、關節ノ筋ノ如ク、門戸ノ樞ノ如シ。

○アラユル互爾乎波ヲ、其用法ニ因リテ、三類ニ大別ス。

第一類。名詞ニノミ屬クモノ。

- (1) がの
- (2) のが
- (3) には
- (4) を
- (5) ごと
- (6) へ
- (7) よりよりから
- (8) まで

第二類。種々ノ語ニ屬クモノ。

- (9) はば
- (10) も
- (11) ぞなむなむじ
- (12) こそ
- (13) だにすら
- (14) さへ
- (15) のみばかり
- (16) やか

第三類 動詞ニノミ屬クモノ。

(17) ば (18) こ (19) に (20) て (21) で (22) つ

(19) に を が (20) て (21) で (22) つ

第一六七節

第一類

○第一類 此ノ類ノ豆爾波ハ、名詞ニノミ屬ク、コレヲ「名詞ノ豆爾波」ト稱スベシ。

第一六八節

(1) が の 共ニ、上ニハ、名詞ヲ承ケ、下ハ、動詞ニ係リ、其動

作ヲ起ス名詞ヲ、特ニ舉ゲ示ス豆爾波ナリ。例ヘバ、

斯くぞ誰がいふ。 我をば君が思ひ隔つる。

稻葉そよぎて、秋風の吹く。 志ぐるゝ空に、雁の鳴くなり。

○又、下、形容詞ニ係ルモアリ。

書見るが樂し。 智無きが多し。

鳴の浮寝の、やすけくも無し。

第一六九節

(2) の が 共ニ、名詞ト名詞トノ關係ヲ示ス豆爾波ナリ、

而シテ、其意義ニ、種々アリ。

第一七〇節

(い) 所有ノ意ヲ示スモノハ、人の物、君が世、ノ如シ。

第一七二節

(ろ) 二語ノ係屬ヲノミ示スモノハ、「櫻の花、梅が香、世の中、天

が下、」ノ如シ。

第一七三節

(は) 「に、ある、なる、」ナドノ意ヲ成スハ、「葛城の高間の山、春日

の三笠の山、越の白山、蝦夷が千島、

第一七四節

(に) 「こいふ、」ナドノ意ヲ成スハ、「富士の山、佐渡が島、

第一七五節

(ほ) 「の如き、」ノ意ヲ成スハ、「塵泥の、數にもあらぬ、我故に、」萬葉

十五昔物語のこゝちもする哉。手習花の顔、露の命、父が倂あり。」

○ つ。 「の」ニ似テ、上下ノ語ノ係屬ヲ示スモノナリ。 然レ

凡、用法古ク、且慣用ニ局^キレル所アリテ、一般ニ用^キ難シ。例
ヘバ、天つ風、國つ神、上つ毛野、下つ總、中つ國、外つ國、沖つ
風、^レ如シ。

第一七六節

(3) に、動詞ノ動作ノ移ルベキ名詞ヲ示ス且爾波ナリ。
而シテ、其意義、用法、亦種々アリ。

第一七七節

(い) 相對スルモノヲ指スハ、人に與ふ、師に問ふ、^レ如シ。

第一七八節

(ろ) 地位ヲ示スモノハ、机に載す、都に住む、山に近し、水に遠
し、^レ如シ。(以上、常ニ、漢字ノ于、於、ナ當ツ)

第一七九節

(は) 差抑フル意ナル、^レ如キハ、木、石に爲る。水を湯になす、
花を雪に見て、^レ如シ。

第一八〇節

(に) 添フル意ナルハ、月に叢雲、花に風雨、尾花が風に、庭の月影、
(玉葉、四) ^レ如シ。又、重用スル動詞ノ間ニ入りテ、また^レ意ヲナ

第一八一節

ス、降り^レに降る、あさり^レにのみるさる、聞き^レに聞き、語り^レに語る、
(ほ) ^レにて^レノ意ナルハ、仁和の帝の、皇子におはしましける時、
(古今、七丈夫に、あらしましかばこ、道に聽きて、途に説く、

第一八二節

(へ) の爲に、^レに因りて、^レナドノ意ナルハ、淋しさに、宿を立出て、
眺むれば、^レ後拾遺、四花見^レに行かむ、^レ入手に死ぬ、病に悩まさる、
人に撃たる、^レノ如シ。(第一一一節、參見)

第一八三節

(こ) 比ブル意ニテ、^レより^レノ如キハ、人に劣る、我に優る、昨日に
増して、^レノ如シ。

第一八四節

(4) を、他動詞ノ動作ノ目的タル名詞ヲ示スモノナリ、書
を讀む、紙を裂く、水を飲む、^レノ如シ。

第一八五節

○ 又、自動詞ニ係ルモノハ、其意義、異ナリ、家を離る、境を出づ、
國を去る、山を下る、^レナドハ、^レより^レノ意、路を行く、門を過ぐ、家

を繞る、ナドハ、其動作ノ行ハル、地位ヲ示スマデナリ。

第一八六節

(5) 差抑ヘテイフ意ノ豆爾波ニテ、其意、亦種種ナリ。

第一八七節

(い) 指シ定ムル意ナルハ、これぞ定む、それぞ思ふ、ノ如シ。

第一八八節

(ろ) くて、ノ意ナルハ、暮るぞ明くぞ、目離れぬものを、梅の花、いつのひこまに、うつろひぬらむ、(古今、二) 起くこは歎き、寐こは思ばむ、(同、十二) ノ如シ。

第一八九節

(は) 共に、ノ意ナルハ、能く、世ぞ推し移る、我、汝ぞ彼を訪はむ、ひこり見むより、人ぞ見む、ノ如シ。

第一九〇節

(に) 化りて、又ハ、ノ如く、ナドノ意ナルハ、雪ぞ降る、霜ぞ消ゆ、泣く、涙、雨ぞ降らなむ、(古今、十六) 月日のみ、流る、水ぞ、早けれは、(夫木、十八) ノ如シ。

第一九一節

(ほ) 重用スル動詞ノ間ニ入テ、またノ意ヲナスハ、ありこある、

第一九二節

秋風の、吹きこ吹きぬる、山の端に、入りこ入りぬる、月なれば、○此ノ豆爾波ノ、動詞、形容詞、助動詞、ヲ承クルキハ、其終止法、或ハ、命令法等ノ、意ノ切ル、所ヲ承クルヲ通則トス、即チ、上ノ一句一文ヲ、名詞ト見ルナリ。

第一九三節

第一終止法ナルハ、木の間より、風にまがひて、降る雪も、春來、こいへば、花かこぞ見る、(躬恒集都出づ、こか、人の告げける、(後拾遺、八) 憂し、こ見し世ぞ、今は戀しき、(新古今、十九) 我落ちにき、こ、人に語るな、(古今、四) 人目も草も、枯れぬ、こ思へば、(同、六) ノ如シ。

第一九四節

第二、第三終止法ナルハ、來宿る人や、ある、こ待つかな、(後撰、三) 春や疾き花や遅き、こ聞きわかむ、(古今、二) 幾代か歴し、こ間はましものを、(同、十七) それにぞあなる、こは聞けぞ、(伊勢物語) かくこそ思しか、こ言ひけるを、(同、共) にこそ、花をも見め、こ待つ人

第一九五節

の、(後撰三)命令法ナルハ、誰れ見よ、疾く行け、此ノ如シ。
 ○ 此ノハ、前項ノ、指定スルガ如キ意ハ、相似タ
 レ、用法、甚ダ異ニシテ、相並ブ同趣ノ語句ヲ接續スルコト、接
 續詞ノ如シ。(漢字、與ノ字ニ當ル)而シテ、全ク、上ノ語ニ附着
 シテ、下ニ、更ニ、名詞ノ豆爾波ヲ履ム。吹く風、谷の水、
 なかりせば、みやまがくれの花を見ましや。(古今、二)白き鳥の、
 嘴、脚、赤きが、水の上に遊び、(伊勢物語)流れ木、立つ白波、
 焼く鹽、いづれかからき、わたつみの底。(新古今、十八) 鄙魯
 戦ふ、月、花の遊び、内、外にあり、かれこれ、これを比
 べて、京、難波、へ行かむ、

第一九六節

(6) へ、 方向ヲ示ス豆爾波ナリ。例へバ、前へ進む、左へ向
 ふ、フ如シ。此ノへハ、方向ヲ示スモノニテ、前ノに、地位ヲ

示スモノト別ツ、深草の里に住みはべりて、京へまうで來こ
 て、(古今、詞)住む館より出で、舟に乘るべき處へわたる。(土佐
 日記)ナドノ如シ。

第一九七節

(7) より、 から、 共ニ、二ツノ間ニ移リ行ク意ヲ示ス豆爾波
 ニテ、地位ニモ、時ニモイフ。(漢字、自從、等ノ字ニ當ル)

第一九八節

人より受く、かなたより來る、天より落つ、それより程歴て、
 今からの御もてなしの、おぼつかなく侍らむは、(松風)我身か
 ら、うき世の中、なげきつ、(古今、十八)明日からは、若菜摘まむ
 こと、(新古今、二)

第一九九節

○ より、 是ハ、兩間ニ移ル意ヨリ轉シテ、專ラ、相比マテ科
 タイフモノナリ

第二〇〇節

「かれより後る、山より高し、これより善し、命より惜し、紅葉、

第二〇二節

(8) まで、至り及ぶ意ノ豆爾波ナリ、(漢字、迄ノ字ニ當ル)「筑紫までまかる、都まで送る、行くさきの事まで、おほし知らして」

第二〇三節

第二類

○第二類、此ノ類ノ豆爾波ハ、上ニ、各種ノ語ヲ承ケテ、其意ヲ、下ナル動詞、形容詞、助動詞ニ通ズ、其承クル所ノ語、一定セザレモ、亦、慣用ノ用法アリテ、妄ニ承クベキニアラズ。左ニ、其用例ヲ、若干掲グベシ。

第二〇三節

(9) は、事物ヲ、各自ニ差別スル意ノ豆爾波ナリ、(常ニ、漢字ノ者ヲ當ツ)但シ、一ヲ舉ゲテ、其他ヲ曉ラシムルモアリ、次ナル「も」モ、然リ。

「人は去り、我は留る。柳は緑に、花は紅なり。見るは善し、行きは

第二〇四節

せず、善きは取らむ、樂しくは思ふ、學ばむは好し、行かずはあらず、せずはあるべからず、取りては見む、斯くまではなし、然はあれど、いかゞはせむ、是よりは優る、我こそは見ぬ、」京へは行かむ、我のみはあり、花こそは見む、」如シ。

○ば、前項ノ「は」ヲ、音便ニテ、濁ルモノナリ。

「茶をば飲めど、酒をば飲まず、これをば取らむ、かれをば捨てむ、行かずんばあらず、せずんばあるべからず、」ノ如シ。

第二〇五節

(10) も、同狀ノ事物ヲ并列スル意ノ豆爾波ニテ、接續詞ノ如シ、(漢字ノ亦ノ字ニ當ル)「我も行く、人も行く、」行くもあり、歸るもあり、行きもせず、歸りもすまじ、長きもあり、短きもあり、善くもあらず、悪しくもなし、人をも身をも恨みざらまし、父とも思ひ、師とも仰ぐ、寐ても思ふ、我にも許せ、家へも

第二〇六節

歸らず、東よりも來る、水だにも飲まず、^レノ如シ。

(11) ぞ、なむ、あも、共ニ、多クノ中ニテ、一ツヲ指ス意ノ且爾波ナリ。(ぞ「ハ、其」ノ濁レルナリ)

第二〇七節

此ノ「ぞ、又ハ、なむ、なも」ノ、文中ニアルキハ、其末ヲ結ブ動詞、形容詞、助動詞ハ、第二終止法ヲ用ヰル、花ぞ落つる。月ぞ澄める。行くぞ善き。早くぞ過ぐる。去年よりぞ見し、^レノ如シ。(なむノ例ハ、次ニ舉ゲム)尙、文章篇ノ結法ノ條ニ、委シクイフベシ。

第二〇八節

○「ぞ、ハ、又、指シ示ス意ニテ、文句ノ末ニ着クコアリ、而シテ、動詞、形容詞、助動詞、ノ下ニ着クキハ、其第二活用ニ着クテ法トス。命、生くるぞ、^レ然おほゆるぞ、^レ斯くするぞ、^レあるぞ、^レ無きぞ、^レありしぞ、^レあらぬぞ、^レ書きつるぞ、^レ讀みたるぞ、^レ。

第二〇九節

○「なむ、ハ、ぞ」ニ似テ、指ス意、稍、緩シ。

第二一〇節

「柿本人麻呂なむ、歌の聖なりける。」(古今、序)無きなむまされる、^レかくなむある、^レ人をなむ恨むる、^レ文章篇ノ結法ノ條ニ委シ。

第二一一節

○「なも、ハ、なむ」ニ同シクテ、古シ、神になもありける、^レノ如シ。
○「し、」コレモ、指ス意アリテ、カアル且爾波ナリ、但シ、用法、局スル所アリ、且、其ノ末ヲ結ブ動詞、形容詞、助動詞ノ終止法、ニ關係ヲ及ボサズ。

第二一二節

「吹く風ぞ、谷の水ぞし、なかりせば、^レ吾今、ニ神し、知らなむ、花ぞし、いへば、^レいつし、かこのみ、待ちわたるべき、^レ其謂はれ、なきにしもあらず、^レ必ずしも、^レ然らざらむ、^レ。

(12) こそ、多クヲ捨テ、一ツヲ取ル意ノ且爾波ナリ。(常ニ、社ノ字ナド當ツ)此ノ且爾波ノ、文中ニアルキハ、其末ヲ結ブ動詞、形容詞、助動詞ハ、第三終止法ヲ用ヰル。

「花こそ咲け、見るこそ善けれ、斯くこそ思へ、月をこそ見れ、」
尚文章篇ノ結法ノ條ニ、詳ニイフベシ。

第二三節

(13) だに、すら。二語、意粗、同シ、事物ノ輕キヲ舉ゲテ、其餘ノ重キヲ、言外ニ引證スル、且爾波ナリ。

第二四節

「深山には、松の雪だに、消えなくに、都は野邊の、若菜摘みけり、」
「吾今、露にだに、御笠こいひし、宮城野の、木の下暗き、五月雨の頃、」
〔新千載三糟糠にだに、飽くこそ能はず、まして、美食をや、〕
可以人而不^{ザル}如^シ鳥乎。〔大學ノ如シ。〕

第二五節

「言問はぬ、木尙妹^{イモ}と兄^{ケイ}ありとふを、たゞ獨子に、あるが苦しき、」
〔萬葉六〕こけてすら、寐るほごもなき、五月雨を、寐覺がちにて、
明かす頃かな。〔會丹集〕我躬不^レ閱^ラ、遑恤^ハ我後^ニ。〔詩經、小弁〕亂世にてすら然り、まして、太平の時に於てをや。〕

第二六節

(14) さへ。重キガ上ニ、又、添ヒ加ハル意ヲイフ、且爾波ニテ、だにトハ、引證スル、輕重ノ主客ニ、交互ノ差アリ。

「橘は、實さへ花さへ、その葉さへ、枝に霜降れど、彌常葉の樹、」
〔萬葉六〕梓弓おして春雨、けふ降りぬ、あすさへ降らば、若菜摘みてむ。〔吾今、二月をだに、あかず思ひて、寐ぬものを、郭鳥さへ、鳴きあさる哉。〕〔六帖〕

第二七節

(15) のみ。ばかり。一アリテ、二無キ意ヲイフ、且爾波ニテ、二語ノ意粗、同シ。

「我れのみ知る、思ふのみなり、善きのみ取る、悲しくのみ思ふ、」
斯くのみあらば、家にのみ居て、入をのみ思ふ、

第二八節

「身につもる、年の暮にも、まさりけり、けふばかりなる、春の惜しさは、」
〔新拾遺十八〕今こむと、いひしばかりに、長月の、有明の月

第二一九節

を、待ちいでつるかな。(古今、十四)
(16) や。か。二語、共ニ、指シテ疑フ意ナイフ。互爾波ナリ。(常ニ、
耶、哉、乎、歟、等ノ字ヲ當ツ)

此ノ二語ノ、文中ニアルキハ、其末ヲ結ブ動詞、形容詞、助動詞、
皆、第二終止法ヲ用ヰル。

「春や來る、行きやする、行かてやあるべき、花をや見つる、」

「いづくにかある、何こかすべき、いかでか知らむ、」

尙、文章篇ノ結法ノ條ニ、委シクイフベシ。

○二語、共ニ、文句ノ末ニ屬キテ、疑ヒ、又、問フ意ヲナスコトアリ
「名にし負はば、いざ言問はむ、都鳥我が思ふ人は、ありやなし
や。」(伊勢物語來むや來じやの、さだめなければ、) (後撰、十四)

秋風の、吹上に立てる、白菊は花かあらぬか、浪の寄するか。(古今、

第二二〇節

五、いきたるか、死ぬるかに、おもほえず。」

○二語、共ニ、一種ノ用法ニ因リテ、疑フ意ノ、裏反リテ、確定ノ
意トナルコトアリ、コレヲ反語トイフ。

「見てのみや、人に語らむ、山櫻、手毎に折りて、家苞にせむ、そこ
ひなき、淵やはさわく、山川の、淺き瀬にこそ、あだ波は立て、咲
かざらば、櫻を人の、折らましや、櫻の仇は、櫻なりけり、いかで
人に劣らむやは、悦バシカラズヤ、我レ、豈ニ敢テセムヤ。」

「誰が誠をか、我は頼まむ、いつかは雪の、消ゆる時ある、あすも
ありこは、頼むべき身か、かはるは人の、心のみかは、焉か存セ
ム、争カ取ラム。」 委シクハ、文章篇ノ呼應ノ條ニイフベシ。
○此二語ノ、動詞、形容詞、助動詞、ヲ承クルキハ、や、ハ、其第一活
用ニ着キ、か、ハ、第二活用ニ着クヲ、定則トス、第九表ノ如レ、

第二二三節

詞動助 詞容形 詞動助 使役相

推未 過 打指 使役相
量來 去 消定

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6
あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ
い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い	い
え	え	え	え	え	え	え	え	え	え	え	え	え	え
お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お	お

第三類 此ノ類ノ互爾波ハ上、下、共ニ動詞、或ハ形容詞助動

第二三節

助動詞モ、第三表ニ就キテ、其第一、第二活用ニ連テテ、知レ。○又、や、か、共ニ疑フ意ノ互爾波ナレド、上ニ、他ノ疑辭アルル、例ヘバ、幾何カある、何をカ取る、誰なるカ、何ごすべきカ、いづくにあるカ、ナド、下ニ、更ニ、カナ置クハ、常ナレド、斯ル場合ニ、や、ナ置クヲナシ。

表九第

志	志	良	奈	佐	加	下	上	下	上	四
志	幾	變	變	變	變	一段	一段	一段	一段	段
(悪)	(善)	(有)	(死)	(爲)	(來)	(蹴)	(着)	(受)	(生)	(押)
あし	よし	あり	死ぬ	爲す	くる	ける	きる	うく	いく	おす
あしき	よき	ある	死ぬる	する	くる	ける	きる	うくる	いくる	おす

百四

百四

第十表

動詞、形容詞、助動詞ト、互爾波ノとも、とも、とも、は、トノ連續

詞動助					詞動助					詞動														
推	過	打	比	指	詠	推	未	過	打	指	使	勢	所	良	奈	佐	加	下	上	下	上	四		
量	去	消	況	定	歎	量	來	去	消	定	相	相	相	變	變	變	變	段	段	段	段	段		
(26)	(25)	(23)	(22)	(21)	(善)	(善)								(有)	(死)	(爲)	(來)	(願)	(替)	(受)	(生)	(押)		
...	...	まじく	...	へく	あしく	よく	活第 用四	なめらけむけせたぬつがたなまさすらる れれれれれれれれれれれれれれれれ	ありあ	す	く	ける	きる	うく	いく	おせ	活第 用一	未 定	
}					}					}					}									
...	...	まじけれ	...	へけれ	あしけれ	よけれ	活第 用三	なめらけめけせたぬつねたなまさすらる れれれれれれれれれれれれれれれれ	あれ	あれ	すれ	くれ	けれ	きれ	うくれ	いくれ	おせ	活第 用三	既 定
}					}					}					}									
ましか	...	まじけれ	...	へけれ	あしけれ	よけれ	活第 用三	なめれれれれれれれれれれれれれれれれ	あれ	あれ	すれ	くれ	けれ	きれ	うくれ	いくれ	おせ	活第 用三	既 定
}					}					}					}									
...	...	まじへ	...	へへ	あしく	よく	活第 用四	活第 用四	未 定	
}					}					}					}									

説明、第三表ニ比ベテ、助動詞ノ(24)ト、(27)ト、脱シタルハ、とも、とも、は、トノ連續ニ因ル。

詞 動

良奈佐加下上二
變變變變段段段

詞 動 助

詠推未過打指使勢所
歎量來去消定相相相

詞 容 形

推過打比指志志
量去消况定幾幾

26	25	23	22	21	(悪)	(善)	活第 用四	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	2	1	(有)	(死)	(爲)	(來)	(願)	(着)	(受)	(生)	
...	...	まじく	...	べく	あしく	よく		な	め	ら	け	む	け	せ	た	め	つ	ず	た	な	あ	さ	さ	す	ら	る	あり	あ	す	く	ける	きる	う	く
}					とも			}																	とも									
...	...	まじけれ	...	べけれ	あしけれ	よけれ		活第 用三	な	め	ら	け	め	け	せ	た	め	つ	な	な	あ	さ	さ	す	ら	る	あれ	あ	す	く	けれ	きれ	う	く
}					とも		}																	とも										
ましか	...	まじけれ	...	べけれ	あしけれ	よけれ	活第 用三	な	め	け	せ	た	め	つ	な	な	あ	さ	さ	す	ら	る	あれ	あ	す	く	けれ	きれ	う	く	
}					ば		}																	ば										
...	...	まじへ	...	べへ	あしく	よく	活第 用四	
}					ば		}																	ば										

説明、第三表ニ比ベテ、助動詞ノ(24)「ヒ」、(27)「ラシ」、ノ脱シタルハ「とも」「ば」ニ接セザルニ因ル。

第三類

第三類 ○第三類 此ノ類ノ且爾波ハ、上下、共ニ、動詞、或ハ、形容詞、助動

第三類

詞、ニ接ス、コレヲ、動詞ノ且爾波ト泛稱スベシ。

第二二七節

長岡平波

百六

○未定ノ例。「櫻花散らば散りなむ」(古今、二待つとし聞かは、今歸り來む。同、八鶯の谷より出づる聲なくば、春來ることを、誰か知らまし。同、二戀しくば、來ても見よかし。ノ如シ。

○又既定ノ方ヲ、風吹けば、え出でた、ず。(土佐日記) 波、風、止まねば、同じ處にあり。同、てる月を弓張ごしも、いふまごは、山の端さして、いれはなりけり。(愚岑集) ナド用、井ル井ハ、吹くに因りて、止まぬに因りて、いるに因りて、ノ意ヲ成ス、然レモ、尙、原因、結果タイプ。

第二二九節

(18) ごと、ごも、ご。ごも。此ノ四語モ、亦、共ニ、甲乙ノ語句ヲ連絡スル、且爾波ナリ。但シ、甲ノ語句、原因ヲ成シテ、乙ノ語句ハ、其反對ノ結果ヲ成スタイプ。(共ニ、漢字ノ雖ノ字ニ當ル) 而シテ、亦、未定、既定、ノ二様ニ分レ、清音ナルハ、動詞ニテハ、其

第二三〇節

第一活用ニ接シ、形容詞ニテハ、其第四活用ニ接シテ、未定ノ意ヲ成シ、濁音ナルハ、動詞、形容詞、共ニ、其第三活用ニ接シテ、既定ノ意ヲ成ス、第十表ノ如シ。助動詞ニテモ、其活用ノ、動詞ニ似タルモノハ、動詞ト同シ狀ニ接シ、形容詞ニ似タルモノハ、形容詞ト同シ狀ニ接スル、亦、第十表ノ如シ。
○ 例。「風吹くご、枝を離れて、落つまじく、花ごちつけよ、青柳の絲。」(山家集繪にかくご、筆も及ばじ。堀川後百首ノ如シ。サレド、此ノ用法、今、多ク用井ズ、因テ、第十表ニハ加ヘズ。
○ 例。「けふ來ずば、あすは雪ごぞ、降りなまし、消えずはありごも、花ご見ましや。」(古今、二梅が香を、袖に移して、ごめてば、春は過ぐごも、形見ならまし。同、二難くごも、遂げむ、惜しくごも、捨てむ、ノ如シ。

第二三一節

長岡平波

百七

第二三三節

○ ど、ごも、ノ例。「春立てど、花も勻はぬ、山里は、古今、二忍ぶれど、色に出でにけり、拾遺十一問へど、答へず、逐へど、去らず、酌めごも盡きず、飲めごもかはらぬ、秋の夜の盃、謠曲、狸々惜しけれど捨つ、長けれごも切らず、一如シ。

第二三三節

(19) に、を、が。此ノ三語、共ニ、亦、甲乙ノ語句ヲ連絡スルニ用ヰル、豆爾波ニテ、事ノ裏返ル意、又ハ、案外ニ出ヰル意ナイフ、其意、稍、前條ノ「ど、ごも」ニ似タリ。而シテ、三語、共ニ、動詞、形容詞、助動詞、ノ第二活用ニ接ス。

第二三四節

○ にノ例。「秋の野の、錦のごごも、見ゆる哉、色なき露は、染めじご思ふに、後撰、七庭の面は、まだ乾かぬに、夕立の、空さりげなく、すめる月哉、新古今、三郭公、一聲ごこそ、思ひしに、待ちえてかはる、我が心かな、續千載、三日、暮れかゝるに、宿るべき

第二三五節

處遠し、十六夜日記、畿内ノ軍、イマダ靜ナラザルニ、又、四國、西國、日ヲ追ヒテ亂レケレバ、太平記ノ如シ。

○ をノ例。「夏の夜は、まだよひながら、明けぬるを、雲のいづこに、月宿るらむ、古今、三つひに行く、道ごはかねて、聞きしかご、さのふけふごは、思はざりしを、同十六ノ如シ。

第二三六節

○ がノ例。「その時は、わびある堪へがたく、覺え候ひしが、おくれまるらせて後には、なご、さおほえ候ひけむ、悔しう候ふなり、ごいふ、宇治拾遺、大物の浦より、船にて下られけるが、折節西の風、烈しう吹きければ、判官の船は、住吉の浦へ打上げられ、平家物語、判官都漣、今ノ朝家ニハ、只、藤房一人ノミニテ候ヒツルガ、未然ニ凶ヲ鑿ミテ、隱遁ノ身ト成リ、太平記、説諭シタリシガ、聽カザリキ、屢訪ヒタルガ、面會ヲ得ズ、一ノ如シ。

第二三七節

(20) て

事終りテ、後ニ移ル意ヲ成ス且爾波ナリ。(常ニ、而ノ字ヲ當ツ)春過ぎて、夏來たるらし。雨降りて、地固まる。日暮れて、路遠し。ノ如シ。動詞、助動詞、ノ第五活用ニ連ル。

第二三八節

○左ノ數語ハ、此ノ條ノ「テ」ヲ、他語ト重用スルモノナルガ、慣用久シクシテ、一ノ且爾波ノ如クナレリ、類ヲ以テ、此ニ舉グ。

第二三九節

○「にて」名詞ノ且爾波ノ「ト」此ノ條ノ「テ」トニテ、間ニ略語アルナリ。「に於て」「ナドノ意ナルハ」京にて遇ふ、田舎にて見る。「に因て」「ナドノ意ナルハ」筆にて書く、水にて洗ふ。「にありて」「ナドノ意ナルハ」家は昔にて、人はあらず、頭は人にて、身は魚なり。「になして」「ナドノ意ナルハ」月影を、色にて咲ける、卯の花は、(後拾遺三)ノ如シ。

第二四〇節

○「ごて」「ごいひて」「ナドノ意ナルハ」さりごて、あればごて、「ご思ひて」「ナドノ意ナルハ」花見にごて、出で立つ、書を讀まむごて、机に凭る。

第二四一節

○「して」「爲」ノ「て」ニツキタルナレド、其意、失セタルナリ。「ありて」「テ」ノ意ナルハ、幼くして賢し、斯くして別る、巧にして速なり、答へずして去る、「もて」「にて」「ナドノ意ナルハ」米して、返り事す、(土佐日記)飯粒して、鯛釣る、「同人をして送らしむ、ひごりして物を思へば、(古今十二)

第二四二節

○「にして」「にありて」「にて」「ノ意ナリ、京にて生れたりし女子、おゝにして、俄に失せにしかば、(土佐日記)都にして遇ひける人、

第二四三節

○「ごして」「ごありて」「ナドノ意ナリ、一人ごして、背く者なし、入ごして、信なくば、

第二四四節

(21) で、打消ノ助動詞ノ「ず」ト、前條ノ「て」トナ、一語ニ約メタイ
フモノナリ。サレバ、動詞、助動詞、ノ第四活用ニ接スル「ず」
ニ同シ。「人に知られて、来る由もかな」(後撰、十二)行かであり、
歸らであらむ、ト如シ。

第二四五節

(22) つつ、半過去ノ助動詞ノ「つ」ヲ重用スルモノナリ、「行きつ
、見る、讀みつ、書く、ト如キ、且、行き、且、見る、且、讀み、且、書く、
トイハムガ如シ。

○感動詞

感動詞

第二四六節

○感動詞(又、詠歎ノ詞)ハ、喜怒、哀樂、等、凡ソ、人情、感動スル所アル
ニ發スル聲ナリ。例ヘバ「あな喜ばし、最も畏し、樂しきかな」ナ

ドノ「あな、も、かな」ノ如シ。而シテ、泛ク、種々ノ感情ニ通ジテ
イフアリ、專ラ、一感情ニ局リテイフアリ。又、其用法モ、言語ノ
上ニ立ツアリ、中間ニ入ルアリ、下ニ添フアリ、而シテ、他語ニ連
續スルニ就キテ、亦、各、一定ノ慣用法アリ。左ニ、感動詞ノ著キ
モノヲ擧ゲテ、其用例ノ若干ヲ示サム。

第二四七節

○他語ノ上ニ用ヰルモノ。
あ、(噫)あ、(嗚呼)「あ、かしこしや、」
あら。「あら、熱や、あら、無慚なりや、」
あな。「あな、羨まし、あな、苦し、あな、かしこ、」
あはれ。「あはれ、今年、の、秋も、往ぬめり。」(千載、十六)「あはれ、都、の、花
を見る哉、」(拾遺、十六)

第二四八節

や、呼ビ掛クル聲。「はやく、左の目に、いたつき立ちにけり、海

賊やこいひて扇を投げすて、のけざまに倒れぬ。(宇治拾遺十五)
やあ、前項ノ「や」ノ韻ヲ引クモノ。「やあ、正綱、頼將が十四歳に
遇ふこそ、再びやあるべき。」(藩翰譜、紀伊)

やよ、「や」ト、「よ」トヲ重用シテ呼ビ掛クルモノ。「わがさかり、や
よいづかたへ、行きにけむ、知らぬ翁に、身をばゆづりて。」(夫木
集、やよや待て、)

第二四九節

いかに、亦呼ビ掛クルニ發ス。「判官、いかに、與一、あの扇のま
んなか射て、敵に見物せさせよ、かし、ご宣へば。」(平家十二)
いで、思ヒ起ス時ニ發ス。「いで、御消息聞えむ、いで、何ぞ、こて
取りて見れば、」
いざ、誘ヒ立ツル時ニ發ス。「鏡山、いざ立寄りて、見て行かむ、」
いざ汲み見てむ、山の井の水、」

第二五〇節

あはや、事ノ爲リナムトスルヲ見テ發ス。「あはや、法皇の流
されさせおはしますぞや。」(平家三)
すは、警メ告グルニ發ス。「四方ノ寄手、関ノ聲ヲ聞キテ、スハ
ヤ、城ノ中ヨリ打出デタルハ、」(太平記、七)

第二五一節

○他語ノ中間、又ハ、下ニ用井ルモノ。
や、「年はや歴なむ、鳥さかや見む、いなや思はじ、思ふかひな
し。」(古今、十九)
○恨みずや、恨みつべしや、なか／＼なりや、いさやすらかな
る御ふるまひなりや、(簾木)耳馴れ侍りけりや、(若紫)あぢさな
(シ)や、(シ)ありがた(シ)や、
いみじくぞあるや、おぼしやる方ぞなきや、にほひぞ人に似
ぬや、こ打ちさゝめきて、(箱木)心こそ、心をころすものなれや、

第二五二節

も。 彌川百道「行けや、打てや、行きけるぞや、」
 「移りも行くか、人の心の。」古今十五からくも我は、老いにける
 かな。同十七「知らずもあるかな、いともかしこし、」またも來む、
 時しもあれ、無きにしもあらず、必しも然らざらむ、
 ○山のまに、鶯鳴くも、(天帖)忘れかねつも、ゆくへ知らず
 も、春立つらしも、

第二五三節

は。 「世の中は、昔よりやは、憂かりけむ。」古今十八 誰かは訪はむ、
 春の古里、(新古今、二)
 ○「さるさかなき夷心ヒトココロを見ては、いかゞはせむは。」(伊勢物語)「夜
 中も、過ぎにけむかし、風あらく、しう吹きたるは。」(夕顔)「これ
 見よ、まここにおはしたるは、こいへば、」(宇治拾遺、二)

第二五四節

を。 古キ感動詞ナリ。「昔も今も、知らずをいはむ。」古今十三「香
 をだに勻へ、人の知るべく。」同六

第二五五節

○他語ノ下ニ用ヰルモノ。
 な。 「蟬の聲聞けばかなしな、恨みつべしな、忘れじな、知らずな、」
 契りきな、移りにけりな、悪しきおそ思ひたれな、心憂くてお
 そおはしたれな、いくそご問へな、老いにけるよな、去りたる
 よな、

第二五六節

よ。 呼ビカクル聲。「月よ、花よ、あゝろほそさよ、行けよ、鳴け
 よ、忘れずよ、またかはらずよ、物を思ふよ、」人の知らぬよ、人
 のつらきよ、行きけるよ、契りしよ、

第二五七節

か。 かも。 かな(哉) 此ノ三語ノ、動詞、形容詞、助動詞、ニ添フ
 ハ、必ズ、其第二活用ニ添フ。 名詞ニ着キタルアルハ、間ニ、助
 動詞ノ「なる」ナドヲ畧シタルナリ。

第二五八節

○「淺みどり、絲よりかけて、白露を、玉にもぬける、春の柳か。」古今、二行く人を招くか、野邊の花薄、(金葉、三) スベテ、哉、ノ意ナリ、疑ヒノ、か、ト紛フベカラズ。

第二五九節

○「吾が宿の、冬木の上に、降る雪を、梅の花かご、打見つるかも。」(萬葉、八) 三笠の山に出でし月かも。(古今、九)

第二六〇節

○「夜はの月かな、氷の聲かな、年を歴るかな、見ゆるかな、樂しきかな、のぞかなるかな、思はるゝかな。」

第二六一節

が。がも。がな。共ニ、希望ノ意ナイフ感動詞ナリ。但シ、も、して、し、に、し、下ニ限リテ用ヰラル、其、も、感動詞ナリ、し、て、に、ハ、助動詞ノ過去ノ、き、半過去ノ、ぬ、つ、ノ活用ニテ、未來ヲ、豫テ過去ニ言做シテ、願フナリ。但シ、が、がも、ハ、用法、古シ。○「老いず死なずの、薬もが、君が八千代を、わかえつゝ、見む。」古

第二六二節

今、長歌甲斐が嶺を、亮にも見しが、心なく、横り臥せる、佐夜の中、山。(古今、二十)

第二六三節

○「常にもがもな、常處女にて、(萬葉、二) 甲斐が嶺を、ねこし山、ハ、吹風を、人にもがもや、言つてやらむ。」(古今、二十)

第二六四節

○「無くもがな、見る由もがな、思はずもがな、飛ぶが如くに、都へもがな、(土佐日記) みよし野の、山に入りけむ、山人と、成りみて、しがな、花に厭くやこ。」(續千載、二)

第二六五節

ね。な。なむ。三語、共ニ、亦、希望シ、又ハ、吩咐フル意ナイフ、感動詞ニテ、共ニ、動詞、助動詞、ノ第四活用ニ添フ。

第二六六節

○「ねハ、用法古シ。榮えいませね、尊き吾が君。」(萬葉、十九) 舟出はしぬと、親にまうさね。(同、二十) 櫻花、いまだ含めり、一目見に來ね。(同、十八)

第二六七節

○なモ古シ。「遊びくらさな、萬葉、五山橋を、苞に摘み來な。同
二十) 衆生濟ひ、わたしたまはな、救ひたまはな。佛足石歌

第二六八節

○なむ。「もえいづる春に逢ひ給はなむ、ご念じ、蓬生はや、御
馬にて、二條院へおはしまさなむ。夕顔行かなむ、押さなむ、報
いなむ、受けなむ、あらなむ、比べざらなむ、任せたらなむ、
かし。完結シタル文句ノ後ニ、餘情ニ添ヘテ、念ヲ推ス意ノ感

第二六九節

動詞ナリ。
「さばかりぞ、かし、見ゆるぞ、かし、
「見ゆ、かし、聞ゆ、かし、あはれなり、かし、斯くぞおほえ侍る、か
し、えませせざれ、かし、思ひ知れ、かし、疾く行け、かし。三様
ノ終止法、命令法等、スベテ、語句ノ完結シタル後ニ添フ。

第二七〇節

感動詞ニハ、重用スルモノ多シ。や、よ、や、よ、や、か、な、が、な、が、も、等

〇熟語
〇疊語

熟語 疊語

ハ、前ニ舉ゲタルガ如シ。其他、あな、や、いざ、や、いで、や、行けよ、
や、いつはなも、見せばや、な、老いにけるよ、な、かへりみしは、や、
ナド、舉グルニ勝ヘズ。
尋常ノ語モ、感情ニ發シテ、感動詞トナルコトアリ。こは、こは、そも、
こは、いかに、さて、も、いや、ごよ、ノ如シ。

第二七一節

熟語

熟語トハ、數語ノ、合ヒテ一語トナリテ、一義ヲ成スモノナリ。
而シテ、八品詞、互ニ、用法アリテ、相合フ。左ノ若干ノ例ニテ、其
用法意義ノ種々ナルコトヲ知ルベシ。

第二七二節

〇熟語ノ名詞。

第二七三節

「松山、谷川、酒樽、船歌、牡牛、牝馬、淺瀬、黑雲、二年、五月、唐織、京染、教草、讀物、天津風、沖津浪、加賀絹、陸奥紙、木綿付鳥、數珠掛鳩、行合兄弟、絲卷人手、(芥名) 豐葦原中津國、三吉野之吉野山、陸奥出羽、按察使、太皇太后宮大夫、」
 右等ノ熟語ハ、下ノ語ヲ主トシ、上ノ語ヲ從トシ、上ハ、下ノ種類、性質等ヲ形容スル語トナル。

「月日、山川、露霜、草木、上下、右左、西東、春秋、善惡、勝負、和漢、忠孝、」

右等ハ、各自、獨立ニシテ、共ニ主ナリ。

第二七四節

「丈長、端近、軍返、豆廻、請取、賣捌、親不知、從弟違、」

右等ニハ、主從ナシ。

第二七五節

「未曾有、不可思議、傍若無人、以心傳心、」

第二七六節

右等ハ、句ノ熟語ニテ、名詞ノ如ク用ヰラル、モノナリ。

○熟語ノ動詞。

「罪す、與す、吟ず、感す、周旋す、探索す、奴隸視す、爪突く、(躓)心指す、(恚)請願ふ、(囊)落入る、(陷)返見る、(顧)物語る、(豐)榮昇る、(大)殿籠る、(飛)立去る、(打)連立行く、(成)りなむこす、(垂)

第二七七節

○熟語ノ形容詞。

「心好し、(快)目映し、(眩)物憂し、(懶)胸苦し、(細)長し、(薄)暗し、(逸)早し、(愛)らし、(鬱)陶し、」

第二七八節

○熟語ノ副詞。

「恐らくは、(請)願はくは、(冀)思ふに、(顧)亂りに、(妄)案ずるに、(詮)ずるに、(敢)へて、(返)りて、(却)言はむや、(况)稍もすれば、(輒)一方に、(偏)殊更に、(故)元より、(固)餘りさへ、(剩)何處にぞ、(焉)身づ

から、「直無いが代に、「蔑欲しい儘に、「悉短兵急に、「居丈高に、
高手小手に、」

第二七九節

○熟語ノ接續詞。

「或は、「有謂然うして、「而かるがゆるるに、「故なかんづく、「就中
然のみならず、「加之

第二八〇節

○疊語ハ、同語ヲ重用スル熟語ナリ。而シテ、其用法、意義、各、定
マル所アリ。左ニ、其用例ノ若干ヲ示ス。

疊語

第二八一節

○名詞ノ疊語。

「山々、川々、木々、草々、津々、浦々、島々、入々、我々、夫々、下々、種
々、狀々、」

右等ハ、事物ノ數多キヲ示シ、或ハ、共ニ然ルヲ示ス。

第二八二節

「日々、月々、年々、度々、心々に、「口々に、「人々に、」

右等ハ、副詞ニ變ジテ、物毎ニ、事毎ニ、然ル意ヲ示ス。

第二八三節

○動詞ノ疊語ハ、スベテ、副詞ニ變ジテ、其動作、作用ヲ繰返ス
意トナリ、或ハ、其意ヲ深クス。

「行くく、代るく、増すく、「益次ぎく、「思ひく、「絶えく
ま、ありく、「たごりく、「知らずく、「繰返しく、「行けご
もく、」

第二八四節

○形容詞ノ語根ニ成レル疊語モ、其意ヲ深クス。

「長々し、重々し、輕々し、遠々し、」

他語ノ疊語ヨリ成レルアリ、生來、疊ミタルガ如キアリ。

「事々し、物々し、「め々し、「馴れく、「付きく、「賑々
し、「初々し、「おごろく、「うやく、「いまく、「うだく
し、」

第二八五節

語根ヲ疊ミテ副詞トシ、副詞法ヲ疊ミテ副詞トシ、スベテ其意ヲ深クス。

「青々こ、長々こ、疾くく、善くく、」

○副詞ノ疊語モ、其意ヲ深クス。

「ゆめく、いごく、たゞく、なほく、げにく、さらく、」

かならずく、赫々こ、寂々こ、蕭々こ、徐々こ、」

又、繰返ス意ヲ成スアリ、生來疊ミタルガ如キアリ。

「かくく、まかく、そもく、またく、」やう、やうく、ほく

く、うつらく、なかく、に、さめく、からく、こく、

く、

○感動詞ノ疊語モ、其意ヲ深クス。

「あゝ、あはれく、いでく、いさく、」

第二八七節

○接頭語
接尾語

接頭語 接尾語

第二八八節

接頭語

○八品詞ノ外ニ、接頭語、接尾語、等アリ。

○接頭語ハ、他語ノ頭ニ接シテ、熟語トナリテ、其意義ヲ添フル

語ナリ。サレバ、固ヨリ、獨立ニハ用ヰラレズ。接頭語ノ數、甚

ダ多カラズ、且、一定ノ慣用法アリテ、何レノ語ニモ冠ラスベキ

ニアラズ。左ニ、其著キモノヲ舉ゲテ、用例ノ一斑ヲ示サム。

「初春、初音、初學、初立つ、新參、新墾、小川、小暗し、小松、小高し、」

御代、御燈、大御、御御、真心、真直中、素肌、素顔、生紙、生藥、僻目、」

僻讀、異國、異人、曲者、曲事、えせ者、えせ法師、幾世、幾久し、諸

人、諸共に、彌増す、彌高し、」

接頭語

第二八九節
接尾語

○接尾語ハ、他語ノ尾ニ接シテ、熟語トナルモノナリ。而シテ、他語ヲ、名詞トスルアリ、又、動詞トシ、形容詞トシ、副詞トスルモアリ、亦、漫用スベカラズ、スベテ、慣用ノ例ニ據ルベシ。

○名詞ニ接シテ、尙、名詞トスルモノ。

〔等〕 物事ノ數アルヲ、統ベテイフ、次ノ五語同シ。「我ら、汝ら、是れら、天れら、少女ら、範頼、義經等、」

〔杯〕 「月花などのがめ、貴き、賤しき、なご、さまくにて、物など、もてまあり、」

第二九二節

〔共〕 物ごも、事ごも、男ごも、船ごも、馬ごも、

第二九三節

〔達〕 専ら、人ニイフ、次ナル二語モ同シ。皇子たち、親たち、大臣たち、公たち、友たち、

〔儻〕 殿ばら、法師ばら、女ばら、奴ばら、

〔方〕 「宮がた、殿がた、華族がた、」

第二九四節

〔互〕 互ニ伴侶ナル意ニイフ、「友ごち、女ごち、我れごち、言ふ事も、何事ならむ、ごおぼゆ、」(枕草子、二)

第二九五節

○他語ニ接シテ、名詞トスルモノ。第一〇七節、參見、
〔氣〕 事物ノ形状、情態、ナイフ、人げ、外げ、心ありげ、物思ひげ、思はずげ、思ひ得たりげ、悪げ、重げ、嬉しげ、惜しげ、

第二九六節

〔狀〕 事物ノ形状、程度、ナイフ、形容詞ノ語根ニノミ着ク、遠さ、深さ、善さ、悪しさ、悲しさ、嬉しさ、

第二九七節

〔程〕 程ナイヒ、其程ノ處チモイフ、形容詞ノ語根ニノミ着ク、深み、高み、青み、赤み、重み、

○他語ニ接シテ、動詞トスルモノ。

第二九八節

めく、自動詞トシテ、ソノ如ク成ル、チダイフ意ヲナス、四段活

第二九九節

用ナリ。「今めく、時めく、春めく、唐めく、上手めく、ほのめく、めかす、めく、」他動ニテ、亦、四段活用ナリ。「今めかす、時めかす、ほのめかす、」

がる。「ト思フ、」ナドノ意チナス、亦、自動ニテ四段活用ナリ。「嬉しがる、ゆかしがる、賢がる、執念がる、あはれがる、」

第三〇〇節

ぶ。「ソノ如ク成ル、意チナス自動ニテ、上二段活用ナリ。「大人ぶ、古ぶ、田舎ぶ、鄙ぶ、よのつねびたり、」ここさらびたり、」
ぶる。「ソノ風スル、意チナス、自動ニテ四段活用ナリ。「學者ぶる、利口ぶる、」

第三〇一節

○他語ニ接シテ、形容詞トスルモノ。
がまし。志々幾活用ニテ、ノ如シ、ニ似ル嫌ヒアリ、「ナドノ意チナス。「隔てがまし、かこごがまし、鳥漕がまし、」

第三〇二節

たし。希フ意チ成ス志幾活用ナリ。「見たし、行きたし、」あり
たし。
らし。「ソノ状チアヲハス、意チナス、志々幾活用ナリ。「男らし、女らし、學者らし、」

第三〇三節

○他語ニ接シテ、副詞トスルモノ。
ながら。「ソノママ、ソレゴメニ、」(隨ノ意ナリ、)一年は、春ながらにも、暮れななむ、花の盛を、飽くまでも見む。(兼盛集 右の大臣も、御子共、六人ながら、引連れて、おはしたり。(竹川)御簾の内ながら宣ふ、(夕顔)
意義、一轉シテ、つつ(且ナドノ意チ成ス、)讀みながら考ふ、歩みながら見る、

第三〇四節

又一轉シテ、なれども(乍ノ意チ成ス、)思ひながら、さりながら

第三〇五節

ものから。もの。前條ノ「ながら」ノ末項ノ意ニ同シク、ものなれども「ノ意ナリ」ものハ添へタル語ナレド、斯クノミ用井ラルレバ、添へツ。「待つ人に、あらぬものから、初雁の、今朝鳴く聲の、めづらしき哉。」(古今、四身に寒く、あらぬものから、わびしきは、人の心の、あらしなりけり。)(後撰、十七)空蟬の、世の、人言の、あげければ、忘れぬもの、離れぬへらなり。(古今、十四)

第三〇六節

すがら。「さながら」ノ約マレル語ナリ。「路すがら、心も空に、なごめやる、都の山の、雲隠れぬる。」(千載、八)秋霧の、立ちぬるすがら、心當てに、(夫木、卅三)夜すがら、寝をねず、夜もすがら思ふ、

第三〇七節

がてら。事ノ、彼此ニ涉ル意ヲナス、秋の野も、見たまひがてら、雲林院に詣でたまへり、(融)けしきも見がてら、雪を打拂ひ

つゝ、(常木)

第三〇八節

がてに。「難クアル」意ヲナス、人々、まかりかへりがてにして、別れを惜みけるに、(古今、八)我宿に、咲ける藤波、立ちかへり、過ぎがてにのみ、人の見るらむ、(同)ニ難波、濁汀の雪は、跡もなし、溜ればがてに、浪やかくらむ。(風雅、十五)

第三〇九節

からに。「故ニ」ノ意ヲ成ス、浮きて行く、紅葉の色の、濃きからに、川さへ深く、見えわたる哉、(貫之)集取りしからに、(さるからに)み。其意、前條ノ「からに」ニ似テ、が故に、「ノ意ヲ成ス、但シ、形容詞ノ語根ニノミ着ク、

第三一〇節

我が門の、板井の、清水、里遠み、人し汲まねば、水草生ひにけり。(古今、二十)秋の田の、假庵の、庵の、苦を粗み、我が衣手は、露に濡れつゝ、(後撰、六)瀨を速み、岩に塞かる、瀧川の、(詞花、七)散りなば

惜しみ、折れる秋萩、後撰、春深み、越路に雁の、かへる山、拾遺愚
草上ナドナリ、苦をあらみ、瀬をはやみ、ナドノをハ、スベテ感
動詞ナリ、其意ハ、里遠きからに汲まず、苦粗きが故に濡る、
ナド言ハムガ如シ、他モ、推シテ知ルベシ。但シ、此ノ用語ハ、
多クハ、和歌ノ上ニアリ。

第三二一節

ここに、(毎) 物事ノ、重ネテ然ル意、各、然ル意ヲナス、人ごとに語
る、國ごとに然リ、年ごとに咲く、咲くごとに見る、

第三二二節

まにまに。元ト、まにトノミイフ語ヲ重ネタイフニテ、隨に「トイ
フニ同シ、聲のまに、尋ねれば、語るまに、聞く、欲しき
まに、取る、するがまに、」

第三二三節

ばかり。程ノ意ヲナス、比叡の山を、二十ばかり、重ねあげたら
む程して、(伊勢物語) 我ばかり、物思ふ人は、またもあらじ。(同三

第三二四節

年ばかり歴て、かくばかり、いかばかり、泣きぬばかりに言へ
ば、(簾木) いみじう、死ぬばかり思へるが、いさほしければ、(東屋
又、頃)ノ意ヲ成ス、宵打過ぎて、子の時ばかりに、その日はか
りに、御迎へにまゐり來む。八月十五日ばかりの月に、入相ば
かりに、いつばかり、

第三二五節

がり、(ノ許へ)ノ意ナリ、文ハ大輔がりやれ、と宣ふ。(浮舟) 紀の有
恒がり行きたるに、(伊勢物語) 伊豆守の女にて居たりけるが
に、文やる。(落久保、二)

第三二六節

づつ。(宛)各宛ノ意ヲナス、鶏卵を、十づつ、十は、かさぬとも、(伊勢
物語) 一人づつ、少しづつ、

第三二七節

など。(杯) 一ニ定メズ、大畧ニ指シ示ス意ヲナス、何事ぞ、など問
ふ、行くべし、など言ふ、馬になど乗りて、

第三一八節

以上、其著キモノナリ。又、夜ノ明クルふる起キ出デテ、元祿十年ころ起リタル、牛ほご大ナル、馬ぐらの捷シ、出來タルだけ送ル、ナド用井ル、頃、程、位、丈、ナドモ、名詞ヲ、直ニ副詞ニ用井ルニテ、此ノ類ノ用法ナリ。

○文章篇

文章篇

第三一九節

言語ヲ書ニ筆シテ、其思想ノ完結シタルヲ、「文」又ハ、「文章」トイヒ、未ダ完結セザルヲ、「句」トイフ。文章篇ハ、個々ノ單語ノ相關係スルヨリ起ル法則、及ビ、其法則ニ據リテ、文、又ハ、句ヲ構成スル法則ヲ講ズ、從來、コレヲ、てにをはのかけあひトモイフ。

主語 説明語

○主語
○説明語

第三二〇節

主語 説明語 人ノ思想ノ上ニ、先ヅ、主トシテ浮ブ事物アリテ、次ニ、コレニ伴フハ、其事物ノ動作、作用、形狀、性質、等ナリ。「花、

咲く。志堅し。ナドイフニ、花、又ハ、志ハ先ヅ、心ニ浮ブ事物ニテ、次ニ、咲く、或ハ、落つ、ナドイヒテ、花ノ作用ヲ述ベ、又ハ、「堅し、(或ハ、薄し)ナドイヒテ、志ノ性質ヲ述ブ。花、又、志ハ、其作用ヲ起シ、又ハ、其性質ヲ呈スル主タル語ナレバ、主語(又ハ文主)ト稱シ、咲く、又ハ、堅しハ、其ノ主ノ作用、性質ヲ説明スル語ナレバ、説明語ト稱ス。

主語 説明語 主語 説明語
花、 咲く、 志、 堅し。

主語、上ニ居リ、説明語、下ニ居ルヲ、正則トス。主語ト説明語トヲ具シタルハ、文ナリ、文ニハ、必ズ、主語ト説明語トアルヲ要ス。

○客語

客語

第三二節

客語、説明語ノ、有對自動詞、又ハ、單對他動詞、複對他動詞ナ
ルキハ、各、其標準ノ語、又ハ、目的ノ語ヲ要ス。其標準、又ハ、目的
ノ語ヲ、客語トイフ。客語ハ、主語ト説明語トノ間ニ居ルヲ、正
則トス。

主語 客語 説明語 主語 客語 説明語
水は、低きに就く。 火は、物を乾かす。

主語 客語 説明語
風は、波を岸に寄す。

第三三節

○左ノ如キハ、一ツノ名詞、共ニ主語ナレド、下ナルヲ、姑ク、客語
トモ見、或ハ、なり、たり、ト合ハセテ、説明語トモ見ル。

主語 客語 説明語 主語 客語 説明語
水は、流動物なり。 正成は、忠臣なり。

客語

○修飾語

修飾語 主部 客部 説明部

鈴屋の翁は、宣長なり。君、君たり。臣、臣たり。

主語 説明語 主語 説明語 主語 説明語

第三三三節

修飾語 主部 客部 説明部 主語ニ、他語ヲ添ヘテ、其意義ヲ種々ニ修飾スルコトアリ、客語、説明語ニ於ケルモ、然リ、其語ヲ、修飾語トイフ。修飾語ハ、其添フベキ語ノ上ニ居ルヲ、正則トス。

主語ト、其修飾語トヲ合セテ、主部トシ、客語ト、其修飾語トヲ合セテ、客部トシ、説明語ト、其修飾語トヲ合セテ、説明部トス。此ノ三部、多クハ、各句ヲ成シ、部ノ長キモノハ、更ニ、數句ニ分ル。

梅の花 早く咲く。 勉むる志 愈、堅し。

修飾語 主語 説明部 句 修飾語 説明語 主部 句 修飾語 説明語 説明部 句

主部 客部 説明部

○修飾語ハ、幾語ヲモ重ヌ。

熾りなる火は、濡れたる物を、忽に乾かす。

修飾語 主語 客語 説明部 句 修飾語 説明語 説明部 句

我が園の梅の花、雪の中に、逸早く、咲き出でぬ。

主部 句 修飾語 説明部 句 客部 句 説明部 句

第三三四節

○呼掛ニ用井ル名詞モ、主語ニテ、命令、禁止ノ語モ、説明語ナリ。
(命令、禁止ノ主語ハ、多クハ、呼掛ノ名詞ナリ。)

皆人は、花の衣に、なりぬなり、苔の袂よ、乾きたにせよ。

主 客 説 主 客 説

今更に、山へ歸るな、時鳥、聲の限りは、我が宿に鳴け。

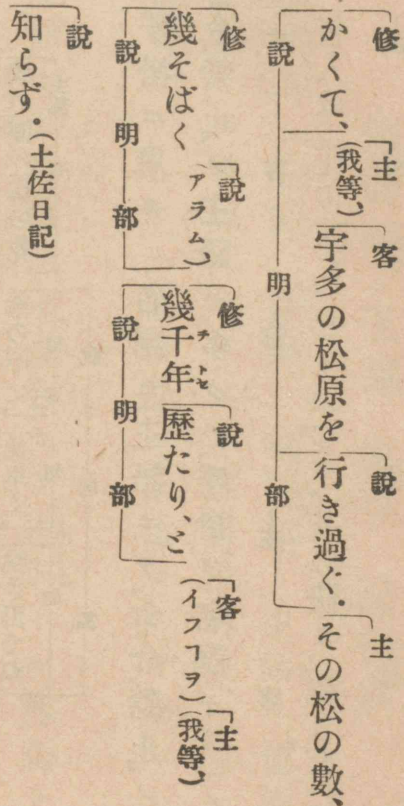
説 客 説 主 修 説 明 部

修飾語 主部 客部 説明部

第三二五節

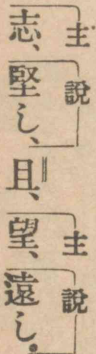
修飾部 主部 客部 說明部

○主語、客語、説明語、無クトモ、意ノ、分明ニ解セラルベキハ、省カ
ル、コアリ、左ノ如シ、(括弧ノ内ナル語ハ、補填セルナリ)

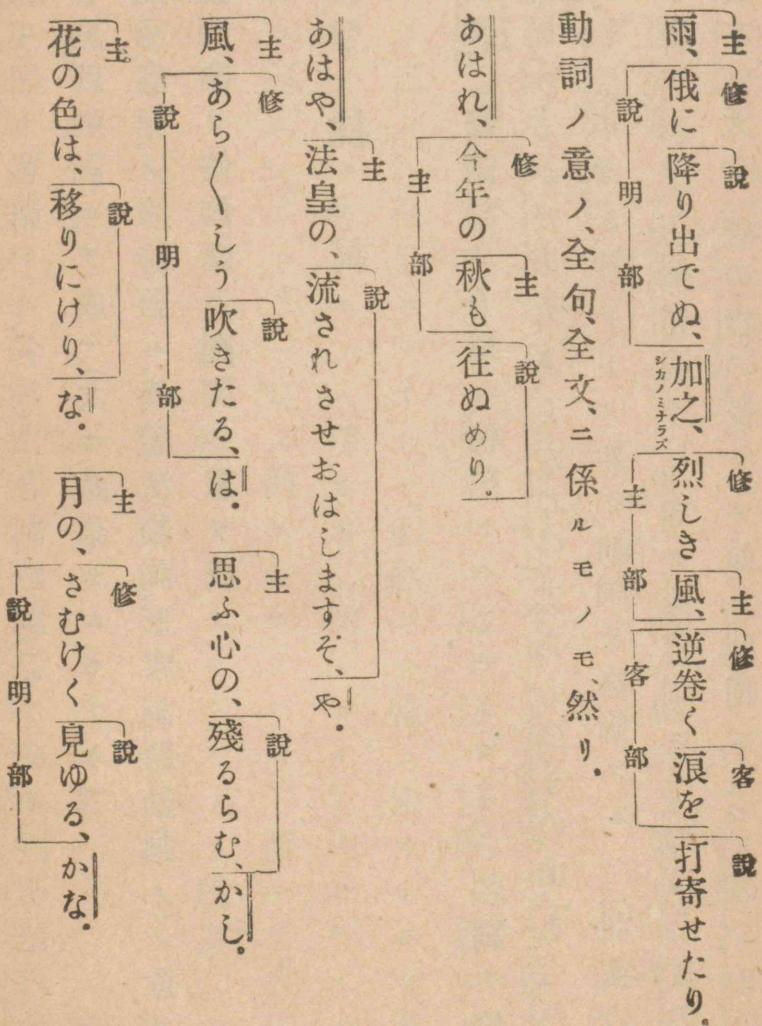


第三二六節

○接續詞ノ、全句、全文、ヲ接續スルモノハ、主部、客部、説明部ノ外
ニ立ツ。



感動詞ノ意ノ、全句、全文、ニ係ルモノモ、然リ。



○主語ト客語トハ、名詞(代名詞、數詞)ニテ成リ、説明語ハ、動詞、形容詞、助動詞ニテ成ル(共ニ、熟語ナルモアリ)。
主語、客語ノ修飾語ハ、連體法(動詞、形容詞、助動詞ノ)意ヲ成シ、説明語ノ修飾語ハ、副詞ノ意ヲ成ス。

枕詞

枕詞、修飾語ノ一種ニ、枕詞トイフモノアリ。名詞ヲ修飾スルハ、ひさかたの天、あらがねの土、あしひきの山、あらたまの年、ちはやぶる神、ナドノ如ク、動詞ヲ修飾スルハ、刈菰の亂る、稗弓引く、玉櫛笥明く、ノ如ク、形容詞ニハ、ぬはたまの黒き、眞木柱太き、菅の根の長さ、ノ如ク、副詞ニハ、あの、めの、ほが

らく、ご、つがの木の、いやつきつきに、ノ如シ。修飾スルハ、以上、四様ニ限ル。而シテ、某ノ語ニハ、某ノ枕詞ヲ冠ス、ト局レル所アリテ、用井ラル。

枕詞ハ、古代ノ用語ニシテ、其數、數百アリ、其用ハ、専ラ歌文ノ口調ノ足ラザルヲ、調ヘムトスルニ起リ、且ハ、言辭ヲ飾ルモノナリト云フ。今世ニアリテハ、和歌ニハ、常ニ用キレド、文章ニハ、其體ノ古キモノニノミ用井ル。又、用井ルト、用井ヌトハ、其場合ニ因ルノミニテ、一定ノ則アルニアラズ。而シテ、古代ノ用語ナルガ故ニ、其意義ノ解セラレヌモノモアリ、唯、某ノ枕詞ハ、某ノ語ニ用井ルモノトノミ知リテアルベシ。

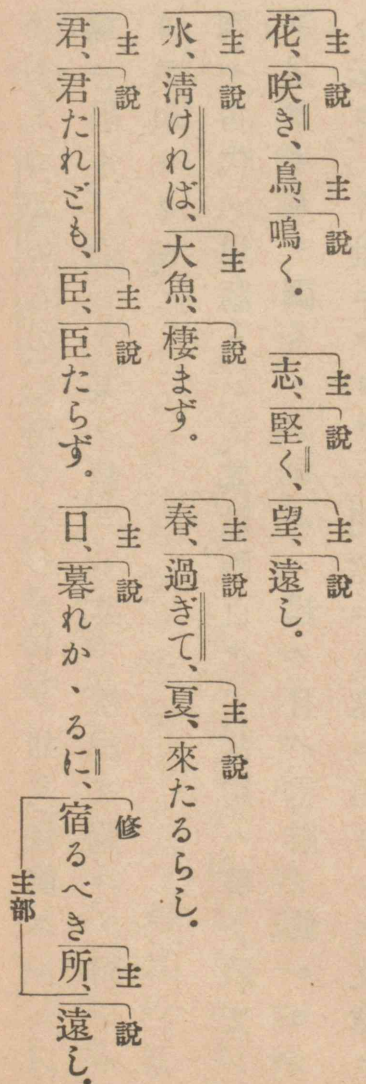
○枕詞ハ、一語、五音ノモノ、最モ多シ、上ニ列舉セルモノニ就キテ知ルベシ、又、四音ナルモアリ、空見つ、大和、不知火、筑紫、押照る、難

波、ノ如シ。

○聯構文

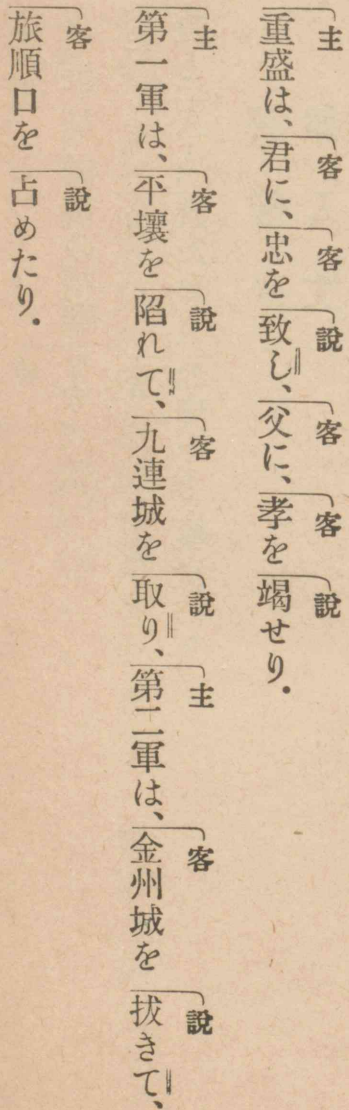
聯構文

聯構文。二文ヲ聯絡セシメテ、一文ニ構成スルヲ聯構文トイフ。然ルハ、上ナル文ノ説明語ニ、中止法ヲ用井、或ハ、且爾波ヲ添ヘテ、聯絡セシメ、文ヲ變ジテ句トス。三文以上ナルモ、然



第三二節

○一個ノ主語ニ、數個ノ客語、説明語、アルアリ。數個ノ主語ニ、一個、若シクハ、數個ノ客語、説明語、アルアリ。亦聯構文ノ一體ニテ、別テバ、數個ノ文ヲ成ス。



忠、孝は、國體の精華なり。

我も、人も、歴史をも、地理をも、學びたり。

○挿入文

挿入文

挿入文。一文中ニ、他文ヲ挿ムヲ、挿入文トス。其文ヲ、且爾波又ハ、接尾語等ニテ承ケテ、他ノ説明語ノ修飾語、又ハ、客語トスルモ、挿入文ト見ル。

肴こそ、無けれ、「人は、あづまりぬらむ。」さりぬべき物や、ある。「こ、索めノ修飾語」

第三三三節

○倒置句

倒置句

「君、肴ヲ」
いづくまでも索めたまへ。(徒然草)
影おほる、霜夜の月ぞ、秋をおきて、時おそあれ。こ、さやけかりけ
る。(新葉、六)

倒置句。主語、客語、説明語、修飾語等ノ、正當ノ位置ヲ顛倒セシメテ用ルコトアリコレヲ倒置句トイフ。

「人には告げよ、海人の釣舟。古今丸移りも行くか、人の心の。」
倒置句

十五 かねてぞ見ゆる君が千歳は、同二十見せばや、人に夜の
けしきを、金葉七訪へかし、人の花の盛りを、續古今、三思ひきや、
君なき宿を、行きて見むこは、後撰二十

此の歌は、ある人、ならの帝の御歌なり、こなむ申す、古今五、宜
も、昔の男は、棹はうがつ、波のうへの月を、舟はおそふ、海のう
ちの空を、こは言ひけむ、土佐日記

サテモ、競ヲ、宗盛年來ノ主ヲ捨テ、他人ノ門蹈マムズル者ト
思ヒケムトノ、アウナサヨ、盛衰記、三位入道入寺望み、かなはねば、
恨みもあれ、ちかじ、うき世をいこひ、誠の道に入りなむには、
こそ宣ひける、平家少將請受、安ンゾ知ラム、其事アルヲ、我窃ニ
聞ク、敵國ニ内亂アリト、知ラズ、其事ノ成就セムヤ否ヤヲ、請
フ、君ガ、分明ニ、説明セラレムトナ、

○言掛、秀句

言掛 秀句

第三、四節

言掛 秀句 同音異義ノ語ヲ、同時ニ、二様ノ意ニ用井、又ハ、上
下、二様ノ用ヲ兼テシムルトアリ、コレヲ、言掛、又ハ、秀句、トイフ、
但シ、和歌謠物、風流文、紀行文、ナド、流麗婉轉ヲ旨トスルモノニ
用井ル、記事、叙事、ノ文ニハ、用井難シ、

「いつか我が身の、をはり終尾張なる、熱田の八劔、伏し拜み、汐干
に今や、成鳴海瀉、傾く月に、道見えて、明けぬ暮れぬ、行く道
の、末はいづく、遠遠江濱名、の橋の、夕汐に、引く人もなき、捨
小舟、沈みはてぬ、身にしあれば、誰かあはれ、夕暮の、晚
鐘鳴れば、今はこて、池田の宿に、着き給ふ、太平記、二

「立ちのかれいなば(往因幡)の山の峯に生ふるまつ(松待)とし聞
 かば、今歸り來む。(古今八)世の中を、そむきにごては、來しかご
 も、なほ憂き事は、おほ多、大原の里。(新古今十七)陸奥の、いはであの
 ぶは、(岩手、信夫)えぞ得、蝦夷知らぬ、かきつくしてよ、坪の石文。(同
 不言而忍)十八淵瀨とも、いさや(知ラズ)白波、立ちさわく。(後撰九)

○結法

結法

第三三五節

結法。動詞、形容詞、助動詞ノ、一句一文ノ末ヲ結ブニ、三様ノ法
 アリ。「尋常ノ結法」そ、なむ、や、か、ノ結法、(おそノ結法)是レナリ。

第三三六節

尋常ノ結法

○尋常ノ結法。尋常、文句ヲ結ブニハ、第一活用、即チ第一終止
 法ヲ用井ル。

「戌の時に門出す、其由、いさゝか、物に書きつく、和泉の國まで、
 たひらかに、ご願ひ立つ、天津より、浦戸をさして、漕ぎ出づ、宇
 多の松原を、行き過ぐ、米、酒、あはく、與る、黒鳥(いふ)鳥、巖(いふ)の
 上に集り居り、その巖の下に、波、白く打寄す、海賊、追ひ來、こい
 ふふご、絶えず聞ゆ、かち取、黒き雲、俄に出で來ぬ、風も吹きぬ
 べし、御舟、返してむ、ご言ひて歸る、此の間に、雨、降りぬ、いごわ
 びし、かち取等の、北風悪し、ご言へば、船出さず、(以上、土佐日記)忘
 れ草植うごだに聞く、ものならば、(伊勢物語)女、打ち泣きて、寐こ
 て、(同)おのれが許(許)に、めでたき琴侍り、それにかへさせ給へ、
(枕草紙)我れ落ちにき、ご人に語るな、(古今)空しく一年を歴、專
 斷するふごを得、月、立ちにけり、夜、明けたり、日、を暮らしつ、
 名を成さす、功を立てさす、書を讀ましむ、人に撃たる、世に

捨てらる、

第三七節

○ぞ、なむ、や、か、ノ結法。若シ、文句中ニ、第二類豆爾波ノ「ぞ、なむ、
又ハ、「や、か、ノアルキハ、其末ヲ結ブニ、第二活用、即チ第二終止
法ヲ用井ル、コレヲ「ぞ、なむ、や、か、ノ係、ぞ、なむ、や、か、ノ結、トイフ。

第三八節

ぞノ結法

「我ぞ行く。行きぞわづらふ。雨さへぞ降る。我が世ぞ思ふ。
花ぞ落つる。命ぞ生くる。早くぞ過ぐる。教をぞ受くる。然ぞ
おぼゆる。花をぞ見る。友ぞ訪ひ來る。勉めてぞする。神にぞ
おはする。老いてぞ死ぬる。ひこりぞ往ぬる。我のみぞある。
家にぞ居る。今も昔も斯くぞ侍る。見るぞ善き。聞くぞ樂し
き。名をぞ取らす。利をぞ得さする。人にぞ待たる。然ぞ
あらぬ。焉ぞ取るべき。名をぞ得つる。春ぞ過ぎぬる。十年を
ぞ歴たる。今ぞ來む。きのふぞ行きし。鴈ぞ鳴くなる。緑なる。

第三九節

ひとつ草ぞぞ、春は見し、秋はいろくの、花にぞありける。舌
今、四)近くてぞ、色はまされる。青柳の、絲はよりてぞ、見るべか
りける。拾遺、二物も言はで、ながめてぞふる。山吹の、花に心ぞ、
うつろひぬらむ。同、二今日來ずば、明日は雪ぞぞ、降りなまし。
古今、二雪消の水ぞ、今まさるらし。同、六)

○「なぞハ、副詞ナレド、係トナリテ、ぞノ結法ニ從フ、なに、ぞ、ノ
約リナレバナリ、幾世しも、あらじ我身を、なぞもかく、海人の
刈藻に、思ひ亂る。古今、十八)こころならば、思はずこや、は、言ひは
てぬ、なぞ世の中の、玉禪なる。同、十九)

第三四〇節

なむノ結法

○「風になむ散る。近くなむ見ゆる。人になむ任する。身をなむ
恨むる。母をなむ戀ふる。逢はでなむ往ぬる。斯くなむある。
冬なむ寒き。これなむそれなる。無きなむまされる。家にな

第三四一節
やノ結法

むありし、入になむありける。
○花や咲く、風や吹く、斯くや思ふ、遅しこや待つ、年や暮る、敵にや畏る、身をや恨むる、思にや報ゆる、行きてや見る、入や來る、行きやする、知らずやある、夜や長き、年や久しき、惜しくやあらぬ、入にや遇はむ、風や解くらむ、櫻花、今や散るらし、思ひやせし、

第三四二節
かノ結法

○何をか取る、いかにか思ふ、花か落つる、誰にか任する、何れの時にか忘る、入か居る、友か來る、夫れかある、誰かおはする、何れか好き、何さかすべき、神代より、幾代か歴にし、きのふか花の散るを惜みし、(新古今五世の中は、何か常なる、いづれかまされる、いづくにかあらむ、いかにかせまし、けふ降る雨に、散りか過ぎなむ、(萬葉、)まだ見ぬ人の、聞きかなや

第三四三節

まむ、(萌石小夜か)ふけぬる、千鳥鳴くなり、(千載六)

○いかゞハ、副詞ナレド、係トナリテ、かノ結法ニ從フ、いかに、か、ノ約リナレバナリ、(音便ニテ濁ル、)いかゞ思へる、いかに、おぼさる、いかにすべき、いかに言ひつる、

第三四四節
こそノ結法

○こそノ結法、又、文句中ニ、第二類豆爾波ノ、こそノ加ハレルトキハ、他ニ、ぞ、なむ、や、か、アリトモ、其末ヲ結ブニ、第三活用、即チ、第三終止法ヲ用井ル、コレヲこそノ係、こそノ結トイフ、

「我こそ行け、春をこそ待て、斯くこそ思へ、花こそ落つれ、」
身をこそ恨むれ、入にこそ任すれ、ありこそ見ゆれ、父にこそ似れ、衣をこそ着れ、冬こそ來れ、行きこそすれ、戦ひてこそ死ぬれ、先きにこそ往ぬれ、待ちてこそあれ、家にこそ居れ、路こそ無けれ、あゝに物こそ、悲しけれ、かくこそあるべけ

れ、さもこそ思はるれ、入こそ見えね、えこそ行かざれ、花をこそ見つれ、夜こそ明けぬれ、日をこそ歴たれ、名にこそ立てれ、斯くこそありけれ、行きてこそ見め、雪このみこそ、花は散るらめ、逢ふまでの形見さてこそ、ごめけめ、春行くご、そよそに見ましか、跡もなくこそ、かき消ちて、失せにしか、松の音に、風の調を、任せては、立田姫こそ、秋はひくらし、〔後撰五〕

○右ノ外ニ、尙、左ノ數様ノ結法アリテ、上ニ、ぞ、や、こそ、等ノ、アルト無キトニ拘ハラズ、末ヲ結ブ。

第三四五節
命令、禁止
ノ結法

○命令、及ビ、禁止、ノ結法。動詞、助動詞ノ、命令法トナレルモノ、又ハ、禁止ノ副詞ニ修飾セラレタルモノモ、文句ノ末ヲ結ブ。
「唐人も、船を浮べて、遊ぶごふ、今日ぞ我が兄子、花鬘せよ、〔萬葉十九〕皆人は、花の衣になりぬなり、苔の袂よ、かわきだにせよ。」

第三四六節
呼掛ノ結法

〔古今、十六〕今更に、山へ歸るな、郭公、聲のかぎりは、我が宿に鳴け、
〔古今、三〕東風吹かば、勻ひおこせよ、梅の花、あるじなしとて、春を忘るな、〔拾遺、十六〕都人、さこそ待つとも、時鳥、同じ深山の、友な忘れそ、〔新拾遺、三〕己レガ欲セザル所ヲバ、人ニ施スコ勿レ、

○呼掛ノ結法。呼掛クル語意ニテ、文ヲ結ブアリ。但シ、上ニ、必ズ、の、又ハ、が、アリテ、下ヲ、形容詞ニテ結ブ場合ニ限ル。
「秋萩を、ちがらみふせて、鳴く鹿の、目には見えずて、音のさやけさ、〔古今、四〕風をだに、待ちてぞ花の、散りなまし、心づからに、うつろふが憂さ、〔後撰、三〕絶えはつる、ものさは見つ、蜘蛛の、絲をたのめる、〔ガ〕心細さよ、〔同、九〕よのみじかくて、明くる、〔ガ〕わびしさ、〔同、十二〕捨てられむあごの、あさましさよ、思ひ得たるあごの、うれしさよ。」

第三四七節
挿入文ノ結
法

○挿入文ナルハ、各自ニ結ブ。

「肴こそ、無けれ、人は、若づまりぬらむ、」さりぬべきものや、ある、こ、いづくまでも、索めたまへ、外より來る者なごぞ、殿は、いかにかならせたまへる、」なご問ふ、經聞きなごするにも、目をくばりながら、見わたる、おそ、罪や、得らむ、」こおほゆれ、」枕草子、古里を、出でにし後は、月影ヲぞ、昔も見き、」こ思ひやらる、」榮華影おほる、霜夜の月ぞ、秋をおきて、時おそあれ、」こさやけかりける、」新葉、六

第三四八節
聯構文ノ結

○聯構文ノ、數文聯絡スルモノハ、結ヲ轉ズ。

「都人、さこそ待つこも、郭公、同じ深山の、友な忘れそ、」新拾遺、三、雪かこぞ、よそに見つれど、櫻花、折りては似たる、色なかりけり、」玉葉、二、郭公、一聲ここそ、思ひしに、待ちえてかはる、我心かな、」

（續千載、三、下にこそ、人の心も、うつろふを、色にみせたる、山櫻かな、」續古今、十七年頃、善く具しつる人々なむ、別れがたく思ひて、云々、夜深けぬ、」土佐日記

○言掛ナルモ、結ヲ轉ズ。

「小夜千鳥聲こそ近く、」ナレ、鳴海瀉、傾く月に、潮や満つらむ、」新古今、六、いづくにか、今宵は宿を、借ラシ狩衣、」紐結、二、日も夕暮の、峯のあらしに、」同、十、明け暮れは、昔をのみぞ、」思、二、忍草、葉末の、露に、袖ぬらしつ、」同、十七

○呼應

呼應

第三五〇節

上下ノ語義ヲ、互ニ相應ズルヤウ、掛ケ合セテ用井ルヲ、呼應トス、呼應ニ、左ノ數様ノ法アリ、

第三五二節
自他ノ呼應

○自他ノ呼應。自動詞ハ、自動詞ト相伴ヒ、他動詞ハ、他動詞ト相伴フベク用井別クルヲ、自他ノ呼應トス。

「身を立て、道を行ひ、名を後世に揚ぐ。」(孝經) 身は立ち、道は行はれ、名は後世に揚がる。其家を齊へむとする者は、先づ其身を修む。身修りて、後に、家齊ふ。(大學)

異事ノ異行ヲ記シ、動作ノ反對ヲ表スルニハ、自他、ヲ互用ス。

「體操終らば、生徒唱歌を始めむ。」(生徒唱歌を終へば、體操、始らむ) 視れども見えず、聽けども聞えず、戰へば勝ち、攻むれば取る、

第三五三節
所能ノ呼應

○能所ノ呼應。能相、所相、各相伴ハシムルヲ、能所ノ呼應トス。「我、他を救ふ。他、我に救はる。」他、我を誠む。我、他に誠めらる。日本、支那を攻めて、其地を取りたり。支那、日本に攻められて、其

地を取られたり。

異事ノ異行ヲ記スニハ、能所、ヲ互用ス。

「賊、人家に入りて、人家、財物を盗まれたり。」左軍は勝ち、右軍は敗られたり。

第三五四節
時ノ呼應

○時ノ呼應。現在、過去、未來、各相伴ハシムルヲ、時ノ呼應トス。「國に賢君あるは、人民の慶福なり。」國に賢君ありしは、人民の慶福なりき。國に賢君あらむは、人民の慶福ならむ。

第三五五節

且爾波ノ「ば、こも、ごも、ごも」ノ未定、既定ナルモ、時ノ呼應ニ准ズ。「今日、空、晴れたれば、人々、出で行きたり。」昨日、空、晴れしかば、人々、出で行きき。明日、空、晴れば、人々、出で行かむ。學校を建つことも、基本金を備へずば、維持し難からむ。學校を建てたれど、基本金をも備へたれば、維持し難からず。

第三五五節

呼應

現在、過去、未來、各自ニ、此ノ時ヨリ、彼ノ時ヲイフニハ、互用ス。國に賢君あるは、永く、人民の慶福となりなむ。學校を建てたれども、基本金を備へずば、維持し難からむ。學校を建て、基本金をも備へたれば、維持し難からざらむ。

第三五六節

中止法ナルハ、末ノ語ノ「時」ニ從フ。

「身を立て、道を行ひ、名を後世に揚げたり。身を立て、道を行ひ、名を後世に揚げむ。」小學を終へば、中學を歴て、大學に入らむ。小學を歴て、中學を終へしかば、大學に入りき。

第三五七節

反語ノ呼應

○反語ノ呼應 疑ハ「や、か、ナ用」ヲテ、(甲)世の中は、何か常なる。(乙)秋の別れは惜しくやはあらぬ。ナドノミイフ文ハ、(甲)世ノ中ニテハ、何物が常住ナルカ。(乙)秋ノ別レハ、惜シクハアラヌカ。ト單純ニ疑問スルマデノ意ナリ。然ルニ、(甲)下ニ「飛鳥川、き

第三五八節

のふの淵ぞ、けふは瀬なる。ト「變遷ノ常」ナラヌ意ヲ確言スル。ハ、コレニ呼應シ反動シテ、何か常なる、ノ疑問ハ、却テ打消ニ變ジテ、何も常ナラズ、ノ意トナリ、コレニ反シテ、(乙)上ニ、もろごもに、なきて留めよ、きりぐす、ト「別レノ惜シキ意」ヲ確言スル。ハ、惜しくやはあらぬ、ト打消ノ疑問ハ、却テ確定ニ變ジテ、惜シクアラウゾ、ノ意トナル、コレヲ反語トイフ。單純ノ疑問ナルト、反語ナルトハ、湊合セル他ノ文句ノ意ニ呼應シテ、分ル。反語ニ用井ル「や、か、ニハ、感動詞」ノ「は、又ハ、も」ヲ添ヘテ、やは、かは、かも、かも、トモ用井ル。(以上、六様ニ限ル) 他語ノ上ニ居ルモノ。 見てのみや、人に語らむ。見テノミ語ラムカ、山櫻、手毎に折りて、家苞にせむ。古今、二植るし時、花まちごほに、ありし菊、うつろふ秋

に、あはむごや見し。ト見シカ、古今五
見ザリキ

「そこひなき淵やはさわく、サワグカ、
サワガズ山川の浅き瀬にこそ、あだ
波は立て。」古今十四郭公、聲も聞えず、山彦は、外カに鳴く音を、こた
へやはせぬ。何トテ、答ヘハセ、古今三
ヌヅ、答ヘヨカシ

○「朝露は、消え残りても、ありぬべし、誰れかこの世を頼みは
つべき。頼ミハツベキカ、頼
ミハツベカラズ伊勢物語 いつはりご、思ふものから、今更に、
誰が誠をか、我は頼まむ。頼マムカ、古今十四
頼マジ

「君をのみ、思ひこし路の、ちら山は、いつかは雪の、消ゆる時あ
る。アルカ、
ナシ古今十八」石見瀉、何かはつらき、何ガツラキカ、
ツラカラズつらからば、う
らみがてらに、來ても見よかし。(拾遺、十九)

第三五九節

や。やは。やも。か。かは。かも。他語ノ下ニ居ルモノ。

「咲かざらば、櫻を人の、折らましや、折ラ櫻の仇は、櫻なりけり。」

(後拾遺、二十)人の上にだに、言ふことなかりし人なり、いはむや、
更に、親オヤの上に言ひてむや。イハ、
宇津保、たゞこそ思はざらむや、オモ、
ハム、
習はじや、ナラ、
ハム、亦、悦ウレバシカラズヤ、ヨロコ
バシ、我、豈ニ敢テセムヤ、敢テ、
セズ、
「散る花の、なくにしこまる、ものならば、我れ鶯に、劣らましや
は、オト、
ラジ、古今、二今更に、雪降らめやも、降ラかけろふの、燃ゆる春
日、こなりにしものを。」(新古今、二)

○「かゝる夜の月に、こゝろやすく夢みる人は、あるもの(ナル)
か。アルモノ、
ナラズ」(横笛)うき世をば、そむかばけふも、そむきなむ、明日も
ありこは、頼むべき身(ナル)か。身ナ、
ラズ、(拾遺、二十)
「悲しさを、かつは思ひも、なくさめよ、誰もつひには、こまるべ
きかは、トマルベ、
カラズ」(千載)九かはるは人の、心のみ(ナル)かは、ノミナ、
ラズ、(詞花、七)
若ばく、見こも、飽かむ君(ナル)かも、君ナ、
ラズ、(万葉、二十)

第三六〇節

○又「なんぞ驚かざらむ、オドロいづくんぞ、然らむ、然ラザいかんぞ、せざる、セヨ、」ナドモ、や、か、無ケレモ、上ニ、疑辭アルガ故ニ、反語トナル。(疑辭ノ下ニハ、反語ノ「や」モ付クナシ)

第三六一節

特性副詞ノ呼應

○特性副詞ノ呼應。副詞ノ中ニハ、一種特性ノモノアリテ、其意義ヲ、下ノ語ニ係ケテ、一定ノ用法ヲ起サシムルモノアリ。コレヲ、特性副詞ノ呼應トス。

第三六二節

をさく。下ハ、必ず、打消ノ語ニテ承ク。

「をさく立ちおくれず、世の中の事、をさく聞えぬを、をさく劣るまじく、をさく出でまじらひ給ふことなし。」

第三六三節

よも。よに。よにも。下ニハ、打消ノ「じ」ト限ル。

「よも知らじ、よもながらへじ、今は逃ぐこも、よもにがさじ。」よに逢坂の關はゆるさじ。(後拾遺、十六)

第三六四節

いさ。下ニハ、知らず、トイフ語ト限ル。

○決して、絶えて、少しも、毫も、「も」ナドモ、下ハ、打消ニ限ル。「人はいさ、心も知らず、淵瀬こも、いさやゑら(言掛)波立ちさわく。(後撰、九)

第三六五節

え(得)。下ヲ、打消ノ語又ハ、反語ニテ承ク。

「え言はず、えぞ知らぬ、えこそ見わかぬ、えあらじ、」さらく。に。亦、下ヲ、打消又ハ、禁止ノ語、反語等ニテ承ク。

第三六六節

「さらく思はず、さらく、厭ふべきにあらず、ゆめ、さらくに、人に見せ給ふな、(宇津保、俊隆)

第三六七節

ゆめ(努力)。下ニハ、禁止又ハ、打消ノ語ト限ル。

「ゆめ、見せ給ふな、ゆめ、な乗りそ、ゆめく、疑ふこと勿れ、ゆめく、畏るゝことあるべからず。」

て備へば、昨日行き、去年失せてけれども、
明日行かば、來年逢はむ、

○略語略句

略語 略句

第三七四節

略語 略句 一句一文ノ中ニ、語句ヲ省略スルコトアリ、コレヲ、
略語又ハ、略句ナドイフ。
語句ヲ省略スルニモ、法アリ、省略ストモ、分明ニ解セラルベキ
ヲ省略ス。例へバ、博愛を仁こいふ、ナドイフ文ニ、主語ハ無ケ
レモ、人トイフ主語ノ、自ラ文外ニ解セラル、ハ、動詞(いふ)ニハ、
主語アルベキモノナレバナリ、斯ク、主語ヲ省略セル語句、常ニア
リ、スベテ、説明語(動詞、形容詞、助動詞)アリテ、主語ナキハ、必ず、文
外ニアルベキモノナリ、ト知ルベシ。 他動詞ハ、必ず、をヲ要ス、

サレバ筆執りて、字書く、トイフトモ、をハ、言外ニ聞エ、コレヲ
ハ、必ず結法ヲ要ス、サレバ、人々、感じあへりこそ、其振舞、實に、勇
まじかりここにこそ、ナド記シタリトテ、下ニ結法ノ略セラ
レタルコト、解セラルベシ。 左ニ、成句、成文ノ若干ノ例ヲ示ス。

第三七五節

○フントキコレモ文時、維茂が舟の、おくれたりし(ガ)、ならし津より、室津に着きぬ、(土佐日記)ある人の子
の、わらはなる(ガ)、ひそかにいふ、まろ、この歌のかへしせむ、とふ。(同)

第三七六節

○夜や暗き、路(ニ)や惑へる、郭公、我が宿をしも、過ぎがてに鳴く、(古今、三)古今(ニ)も、聞か
ず、和漢(ニ)も、ためしなし、(正統記)夏(ニ)は、麻布を用ゐ、冬(ニ)は、綿布を用ゐる、

第三七七節

○花(チ)散らす、風の宿り(チ)は、誰か知る、我に教へよ、行きて恨みむ、(古今、二)植ゑし時、花
見ひとしも、思はぬに、咲き散る(チ)見れば、齡老いにけり、(後撰、二)詩(チ)も作り、歌(チ)も詠
む、茶(チ)は飲めど、酒(チ)は飲まず、

第三七八節

○この歌は、柿本人麻呂が(歌)なり、前の守も、今の(守)も、もろとも下りて、今のあるヒ
も、前の(アルシ)も、手取りかはして、(土佐日記)日のうちに、物をふたゝび、思ふかな、疾く明け

第三七九節

ぬる(時)と、遅く暮る(時)と。(拾遺、十二)長さ(モノ)を取りて、短き(モノ)を捨つ、
○「めぐりあひて、見しやをれ(ナル)とも、わかぬまに、雲がくれにし、夜の月影(ナルカナ)。(新古今、十六)みぞれ降り、曇れる冬の、晴れずのみ、つきせぬものや、まろが身の憂さ(ナルキ)。(好忠集、コレコソ、敵ノ運ノ盡クル所ノ死狂ヒ(ナル)ヨ。(太平記、七)誰れ聞けど、鳴く雁がね(ナル)ぞ。再びとだに、來べき春(ナル)かは、三笠の山に、出でし月(ナル)かも。峰の花(ナル)かな。彼れぞ、聳の少將(ナル)な、ありがたの世(ナリ)や。」讀ムフ、數回(ナリ)。(今日休業(ス))

第三八〇節

○「人々、感じあへりとぞ(イヘル)思ひいづるにつけて、かくなむ(詠ミケル)神の助けあるにや(アラム)仁政の、民を服するに因るにか(アラム)人の疑も解けたり、とか(イフ)や、いと、勇ましきことにこそ(アレ)常に逢見む、ことをのみこそ(思ヘ)。」

第三八一節

○「谷の戸を、閉ぢやはてつる、鶯の、待つに音せで、春も過ぎぬる(ハ)。(拾遺、十六)吹く風の、さそふものとは、知りながら、散りぬる花の、強ひて戀しき(カナ)。(後撰、三)櫻花、散るとも知らで、月影を、(花)ある(コトヨ)とはかなく、思ひける哉。(朝恒集)いかにして、出で、は行さし(ヤ)と問ふ。郭公、など(カ)我が宿に、一聲もせぬ。時しも(コソ)あれ。今日しも(コソ)あれ。」

第三八二節

○「五月來ば、鳴きも舊りなむ、郭公、まだしきほどの、聲を聞かば(ヨケム)や。(古今、三)ひさかたの、月の桂も、秋はなほ、もみぢすれば(然ルニ)や、照りまざるらむ。(同、四)ちか(出テ)させ給へ、と、いひて、前に立ちて、導きて行く。(宇治拾遺、六)

第三八三節

○「老いぬれば、今年ばかりと、思ひこし(モノ)ち、また秋の夜の、月を見る哉。(新敕撰、十六)人の草假名かきたる草紙取りいで、御覽す、誰が(カキタル)にかあらむ。(枕草紙、九)國人の心の常として、今は(カギナリ)とて、見えずなるを、(土佐)かゝるなげきの、世になくやは(アル)とおぼしなしつ、(葵)けしうも、思の外にも(アルカナ)とあきれて、(若菜)露の命、惜しと(イフ)にはあらず、君をまた、見でや(死ナム)と思ふぞ、悲しかりける。(拾遺、八)人知れず、今や(アル)今や(アル)と、ちはやぶる、神さぶるまで、君をこそまで。(新古今、十九)我が君は、千代に八千代に、さゞれ石の、いはほどとなりて、苦のむすまで(マシマセ)。(古今、七)我が衣手に、雪は降りつ、(アリ)かはるは人の、心のみ(ナル)かは、唯、歎息するのみ(ナリ)。(ま)してこれを(言ハム)や、」

第三八四節

○「昔物語の(如キ)こゝちもするかな。(手習)御消息も、いか(アラム)など聞え給へど、(繪合)うつしか、出でさせ給は(ヨカラム)などさこえとすするに、(枕草紙)里にまかりいで、まづせらせ給ひなむに(シカツ)などさゝめく。(横桂)この月は、さりととも(オハセム)と宮人も待らさこえ、(紅葉賀)劍を胸におしあて、今はかう(刺サム)とぞ見えたりける。(平家)

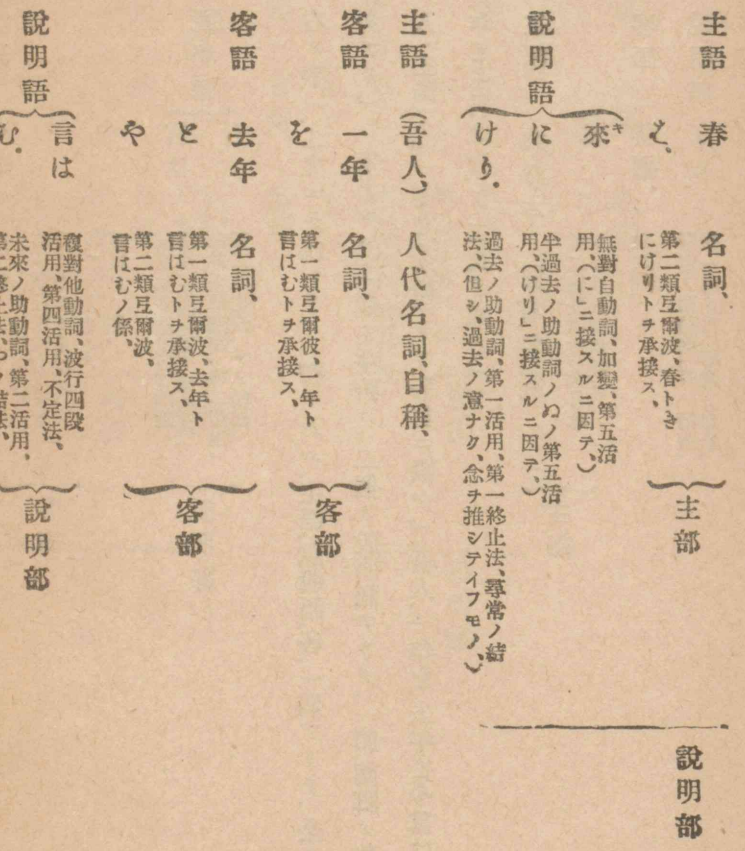
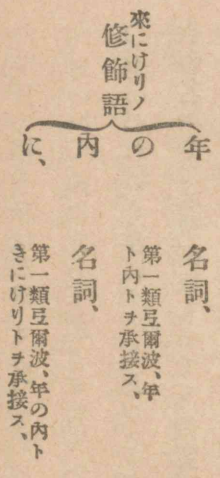
○解剖
解剖

第三八五節

解剖 成文成句ヲ解キテ、其組織ヲ講ズルヲ、文章ノ解剖トス、
 コレ前陳ノ構文諸法則ヲ、反覆シ會得セシムル用ナリ。
 先ヅ、文句中ノ單語ヲ、個々ニ解キテ、各語ノ種類、意義、用法、ヲ講
 シテ、他語トノ關係ニ及ブ、コレヲ「語脈ノ解剖」トス。 次ニ、主部、
 客部、説明部、等ヲ分類シテ、其所屬ヲ講シ、終ニ、文體（聯構文、挿入
 文等）句體（倒置句、言掛等）ニ及ブ、コレヲ「文脈ノ解剖」トス。

語脈ノ解剖
文脈ノ解剖

第三八六節



客語 今年 名詞

と
や
第一類互爾波、今年ト
言はむトヲ承接ス、
第二類互爾波、
言はむノ係

客部

説明語

言はむ
復對他動詞、波行四段
活用、第四活用、不定法、
未來ノ助動詞、第二活用、
第二終止法、ヤノ結法、

説明部

右ノ歌ハ、二文ニテ成レリ。初ナルハ、主語、説明語、各、一個アリテ、全キ文ナリ。(内ニ倒置句アリ) 末ナルハ、一個ノ主語ニ、二個ノ説明語アリテ、一頭、兩脚ノ聯構文ナリ、若シ、吾人(主語)ト、一年を(客語)ト、ヲ各自ニ設ケバ、吾人、一年を、去年とや言はむ。吾人、一年を、今年とや言はむ。二文ヲ成スベシ。

第三八七節

主語 大日本 固有名詞

は、
第二類互爾波、大日本
トナリトヲ承接ス、

主部

客語 神國 名詞

説明語 なり

指定ノ助動詞、第一活用、
第一終止法、尋常ノ結法、

主語 天祖 名詞

開キ、
修飾語 はじめて、 副詞、開キヲ修飾ス、

客語 基 名詞

を

説明語 開キ

第一類互爾波、基ト
開キトヲ承接ス、
單對他動詞、加行四段、
活用、第五活用、中止法、

説明部

主語 日神 名詞

傳ヘ、
修飾語 長く、

客語 統

を

説明語

傳ヘ

形容詞、志幾活用、第四活
用、副詞法、傳ヘヲ修飾ス
第一類互爾波、統ト
傳ヘトヲ承接ス、
復對他動詞、波行下二段
活用、第五活用、連用法、
無對自動詞、波行四段活用、第一
活用、第一終止法、尋常ノ結法、

説明部

我 人代名詞、自稱
 第一類豆爾波、我
 ト國トヲ承接ス、

修飾語 國 名詞
 第一類豆爾波、國ト
 ありトヲ承接ス、
 第二類豆爾波、國に
 トありトヲ承接ス、

の み 指示代名詞、近稱、豆爾波
 ノのト合シテ、事ヲ指ス、

主語 事 名詞
 無對自動詞、長變、
 第五活用、中止法、

説明語 あり、

無し、 異朝 名詞
 第一類豆爾波、異朝
 ト無しトヲ承接ス、
 第二類豆爾波、異朝に
 ト無しトヲ承接ス、

は、 指示代名詞、中稱、豆爾波ノ
 のト合シテ、たぐひヲ指ス、

修飾語 その 有對自動詞、波行四段
 活用、第五活用、名詞法、

主語 たぐひ、形容詞、志幾活用、第一活用、
 第一終止法、尋常ノ結法、

説明語 無し、

主部 説明部

この故よ、 接續詞、

主語 (我) 人代名詞、自稱、 主部

(等) 接尾語、名詞ニ接シテ名詞
トシ、數アルチイフモノ

客語 (大日本) 固有名詞、 客部

(を) 第一類豆爾波、大日本
トいふトヲ承接ス、

客語 神國 名詞、 客部

と 第一類豆爾波、神國
トいふトヲ承接ス、

説明語 復對他動詞、波行四段活用、第二
活用(なり)ニ接スルニ因テ、
指定ノ助動詞、第一活用、
第一終止法、尋常ノ結法、 説明部

なり、

右ハ、四個ノ文ニテ成レリ。(主語ト結法トヲ見ヨ) 第一ナルハ、冒頭ニ、大旨ヲ述べ、第二ナ

ルハ、二文ノ聯構文ニテ、第一文ノ理由ヲ解説シ、第二ナルモ、二文ノ聯構文ニテ、倒置句アリ、且、挿入文ニシテ、第二文ノ「長く傳へ給ふ」ノ意ヲ敷衍シ、而シテ、第二文ト第四文トヲ

「此の故に」ニテ、接續シテ、第四文ハ、第一文ノ旨ヲ確定ス。

解剖

○左ノ文ノ語脈ヲ解剖スベケレバ、文脈ヲ解剖シテ、試ルベシ。
「あはれ、(彼)旅人に(テ)あそあ(ル)なれ、(我)彼ニあはし、(宿)ヲ假さむ、かし。」(宇津保俊蔭)

「あはれ」ハ、感動詞ナリ。「彼」ハ、人代名詞、他稱ナリ。「は」第二類互爾波、かれト「ある」トヲ承接ス。「旅人」名詞ナリ。「にて」第一類、第三類ノ互爾波ノ合ヒタルニテ、「旅人」ト「ある」トヲ承接ス。「こそ」第二類互爾波、旅人にてト「ある」トヲ承接シテ、「なれ」ノ「かゝり」ナリ。「ある」無對自動詞、良變第二活用(なれニ接スルニ因リテ)。「なれ」詠歎ノ助動詞、なりノ第三活用、第三終止法、こそノ結法。「我」人代名詞、自稱。「彼」前ナルト同ジ。「に」第二類互爾波、彼ト「假さむ」トヲ承接ス。「あはし」副詞、假さむヲ修飾ス。「宿」名詞。「を」第一類互爾波、宿ト「假さむ」トヲ承接ス。「假さ」復對他動詞、佐行四段活用、第四活用、不定法。「む」未來ノ助動詞、第一活用、第一終止法、尋常ノ結法。「かし」感動詞。

○左ノ歌ノ文脈ヲ解剖スベケレバ、語脈ヲ解剖シテ、試ルベシ。
「古里を出でにし後は、月影ぞ、昔も見さこ、思ひやらる。」
此ノ如キ交錯セル語句ヲ解剖セムニハ、先ヅ、一首中ノ動詞ヲ求メテ摘ミ出ス。一首中ニ、

「出づ、見る、思ふ、トイフ三個ノ動詞アルヲ認ム。動詞(説明語)ハ、主語ヲ要シ、又、客語ヲ要スルモアリ。因テ、省畧セル語ヲ補ヒテ、解剖スレバ、左ノ三文ヲ形作ル。

(イ) 我れ、古里を出でにさ。 (ウ) 我れ、月影をば、昔も見さ。

(は) 我れ、月影をぞ、思ひやらる。

(イ)ノ文ノ末ノ「さ」ヲ、其連體法ナル「し」ニ變ジテ、全文ヲ「後」トイフ名詞ノ修飾語トシ、「は」ノ互爾波ヲ添へ、全文ヲ句トシ、全句ヲ、更ニ「思ひやらる」ニ接續セシメテ、其修飾語トス。(ウ)ノ文ハ、元ト挿入文ナルヲ、「と」ノ互爾波ニテ承ケテ、「思ひやらる」ニ接續セシメテ、其修飾語トス。

(は)ノ文ハ、「我」ヲ主語、「月影」ヲ客語、「思ひやらる」ヲ説明語トシテ、主腦ノ文ヲ成シ、而シテ、(イ)(ウ)ノ二文ヲバ、共ニ、説明語「思ひやらる」ノ修飾語トシ、合シテハ、説明部トス。

我れ、月影をぞ、古里を出でにし後は、昔も、それをば見さ、と思ひやらる。

第三九〇節

○左ノ文ニ就キテ、語脈ヲモ文脈ヲモ、解剖シテ試ルベシ。
「父こも、師こも思ふは、養はれ、且、教へられたるに因る。」

○文中符號

文中ノ符號

第三九一節

談話ニテハ、聲ヲ斷續セシメテ、語意ノ斷續ヲ示スコトヲ得レド、
文ニ書キツ、クルキハ、語句ノ斷續、識別シ難クシテ、誤解スル
コトアリ、因テ、種々ノ符號ヲ付シテ、標識トス。

第三九二節

文ノ行間、處々、字ノ右脚邊ニ付スルモノ。コレハ、讀ムニ、
暫シ、聲ヲ切ルベキヲ示スナリ、コレヲ、讀點、又ハ、よみ、トイフ。
此ノ點ハ、上下ノ語意ノ相離ルベキ所、又ハ、文、長ク連リテ、讀
讀ニ、便好カラヌ所ニ付ス。

第三九三節

コレモ、字ノ右脚邊ニ付スルモノ。コレハ、文意ノ、一結了

第三九四節

セルヲ示スモノナリ、コレヲ、句點、又ハ、きり、トイフ。
字ノ左脚ニ付スルモノ。(句點ト共ニ付ス)コレハ、段落ヲ
示スモノニテ、勾畫トイフ。段落トハ、一文、或ハ、數文、相連リ
テ、文意ノ、一層廣ク完結シタル所ヲイフ。

一部ノ書ヲ大別シテ、篇トシ、篇ヲ大別シテ、章トシ、章ヲ大別シテ、節トス(必シモ、此ノ別
ニ據ラザル書モアリ)。「段落」ハ、節ニ同ジク、或ハ、節中ノ大別トモス。

第三九五節

斯ク、小キ勾畫ヲ、語句ノ右肩ト左脚トニ付スルハ、他書ヨ
リ引用挿入セル語句、又ハ、文中ノ人ノ談話ノ語句、ナドヲ示
スナリ、或ハ、眼目ノ語句ノ長キモノニモ付ス。

第三九六節

(一)語句ノ上下ニ付ス、コレヲ、括弧トイフ、本文ト註釋文トノ
別ナナリ。

第三九七節

○行頭ニ付スル大圈ナリ、數文、相連ナル中、用井テ別ツ、

文中ノ符號

第三九八節

單柱。文中ノ眼目ノ語句ノ右旁ニ付ス。

雙柱。右ニ同シ。

第三九九節

實尖點。行文ノ右旁ニ付ス、コレヲ批點トモイフ、文句中ノ注意スベキ所又ハ佳境ニ入レル所ヲ示ス。

虛尖點。右ニ同シ。

圈點。右ニ同シ、但シ、一層重キニ付ス。

第四〇〇節

○漢文ニモ符號アリ。「讀書、得行之、不可不行、コレヲ鉤挑トイフ」未嘗畢其業、有阜越衆人者、ナドナリ、スベテコレヲ反點トイフ、又、「上、中、下、甲、乙、丙、丁、」等ヲモ用キル。○文中ニ帝王、朝廷、高貴ノ人ナドニ係ル稱號等ノ出デタルキニ、敬ヒテ、其上ニ、一字、或ハ、二字ヲ關キテ明ケオクコトアリ、コレヲ關字トイフ。

第四〇一節
闕字

中等教育 日本文典 大尾

明治三十年一月五日印刷
明治三十年六月九日發行
明治三十年七月一日第卅五版發行

著者兼發行者

印刷者

印刷所

發賣所

發賣所

發賣所

中等教育日本文典附

定價金參拾錢

大正七年
臨時定價
參拾五錢

大槻文

東京市下谷區上根岸町

野村宗十郎

東京市京橋區築地三丁目十一番地

東京樂地活版製造所

東京市京橋區築地二丁目十七番地

吉川半七

東京市京橋區南傳馬町一丁目

三木佐助

大阪市心齋橋筋北久寶寺町角

小林新兵衛

東京市日本橋區通貳丁目

師範學校
中國語教科用校
明治三十年七月五日
文部省檢定濟

版權所有

